Ⅲ 自然科学分析

1 平成24年度分 放射性炭素年代測定(AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

中野遺跡は、岩手県大船渡市三陸町越喜来字仲崎浜121番地1ほか(北緯39°6′34″、東経141°51′39″)に所在する。測定対象試料は、3号住居跡埋土下位出土炭化物(1:IAAA-122815)、4号住居跡埋土上位出土炭化物(2:IAAA-122816)、21号土坑埋土下位出土炭化物(3:IAAA-122817)の合計3点である(表1)。試料が出土した遺構は、縄文時代中期の遺物包含層であるⅡ~Ⅲ層下の地山(Ⅳ層)で検出された。

(2) 測定の意義

炭化物が出土した遺構の埋没時期や出土土器が廃棄された時期を検討する。

(3) 化学処理工程

- 1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2)酸-アルカリ-酸(AAA:Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1 \text{mol}/\ell$ (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001 Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1 Cに記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO2) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、 測定装置に装着する。

(4) 測 定 方 法

加速器をベースとした 14 C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 14 Cの計数、 13 C濃度(13 C/ 12 C)、 14 C 濃度(14 C/ 12 C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

1) δ ¹³C は、試料炭素の¹³C 濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- 2) 14 C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 14 C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 14 C年代は δ 13 Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 14 C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 14 C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の 14 C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- 3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14 C濃度の割合である。 pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14 Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も δ 13 Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- 4)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の『C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、『C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が『C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 δ 1。 C補正を行い、下一桁を丸めない『C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、IntCal09でのない。「IntCal09でのかった。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表IntCal09で表される。

(6) 測 定 結 果

試料の14C年代は、3号住居跡埋土下位出土炭化物(1)が5760±30yrBP、4号住居跡埋土上位出土炭化物(2)が3870±20yrBP、21号土坑埋土下位出土炭化物(3)が4020±20yrBPである。暦年較正年代(1 σ)は、1が4680~4552cal BC、2が2455~2295cal BC、3が2571~2489cal BCの間に各々複数の範囲で示され、1が縄文時代前期前葉頃、2が縄文時代後期初頭頃、3が縄文時代中期末葉頃に相当する(小林編2008)。遺構検出面の上位に当たる遺物包含層の遺物が示す時期より新しい年代を示す試料が含まれることから、新しい炭化物が混入した可能性を含め、上層との関係について検討する必要があると考えられる。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 1

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補	δ ^{is} C補 <mark>正あり</mark>		
例 足 笛 勺				龙生力仏	0 C (700) (AIVIS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)		
IAAA-122815	1	3号住居 埋土下位	炭化物	AAA	-28.30 ± 0.53	5,760 ± 30	48.81 ± 0.18		
IAAA-122816	2	4号住居 埋土上位	炭化物	AAA	-29.32 ± 0.38	$3,870 \pm 20$	61.76 ± 0.19		
IAAA-122817	3	22号住居 埋土下位	炭化物	AAA	-27.42 ± 0.38	4,020 ± 20	60.66 ± 0.18		

[#5531]

表2

測定番号	δ ¹³ C補	前正なし	暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
例是笛勺	Age (yrBP)	pMC (%)	音牛蚁正用(yībr)	10 倍平八蛇四	20/百千八吨四	
IAAA-122815	5,820 ± 30	48.49 ± 0.17	5,760 ± 29	4680calBC - 4637calBC (25.2%) 4619calBC - 4552calBC (43.0%)	4694calBC - 4536calBC (95.4%)	
IAAA-122816	3,940 ± 20	61.21 ± 0.18	3,871 ± 24	2455calBC - 2419calBC (18.3%) 2406calBC - 2377calBC (16.5%) 2350calBC - 2295calBC (33.4%)	2464calBC - 2286calBC (94.2%) 2247calBC - 2236calBC (1.2%)	
IAAA-122817	4,060 ± 20	60.35 ± 0.17	4,016 ± 23	2571calBC - 2547calBC (24.0%) 2540calBC - 2513calBC (29.1%) 2504calBC - 2489calBC (15.1%)	2577calBC - 2475calBC (95.4%)	

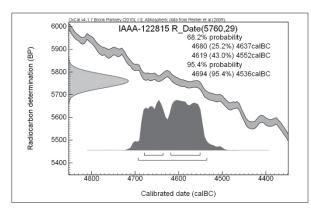
[参考值]

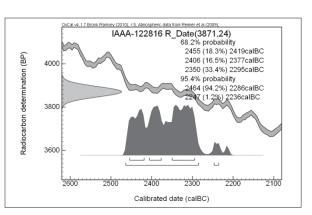
参考文献

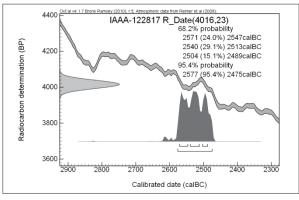
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363







【参考】暦年較正年代グラフ

2 平成25年度分 放射性炭素年代測定(AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

中野遺跡は、岩手県大船渡市三陸町越喜来字仲崎浜121ほか(北緯39°06′41″、東経141°51′11″)に所在する。胆沢川の支流、前川北岸の段丘上に立地し、遺跡から0.5km南東に前川が流れる。測定対象試料は、竪穴住居跡と土坑から出土した炭化材、土器付着炭化物の合計4点である(表1)。土器付着炭化物は、いずれも土器の外面から採取した。

(2) 測定の意義

試料が採取された遺構の埋没時期や土器の年代を明らかにし、相互の関係を検討する。

(3) 化学処理工程

- a. メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- b. 酸-アルカリ-酸(AAA:Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- c. 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO2)を発生させる。
- d. 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- e. 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- f. グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、 測定装置に装着する。

(4) 測 定 方 法

加速器をベースとした 14 C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 14 Cの計数、 13 C濃度(13 C/ 12 C)、 14 C濃度(14 C/ 12 C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(14 CNII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算 出 方 法

- a. δ ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度(13 C/ 12 C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- b. 14 C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 14 C濃度が一定であったと仮定して測定され、 1950年を基準年 (0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 14 C年代は δ 13 Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 14 C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 14 C年代の誤差(\pm 1 σ)は、試料の 14 C年

代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- c. pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14 C濃度の割合である。 pMCが小さい (14 Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (14 Cの量が標準現代炭素 と同等以上) の場合Modernとする。この値も δ 13 Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- d. 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{\text{H}}$ C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{\text{H}}$ C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{\text{H}}$ C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、 $^{\text{I}}$ 標準偏差($^{\text{I}}$ 0 σ =68.2%)あるいは2標準偏差($^{\text{I}}$ 2 σ =95.4%)で表示される。グラフの縦軸が $^{\text{H}}$ C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $^{\text{I}}$ C補正を行い、下 $^{\text{I}}$ 桁を丸めない $^{\text{H}}$ C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、 $^{\text{I}}$ IntCall $^{\text{I}}$ 3 $^{\text{I}}$ 4 $^{\text{I}}$ 5 $^{\text{I}}$ 6 $^{\text{I}}$ 6 $^{\text{I}}$ 6 $^{\text{I}}$ 7 $^{\text{I}}$ 7 $^{\text{I}}$ 7 $^{\text{I}}$ 8 $^{\text{I}}$ 8 $^{\text{I}}$ 9 $^{\text{I}}$ 9 $^{\text{I}}$ 1 $^{\text{I}}$ 1 $^{\text{I}}$ 1 $^{\text{I}}$ 1 $^{\text{I}}$ 1 $^{\text{I}}$ 2 $^{\text{I}}$ 1 $^{\text{I}}$ 2 $^{\text{I}}$ 2 $^{\text{I}}$ 1 $^{\text{I}}$ 2 $^{\text{I}}$

(6) 測 定 結 果

測定結果を表1、2に示す。

試 料 の¹⁴C年 代 は、No.1が4010±30yrBP、No.2が4060±30yrBP、No.3が4000±20yrBP、No.4が3890±30yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、古い方から順にNo.2が縄文時代中期後葉から末葉頃、No.1、3が中期末葉頃、No.4が後期初頭頃に相当する(小林編2008)。

試料の炭素含有率を確認すると、炭化材No.1、2は2点とも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。土器付着炭化物の炭素含有率は、No.3が49%、No.4が37%で、炭化物の炭素含有率としてNo.3は適正かわずかに低い値、No.4はやや低い値となっているため、測定された炭素の由来に若干注意を要する。

表 1 放射性炭素年代測定結果 (δ¹3C補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補	δ ¹³ C補正あり		
例是宙力	DV1141		形態	光 壁刀法	0 C (/00) (AIVIS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)		
IAAA-132523	No.1	28号住居炉 埋設土器内	炭化材	AAA	-25.63 ± 0.36	4,010 ± 30	60.70 ± 0.19		
IAAA-132524	4 No.2 45号土坑 埋土中	45号土坑 埋土中	炭化材	AAA	-26.64 ± 0.37	$4,060 \pm 30$	60.31 ± 0.22		
IAAA-132525	No.3	29号住居 埋土中	土器付着炭化物	AaA	-23.63 ± 0.33	4,000 ± 20	60.76 ± 0.19		
IAAA-132526	No.4	18·19号住居 埋土中	土器付着炭化物	AaA	-26.91 ± 0.31	3,890 ± 30	61.62 ± 0.21		

[#6268]

表2

測定番号	δ ¹³ C補 Age (yrBP)	前正なし pMC (%)	暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yIDI)	pivic (70)			
IAAA-132523	4,020 ± 20	60.62 ± 0.19	4,010 ± 25	2569calBC - 2516calBC (55.4%) 2500calBC - 2488calBC (12.8%)	2576calBC - 2473calBC (95.4%)
IAAA-132524	4,090 ± 30	60.11 ± 0.21	4,061 ± 28	2830caIBC - 2822caIBC (3.6%) 2630caIBC - 2566caIBC (48.3%) 2523caIBC - 2497caIBC (16.3%)	2838calBC - 2814calBC (7.5%) 2675calBC - 2488calBC (87.9%)
IAAA-132525	3,980 ± 20	60.93 ± 0.18	4,001 ± 24	2566calBC - 2524calBC (49.9%) 2497calBC - 2481calBC (18.3%)	2573calBC - 2472calBC (95.4%)
IAAA-132526	3,920 ± 30	61.38 ± 0.20	3,889 ± 27	2456calBC - 2346calBC (68.2%)	2466calBC - 2295calBC (95.4%)

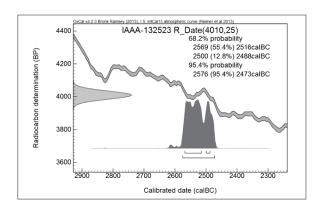
[参考值]

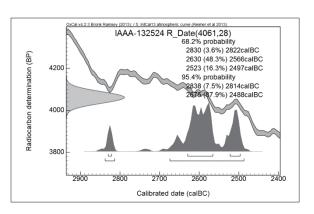
参考文献

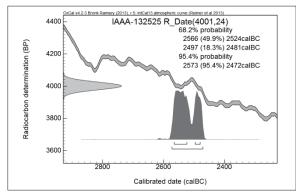
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

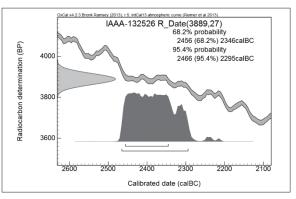
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363









【参考】暦年較正年代グラフ

IX 総括

1 調査全体の概要

中野遺跡は平成24・25年度の2箇年にわたり、合わせて12,050㎡という広大な範囲を調査した。その結果、縄文時代前期前葉から後期前葉にかけての遺物が出土し、また遺構は、縄文時代前期前葉、および中期後葉~末葉の竪穴住居跡、住居状遺構、土坑、焼土遺構、性格不明遺構、柱穴群を検出した。特に、縄文時代中期後葉~末葉(大木8b式期~大木10式新段階)の遺構は多く、本遺跡が該期における大規模集落であることが判明した。

本遺跡は大六山(514m)から越喜来湾へと続く斜面地のやや下方部に位置する。そのため調査区内も北側が標高約80mであるのに対し、南側は60m前後で比高差約20mを測る、やや急勾配な地形となっている。遺構群は、調査区全体に広く分布するものの、調査区ほぼ中央の斜面勾配が緩やかでわずかに形成された平坦地で特に密集する傾向が見受けられる。この範囲に分布する竪穴住居跡は重複が激しいのも特徴である。また急斜面地に立地する故に、集落形成以前、以後の両時期において大六山方向から幾度かにわたり、落石、土砂崩れが発生していたと考えられ、遺構を検出したIV層上面には人力では動かすこともできないほどの巨礫が散乱していた。今回検出した竪穴住居跡のほとんどは壁を消失しており、特に斜面下方部にあたる南側の壁および床面の一部が見受けられないことから、落石による著しい破壊や土砂崩れによる住居埋土の流失が想定される。そういった点では、本遺跡は該期における大規模集落であるとともに、自然災害によって消失しかけた集落という側面もある。

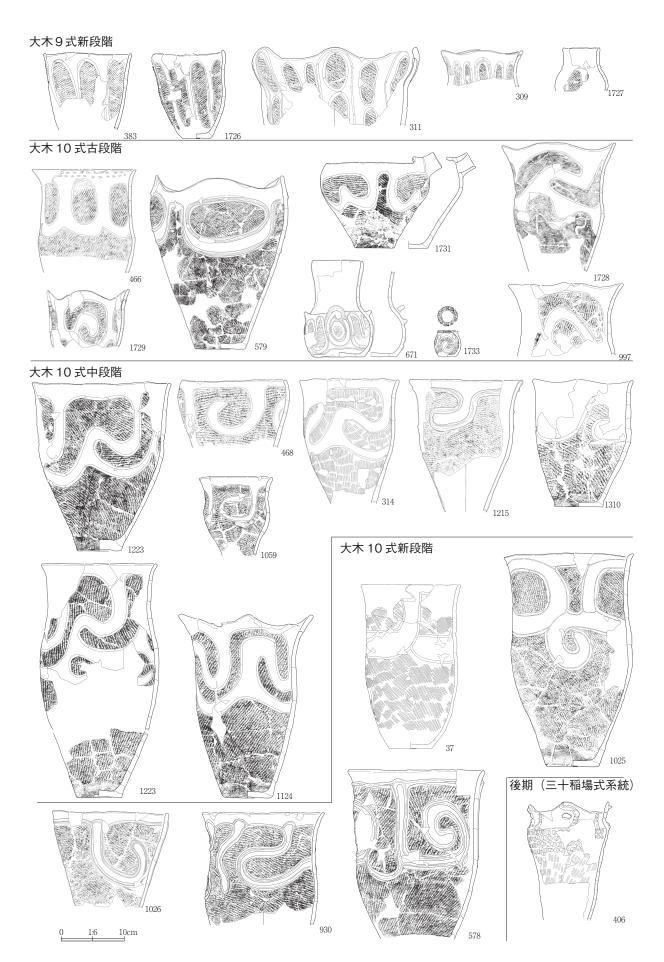
2 出土遺物について

(1) 縄文土器(第252図)

前述の通り、縄文時代前期初頭から後期前葉にかけての縄文土器が出土している。

縄文時代前期初頭~中葉の縄文土器は、平成24・25年度両調査区から出土している。ただし縄文時代中期の遺構内や遺構外からも多く出土しており、これらは土砂崩れによる流れ込みの可能性が高く、したがって全体的に出土状態は良好と言えない。以下、時期毎に概略を記す。

前期初頭の土器群は小片が多く、全容が分からないが、V章で示した各文様の土器が少数ずつ出土している。V章に記したが、底部尖底や内外面に斜行縄文が施文される土器もあり、早期末葉の範疇に収まる可能性もある。他は斜行縄文を施文する一群であるが、特に口縁部に刻みが巡る土器が多い傾向が見受けられた。また前期前葉では口縁部に環付末端回転文を施文する大木1式が比較的まとまって出土している。次いで大木2a式は出土しているものの、大木1式と比べると目立った出土量ではない。特に大木2a式の特徴となる、口縁部に結節回転文が施文される土器は少なく、対して結束羽状縄文が施文される土器の方が多い傾向が見て取れた。また大木2b式に相当する土器は今回見つかっておらず、続く前期中葉、大木3、4式も小片が数点のみ見つかった程度である。このような点から考えると、本遺跡から出土した前期土器群は前期初頭の斜行縄文に口縁部刻みが巡る一群から大木1式にかけての土器がまとまっていると言える。



第252図 縄文土器集成

前期の土器について特筆すべき点として、白座式の口縁部片および胴部片が出土している。白座式は前期大木式との並行関係について、その位置づけで議論のある土器である。焼成具合が良好で、口唇部直下に刻み、口縁部の結節回転文と胴部の組紐という文様である。残念ながら本遺跡でも出土状況などからは時期を推定することは不可能であった。

中期の土器は大木8a式から見受けられる。ただし大木8a式の出土量はわずかで、掲載できた土器も少ない。しかし次の大木8b式から大木10式新段階までは多く、今回の出土量全体の7割以上を占めている。ただし所謂粗製が多く、また残存状態が悪い。形態復元できた土器の点数は、検出した竪穴住居数に対し少なかった。特に大木8b式、大木9式古段階は小片ばかりで、形態復元できたものがなかった。

それでも大木9式新段階から大木10式新段階にかけては、竪穴住居跡から出土した土器を中心に、 復元できたものがまとまっている。出土遺構の切り合い関係などから、これら土器群の時期を検討し たいところではあるが、前述のとおり、土砂崩れ等を原因として遺構埋土が流れていることもあり、 あまり出土状態は良好ではない。ここでは阿部2008などを参考に、時期分類した土器群の特徴を記す (第252図)。

大木9式新段階は、形態の特徴は口縁部に最大径を持つ。口縁部は平縁と波状口縁が見受けられる。また口縁部がすぼまり、胴部が膨らむ形態のものも1点見つかっている。文様は口縁部から胴部へと縦に長い楕円形、あるいは逆「U」字状の区画文が巡る。区画内には磨消技法による縄文が施文される。典型的によく見受けられる大木9式新段階である。

大木10式古段階は、形態が胴部上半に最大径をもち、口縁部で緩やかに内湾するものと胴部下半でくびれ、口縁部に向かい外反するものとが見受けられる。文様は口縁部から胴部上半にかけ、曲線的な区画文が施文され、胴部下半は波状沈線文で区画される。466・579は楕円形区画文が描かれ、大木9式新段階の特徴がみられるものの、胴部下半はこの時期から見受けられる波状沈線による区画が施されており、大木10式古段階の範疇に収まると判断した。また他はこの時期よくみられる「C」字を横向きにしたような形態の区画文が施文されるが、997や1728は区画内の曲線が大きく弧を描きはじめ、次の中段階への変化の兆しがみえている。

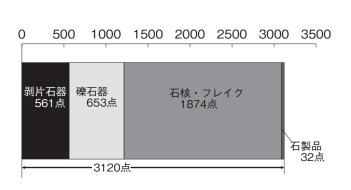
大木10式中段階は本遺跡で最も多く出土した時期の土器である。形態的な特徴は古段階から大きくは変わらない。文様は「S」字状、あるいはクランク状の区画文が複数、連鎖状に巡るものであり、区画内は主に充填技法で縄文が施文される。どの区画文も口縁部付近は幅広に肥大化し、やや歪になるのが特徴である。また区画文が胴部を区画する沈線文と連結し、区画文自体が胴部下半の地文と同一化しているものも見受けられる。これらの一群は次の新段階の文様に通ずる特徴でもあり、新段階との過渡期に位置づけられるものかもしれない。

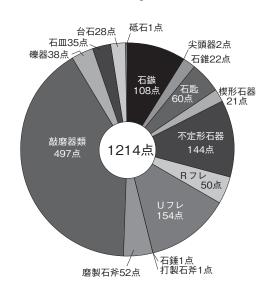
大木10式新段階は、形態的特徴は前時期までと比べやや細身となり、縦に長くなる傾向がある。胴部上半でくびれ、口縁部が外反するものが主体となるが、1026のように口縁部にむけ大きく開く形態のものも見受けられる。文様は、口縁部は隆帯や沈線で胴部と区画され、無文である。胴部は前時期までのような上半、下半の区画がなく、地文に斜行縄文が施文され、区画内を無文とした細長く蛇行する区画文が縦位に垂下する。この時期から区画文の区画内は縄文を施文するものから、無文へと変化している。

後期に相当する土器は、初頭、前葉に相当する土器片が、主に18・19号住居跡の埋土や周辺から出土している。概ね小片で、細かい型式名まで判別できるものはほとんど無く、連鎖状隆帯が垂下するもののみ門前式と捉えている。後期と考えられる土器で特筆すべきは465である。口縁部から胴部下

【出土点数の内訳】

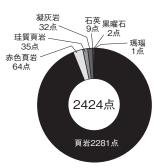
【剥片石器・礫石器の器種組成】





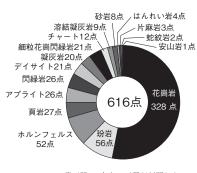
【石材組成】

剥片石器・石核・フレイク



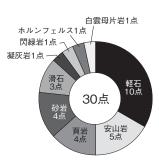
※剥片石器・石核・フレイク2435点中、 石質が判明した 2424点を対象とした。

礫石器



※礫石器653点中、石質が判明した 616点を対象とした。

石製品



※石製品・軽石製石製品32点中、 石質が判明した30点を対象とした。

【細分別点数】

石鏃

H 3///	H 34/A									
	1類	2類	3類	4類	未成品	不明	計			
点数	46	15	3	3	25	16	104			

石錐

. III MIE						
	1類	2類	3類	4類	不明	計
点数	2	4	7	7	2	22

不定形石器

1 22/17 12 1111									
	1類	2類	3類	不明	計				
点数	92	43	7	2	144				

楔形石器

	1類	2類	計
点数	17	4	21

石匙

11/2					
	1類	2類	3類	不明	計
点数	37	13	6	4	60

敲磨器類

NA III A									
	1類	2類	3類	不明	計				
点数	277	47	149	24	497				

フレイク

	la類	lb類	1c類	2a類	2b類	2c類	3a類	3b類	3c類	4a類	4b類	計
点数	2	68	125	11	116	444	2	18	89	406	574	*1855

※分類可能な分のみ対象とした。

半まで残存し、口縁部に蛇行する隆帯が垂下し、胴部には斜行縄文を地文とし、その上に花弁状の刺突文を充填している。当地域の土器群には見受けられない文様要素を有しており、その文様要素からは上越地方の三十稲場式にも類似する。ただし形態的な特徴は所謂「三十稲場式」とは異なっているため、「三十稲場式系統」として扱った。出土位置は18·19号住居跡の埋土であり、主に大木10式中段階、新段階が出土している。層位的には中期の可能性もあるので、付着した炭化物により年代測定を試みている。その結果、3890±30yrBPとの結果を得ており、後期初頭ごろに比定されると判断した。したがってこの土器は、遺構に伴うものではなく、遺構内に混入したものである可能性が高い。

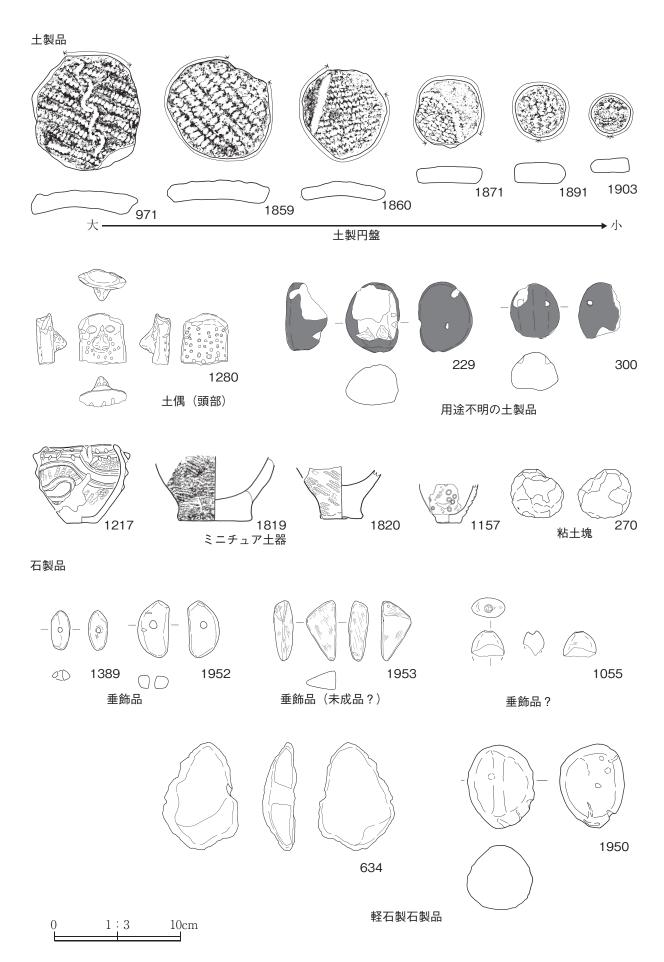
これ以降の時期の土器は、本遺跡からは出土していない。検出遺構も同様であり、本遺跡は後期初頭か前葉で姿を消すこととなる。

(2) 石器(第253図)

出土した石器の点数内訳や器種組成、利用される石材の組成などについて第253図に示している。2箇年の調査で、3120点の石器・石製品が出土している。これらについて、「剥片石器」、「礫石器」、「石核・フレイク」、「石製品」に分け、その内訳を示した(第253図左上)。その結果、石核・フレイクが最も多く、全体の6割を占めている。これは遺跡内で石器製作を行っていた可能性を示しているが、これらのうち石核は6点のみであるので、遺跡の外で剥離作業が行われ、石器製作に適したフレイクのみ持ち込んでいるものと推測する。剥片石器と礫石器の出土点数の割合は概ね同等であり、礫石器の方がわずかに多い。ただ、細かく器種毎の点数でみていくと(第253図右上)、敲磨器類が最も多く、全体の4割を占め、礫石器内で比べると7割に達していた。食料調理の道具と考えれば、竪穴住居数を反映しているとも言える。剥片石器では不定形石器やUフレイクが多く、石鏃がこれらに次ぐ。

利用される石材について、「剥片石器・石核・フレイク」、「礫石器」、「石製品」の3つに分け、その内訳を示した(第253図中央円グラフ)。剥片石器・石核・フレイクは圧倒的に頁岩が多く7、赤色頁岩や珪質頁岩を含めれば、そのほとんどを占めていることになり、他の凝灰岩、石英、黒曜石、瑪瑙はごくわずかである。礫石器は花崗岩が約半数を占め、他に玢岩やホルンフェルスなど多様な石材が確認できた。ただしいずれも遺跡周辺で採集できる石材であり、遠隔地の石材は選択されていない。こういった点から所謂「トゥール類」に利用される石材は、遺跡周辺での採集が基本となっていることが窺える。石製品は軽石が多く、これは十和田系ではないかと考えられる。純粋に距離で考えると、遠隔地からの採集と捉えられそうであるが、県内沿岸部では、今でも同様な軽石が海岸沿いに打ち上げられており、したがってこれらも周辺の海岸から採集したものである可能性が高い。他の石材も同様である。石製品(1389)は灰白色を呈する石材で、翡翠製も疑ったが、蛍光X線分析の結果、構成元素が示したのは翡翠ではなく白雲母片岩ではないかということであった(詳細は後述する)。白雲母片岩が遺跡周辺で採集できるものか定かではないが、翡翠のように遠隔地から採取する貴重な石材ではないことが分かった。

細分可能な器種について、それぞれの分類の出土点数内訳を示した(第253図下表)。剥片石器・礫石器は6機種について、細分を試みているが、それぞれ3~4種に分けられたに過ぎず、またその分離別の出土点数をみると、 $1\sim2$ 種に偏る傾向にある。フレイクは11種に細分しているが、2類の多さが目に付く。上述の通り、遺跡内で石器製作を行っているとすれば、3類が多くなるはずであるが、3類は最も少ない。石器製作用にフレイクを大量に持ち込んだものの、結局使い切らずに遺跡内で廃



第254図 土製品・石製品

棄された可能性もあるのではないか。平成25年度調査では32・33・34・54号住居跡の床面上や壁溝内でフレイク集中範囲がみつかり、いずれからも10点以上のフレイクやU・Rフレイク、またわずかに石核や石鏃の未成品が折り重なるような状態で出土している。その状態からみても、袋状の入れ物に入れたまま住居の床面に廃棄(遺棄?)されたことが想定される。

(3) 土製品・石製品 (第254図)

今回の調査では土製品が多く出土している。そのほとんどが土製円盤であり、土製円盤だけで実に 200点以上出土している。土製円盤の時期は前期と中期で、出土量の約1割が前期、その他は中期に比定される。大きさに規則性はなく、最大で6 cm大(971)から最小1 cm大(1903)まで見受けられるが、 $3\sim4$ cmの範疇に収まるものが主体である。全て深鉢胴部片からの転用で、側面の広い範囲、または全周で摩滅痕が見受けられる。穿孔されたものはほとんど無く、掲載したものが全てである。土偶の頭部片(1280)が1点、56号住居跡の埋土中から出土している。出土状況に特筆すべき点はなかった。目・鼻・口が明瞭に認識でき、また鼻の周囲には刺突が施され、髭か刺青を表現しているものと考える。同住居跡は大木10式中段階に比定されるので、この土偶もその時期のものの可能性が高い。

他に6号住居跡から球状の土製品(229・300)が出土している。焼成を受け、赤色化しているが、それ以上の特徴が無く、用途は不明である。300は丸い範囲に2箇所の刺突文(故意ではない?)状の穴が見受けられ、これが目を模していれば土偶かとも考えるが、定かではない。また同住居跡からは粘土塊も出土しており、それらとの関連性を考える必要がある。粘土塊は平成24年度調査区でも出土している(270)。

ミニチュア土器も比較的多く出土しているが、欠損品がほとんどである。 $5\sim6\,\mathrm{cm}$ 程度に収まる土器をミニチュア土器としたが、通常の大きさの縄文土器との境界は、明確には見いだせていない。むしろ、 $6\sim10\,\mathrm{cm}$ の範囲に収まる土器もあるので、果たして両者に明確な作り分けの意図があったか定かではない。ミニチュア土器には通常の土器と同様な文様が描かれる土器(1157・1217)と地文のみの土器(1819・1820)が見受けられる。

石製品は、第253図に示した通り32点のみ出土しており、土製品と比べて圧倒的に少ない。ほとんどが軽石製石製品(634・1950)であるが、穿孔のある垂飾品(1389・1952)やその未成品ではないかと考える石製品(1953)、また1055も穿孔が途中まで施されているので、石製品の未成品の可能性があるものが見受けられる1952・1953は滑石製はであるが、1389は灰白色を主体とし、わずかに緑かかった色調をしており、一見すると翡翠にも見受けられる。そこで蛍光X線分析を行ったところ、翡翠であればその構成元素NaAlSi₂O₆を示すはずであるが、1389にはナトリウム(Na)が含まれていないことが分かり、翡翠ではなかった。白運母を含む石英変成岩、あるいは白運母片岩の可能性が高い。1389は42号土坑埋土中から、また1952もその周辺遺構外から出土している。42号土坑は埋土の堆積様相や平面形態からみて、土坑墓の可能性は薄く、用途不明の土坑である。

他に遺構外Ⅲ層(包含層)からアスファルト塊が2点出土している(第251図)。出土した層を基準とすれば縄文時代に比定されるものであり、周辺から出土する土器から中期後葉~末葉の範疇に収まるものと推定する。どちらも量はわずかで、不整形な塊状を呈する。指頭などの痕跡は見受けられなかった。

3 検出遺構の時期変遷と特徴

2カ年の調査で検出した遺構群は

縄文時代前期前葉の竪穴住居跡 2棟

縄文時代中期後葉~末葉の竪穴住居跡62棟・住居状遺構7棟・性格不明遺構1基 縄文時代前期および中期の土坑50基

縄文時代中期の焼土遺構3基 古代?の焼土遺構1基

時期不明(縄文時代と推定)184個

である。

次に、上記の遺構群の中で、出土遺物などから時期が判断できたものについて、時期毎に分布を示し、本遺跡における集落変遷をみていく。本遺跡は遺構の時期から7時期(前期1期・中期6期)に分けることができると判断した。

I期(前期初頭)

1・2号住居跡が相当する。平成24年度調査区、ほぼ中央と南端に分布する。なお2号住居跡は中期に相当する竪穴住居跡と重複しており、中期後葉以降に比定される可能性のある竪穴住居跡である。いずれにせよ、本遺跡でのこの時期の集落は小規模である。竪穴住居跡は1号住居跡をみても不整形で炉を有しないのが特徴である。また周辺には土坑が分布するものの、該期に相当する焼土遺構は認められず、火を利用した形跡はない。集落自体、長期にわたる定住は想定されていない可能性がある。

なお前期の集落はこの1時期のみであり、ここから次のⅡ期至るまで長期にわたり集落が営まれていない。ただし前期中葉までの遺物は見つかっており、遺跡周辺のいずこかにその時期に相当する集落が存在する可能性が考えられる。

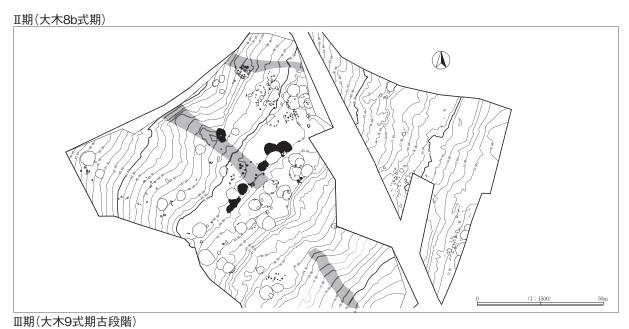
Ⅱ期(中期8b式期・第255図上)

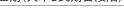
11・32・34・35・42・43・57・58号住居跡、5号住居状遺構、1号性格不明遺構が相当する。平成25年度調査区のほぼ中央、南北にはしる沢跡を挟んだ、傾斜の緩やかな場所に立地する。11号住居跡、1号性格不明遺構を除けば概ね住居同士、隣接して立地している。また34・35号住居跡と42・43号住居跡はどれも同時期でありながら重複しているため、Ⅱ期はさらに2時期以上に細分される可能性が高い。

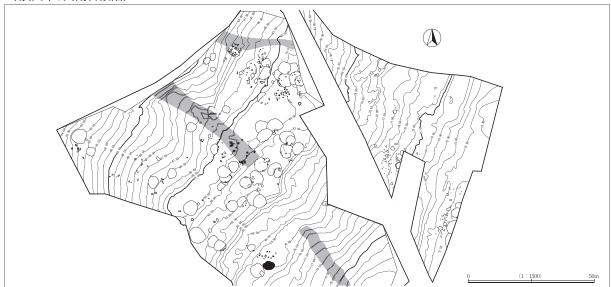
竪穴住居跡に付属する炉(第257図上)は石囲炉が主体である。石囲炉は正方形に近い平面形であるが、片側一方の炉石配置が雑であったり、また炉石が抜き取られており、「コ」字状に残存するものが多い。埋設土器はない。また11号住居跡には複式炉が付属する。3個の石囲部と前庭部で構成される複式炉であり、本遺跡では最も古い複式炉となるが、この時期すでに、複式炉が盛行するⅢ期以降の複式炉と大差ない構造であったことになる(11号住居跡は出土遺物が少なく、埋土中から出土した土器片で時期判断をしており、別の時期である可能性もある)。

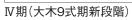
Ⅲ期(大木9式古段階期・第255図中)

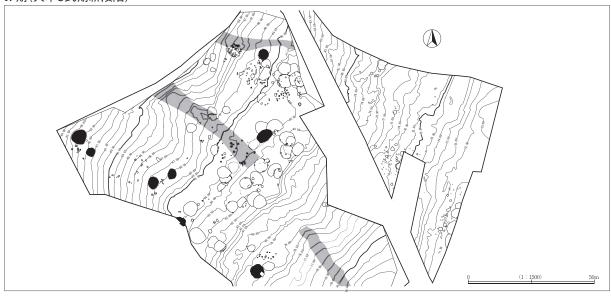
7号住居状遺構のみ相当する。平成25年度調査区の南側、密集する竪穴住居跡群からやや離れた場所に位置する。不正な楕円形を呈し、隣接する60・61号住居跡と比べ、ひとまわり小さい。あまり居住施設に向いているとは言い難く、したがってこの時期は、7号住居状遺構はあるものの集落自体は断絶している可能性がある。





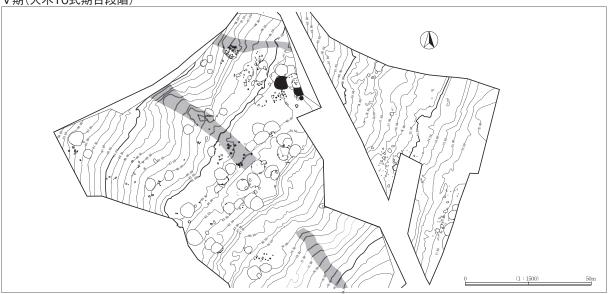




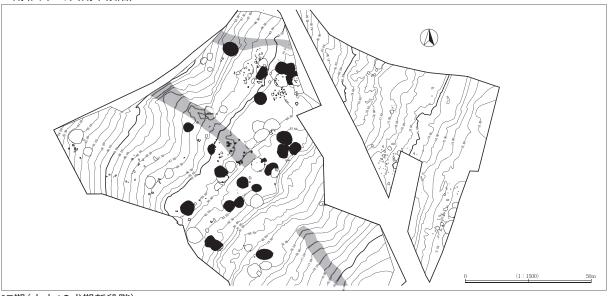


第255図 集落の変遷(1)

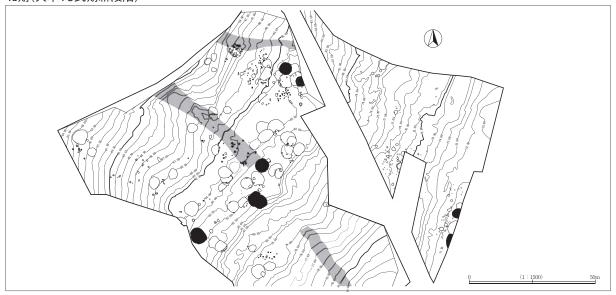
V期(大木10式期古段階)



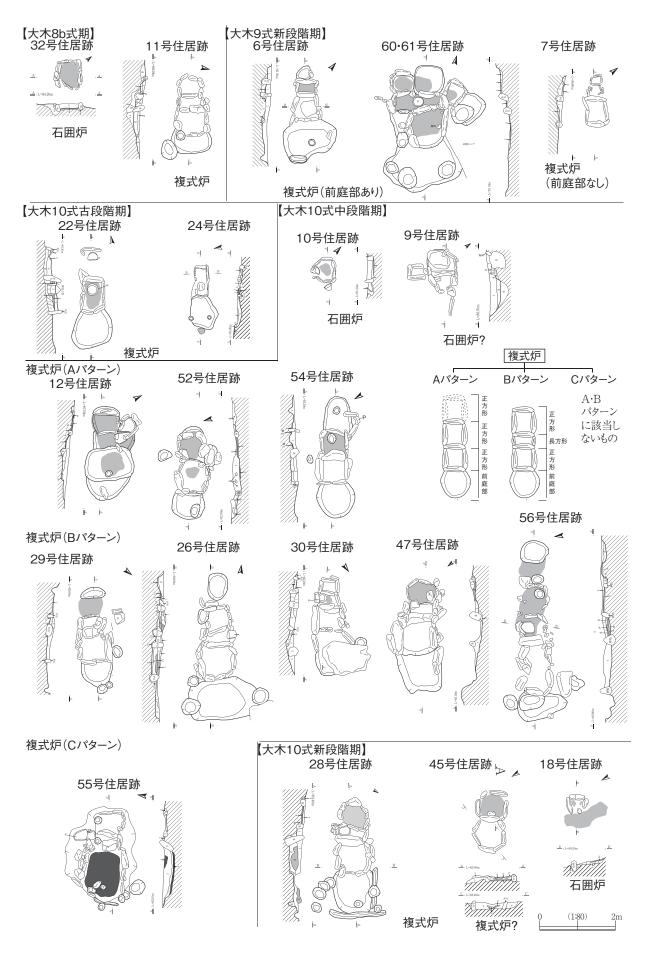
VI期(大木10式期中段階)



VII期(大木10式期新段階)



第256図 集落の変遷(2)



第257図 炉の変遷

Ⅳ期(大木9式新段階期・第255図下)

 $6\cdot 7\cdot 8\cdot 27\cdot 60\cdot 61\cdot 62$ 号住居跡、 $1\cdot 6$ 号住居状遺構が相当する。平成25年度調査区の西端に分布が偏っており、これらの竪穴住居跡群は密集することなく、やや散在的に位置する。また $6\cdot 7\cdot 8\cdot 27$ 号住居跡、1 号住居状遺構は比較的傾斜のきつい場所に立地しており、この時期の住居立地の特徴ともいえる。

竪穴住居跡に付属する炉(第257図)は複式炉が主体である。複式炉は複数の石囲部で構成され、これに前庭部が付くもの($6\cdot 60\cdot 61$ 号住居跡)と前庭部が付かないもの(7号住居跡)との2パターンに分かれる。60号住居跡の複式炉には埋設土器が付く。埋設土器は石囲部の脇に横位の状態で設置されており、後述するV期に盛行するものがすでにこの時期に見受けられる。

V期(大木10式古段階期·第256図上)

22・23・24号住居跡が相当する。23・24号住居跡は時期を示す遺物に乏しかったものの、他の遺構との重複関係から、IV期に含めている。平成25年度調査区の北東端で緩やかに東へと傾斜する場所に立地する。該期の竪穴住居跡はVI期の竪穴住居跡とも重複しており、次の時期と立地が類似するともいえる。とはいえ、前後のⅢ期、VI期と比べ、住居数は大きく減少している。

竪穴住居跡に付属する炉(第257図)は複式炉である。確認できたのが22・24号住居跡のみで、両者の特徴からしか言えないが、複式炉は長方形基調の石囲部と前庭部で構成される。22号住居跡の複式炉には石囲内の中央に埋設土器が正位の状態で設置されている。この2基のみでは断言できないが、前後の時期にみられる複式炉とは形態の特徴が異なる傾向が見受けられる。

VI期(大木10式中段階期・第256図中)

9・ $10\cdot12\cdot15\cdot17\cdot19\cdot20\cdot21\cdot23\cdot26\cdot29\cdot30\cdot33\cdot36\cdot37\cdot38\cdot41\cdot47\cdot49\cdot52\cdot53\cdot54\cdot55\cdot56\cdot63$ 号住居跡が相当する。 \Box 期は本遺跡のなかで、最も盛行する時期といえる。同時期で重複する竪穴住居跡も多く、同時期のなかでさらに \Box 2 時期以上に細分できる可能性が高い。平成25年度調査区のほぼ中央、傾斜の緩やかになる場所を中心にほぼ東西方向に並ぶように立地する竪穴住居跡が多いが、 \Box 9・ \Box 10・ \Box 12号住居跡のように傾斜のきつい場所にもわずかながら分布する。なお竪穴住居跡は多数検出したものの、該期に相当する貯蔵穴は \Box 1 基も見つからなかった。食糧貯蔵などは、本遺跡とは別の場所で行っている可能性がある。

穴住居跡に付属する炉(第257図)は複式炉が主体で、わずかに石囲炉が見受けられる。石囲炉は10号住居跡に付属しており、平面形は楕円形に近い。埋設土器が2個見受けられるが、土器を横位に設置しており、該期の複式炉に設置される埋設土器と類似する。9号住居跡にも石囲炉と考えられる炉が設置されている。石囲部が2個(3個か)で構成されているので複式炉の範疇かもしれないが、ほかの複式炉と形態が異なりすぎており、石囲炉と判断した。

この時期の複式炉はその構造から3つのパターンに分けることができる(第257図右中央の模式図参照)。まず正方形の石囲部が2ないし3個連結し、前庭部が付く複式炉(Aパターン)、正方形の石囲部2個とその間に横長の長方形の石囲部が連結し、前庭部が付く複式炉(Bパターン)、どちらの範疇にも収まらない複式炉(Cパターン)である。

Aパターンは12・52・54号住居跡の複式炉が相当する。後述するBパターンより検出数が少ない。 奥側の石囲部の炉石が抜き取られていたり、やや配列が雑である傾向が見受けられる。また埋設土 器は石囲部脇に横位の状態で設置される。

Bパターンは26・29・30・47号住居跡などの複式炉が相当し、本遺跡のなかでも最もよくみる形態といえる。Ⅲ期の60・61号住居跡や後述するⅧ期の28号住居跡の複式炉も同様な形態であり、時

期的なものというより、本遺跡あるいは同地域における特徴的な複式炉の形態である可能性も考えられる。Bパターンの複式炉は奥側の石囲部が比較的燃焼が強く、焼土の残りが良い。一方、長方形の石囲部には被熱の痕跡がないものが多く、ほとんど焼土がない。またこの長方形の石囲部は脇に埋設土器が設置されることも多く、埋設土器と関連が強い施設とも考えられる。

Cパターンの複式炉は55号住居跡の複式炉である。石囲部2個のみで構成され、手前の石囲部が大きいため、前庭部を兼ねている可能性がある。この大きい石囲部には被熱の痕跡はないが、底面に炭化物の薄い層が広がっており、このような形態・特徴を有する複式炉はほかにない。

このように3パターンに分けることができる複式炉であるが、埋設土器が石囲部の脇に横位の状態で設置される点と奥側の石囲部は床面からの掘り込みが浅く、ほかの石囲部は掘り込みが深いという点は共通している。

Ⅷ期(大木10式新段階期·第256図下)

3・4・18・28・39・40・45号住居跡が相当する。本遺跡の中期集落の末期であるが、VI期に比べ住居数は激減する。竪穴住居跡の立地はVI期と同様のものに加え、新たに平成24年度調査区南端で2棟分布する。この時期、前時期までなかった貯蔵穴が2基見つかっている。23・45号土坑であり、23号土坑は4号住居跡の、45号土坑は28号住居跡に隣接することから、それぞれセット関係にあるものと推測する。他の時期では貯蔵穴は見受けられないので、本遺跡の外側に食料貯蔵エリアがあったものと推察するが、この時期に至って、貯蔵穴を所有する竪穴住居跡と3・18・39・40・45号住居跡ではそれがないので、貯蔵穴を所有しない竪穴住居跡とに二分したのであろうか。

竪穴住居跡に付属する炉(第257図)は複式炉と石囲炉であるが、VI期のBパターンの複式炉(28号住居跡)が見受けられる一方、45号住居跡は石囲炉が2基連結しただけのような簡素な複式炉(?)へと変化している。また石囲炉(18号住居跡)も被熱が強く焼土の広がりが見受けられるものの炉自体は小型で簡素なものである。

以上のように、遺構の時期7時期に分類し、その時期変遷を追ってみた。本遺跡における集落の開始は前期初頭(I期)にまで遡るものの、その後ながらく断絶し、縄文時代中期大木8b式期(II期)に再び集落が営まれるようになる。そしてその段階ですでにある程度の住居数を有する集落となっており、その後、住居数の増減を繰り返しながら大木10式中段階(VI期)には住居数がピークを迎え、三陸地域でも屈指の大規模集落へと展開していったものと推測する。ただ続く大木10式新段階(VII期)には住居数は激減し、その後、後期の遺構は見つかっていない。出土遺物も同様で、遺構外を中心に後期初頭、前葉の土器小片が数点見つかるのみであり、その後の時期の遺物は皆無であった。したがって遺跡の集落は中期末葉大木10式新段階をもって終焉を迎えたものと推測する。

参考文献

相原淳一 1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年

- 仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に - | (『考古学雑誌』第76巻 第1号)

阿部昭典2008『縄文時代の社会変動論』(未完成考古学叢書⑥)

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1978『二戸市 沢内B遺跡』(岩埋文第7集)

2002『清水遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第382集)

2004『長谷堂貝塚発掘調査報告書』(岩埋文第434集)

2008『力持遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第510集) 『袰帯遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第522集)

2012 『川目A遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第568集) 『山脈地遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第598集)

2014『屋形遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第629集)

大船渡市教育委員会 2002 『宮野貝塚 緊急発掘調査報告書』

2012『田代遺跡 平成21年度緊急発掘調査報告書』

2013 『田代遺跡 平成21年度緊急発掘調査報告書』

鈴木道之助 1991『石器入門事典-縄文』(柏書房)

日本考古学協会2005『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』

早瀬亮介2009「前期大木式土器の変遷と地域性―編年研究の現状と課題―」(『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』)

盛岡市教育委員会2004『縄文の彩華―中期の技と美―』(盛岡市遺跡の学び館)

吉川耕太郎 2012「縄文時代の石材資源開発 - 秋田県域を事例に」

『東北地方における中期/後期変動期 4・3 Kaイベントに関する考古学現象①』予稿 集

八木勝枝2012「北上川上・中流域における後期初頭土偶の型式」(『土偶と縄文社会』)

山内清男 1979『日本先史土器の縄文』

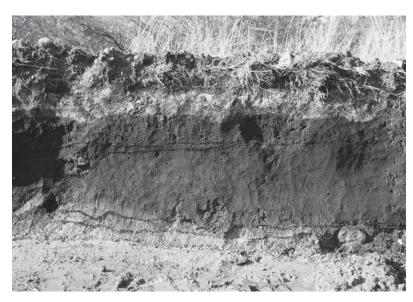
米倉 薫・阿部祥人 編 2002 『上野A遺跡発掘調査報告書 - 尖頭器製作址の研究 - 』

(慶應義塾大学文学部民俗学・考古学研究室)

写 真 図 版



調査区中央基本土層(東から)



調査区南側基本土層(南から)



1 号住居跡全景(東から)

写真図版1 基本土層・1号住居跡(1)



1号住居跡断面(西から)



2号住居跡全景(西から)



2号住居跡断面(南西から)

写真図版2 1号住居跡(2)・2号住居跡



3号住居跡全景(西から)



3号住居跡炉全景(南西から)

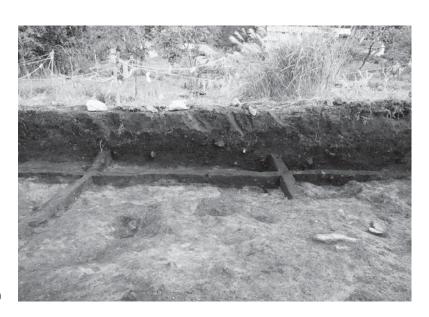


3号住居跡炉断面(南東から)

写真図版3 3号住居跡



4号住居跡全景(南西から)



4号住居跡断面(北西から)



4号住居跡炉全景(西から)

写真図版 4 4 号住居跡

- 383 -



5号住居跡全景(北東から)

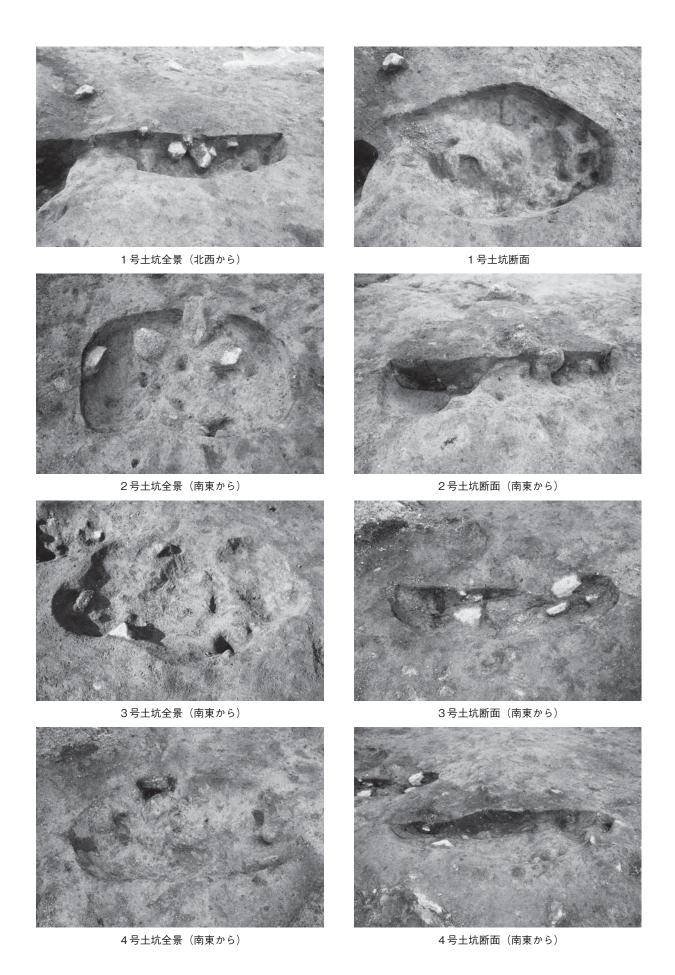


5号住居跡断面(西から)

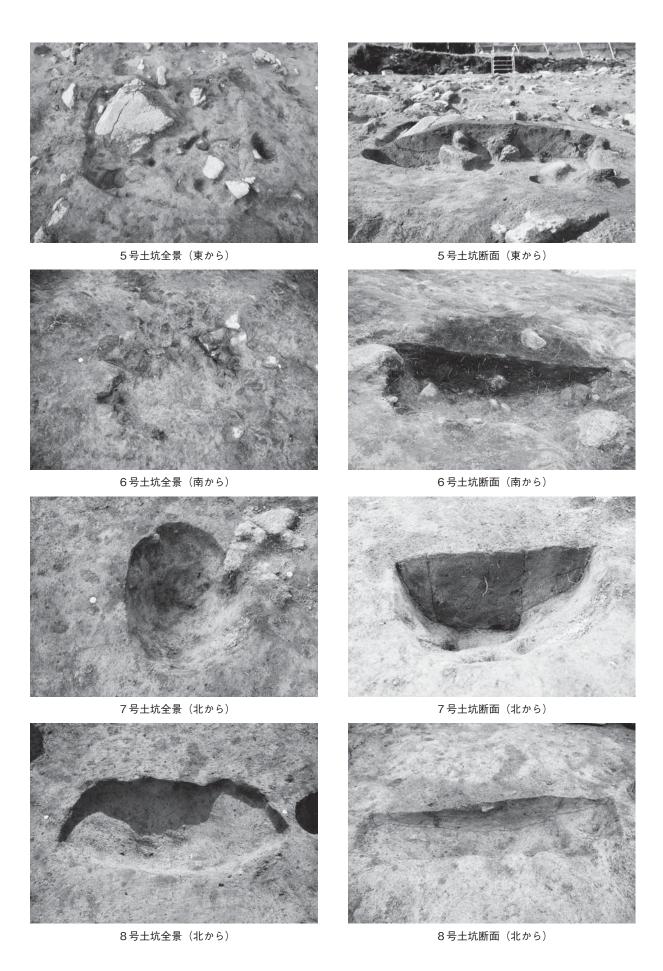


5号住居跡断面(南西から)

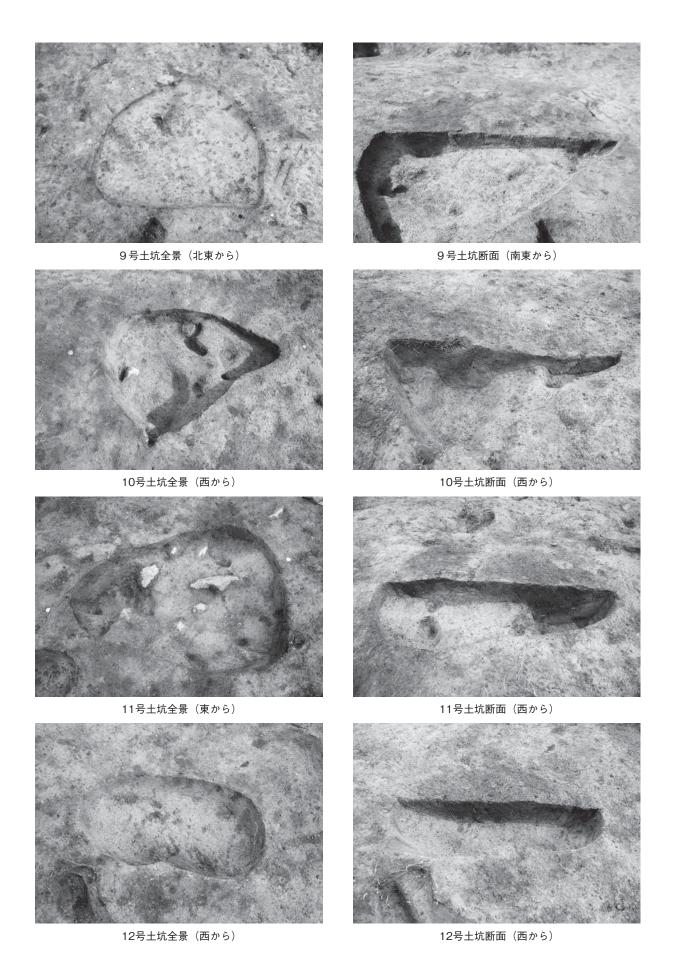
写真図版 5 5 号住居跡



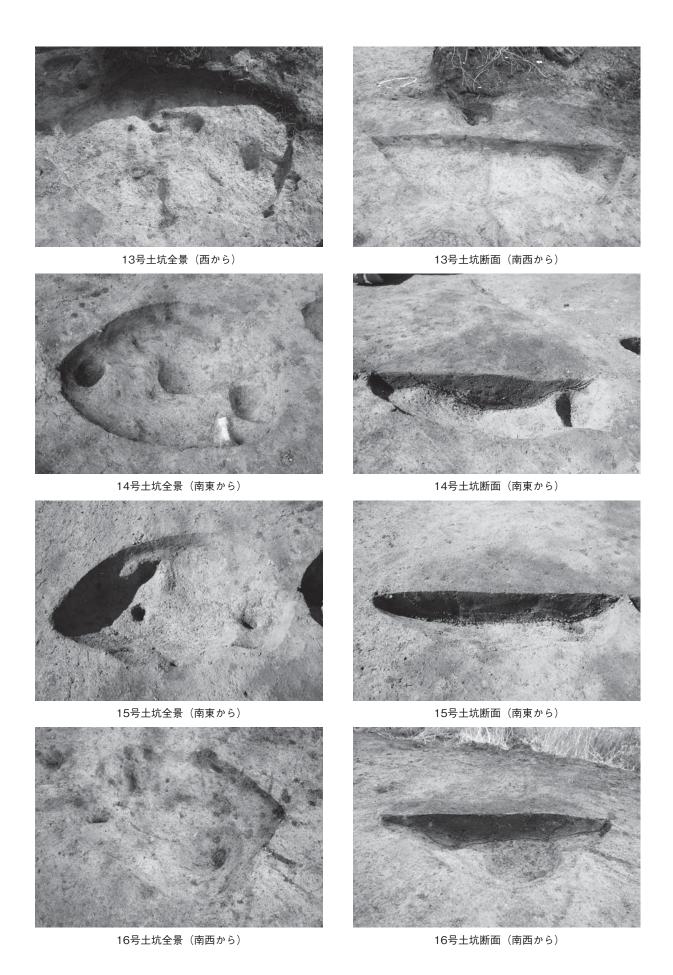
写真図版 6 1~4号土坑



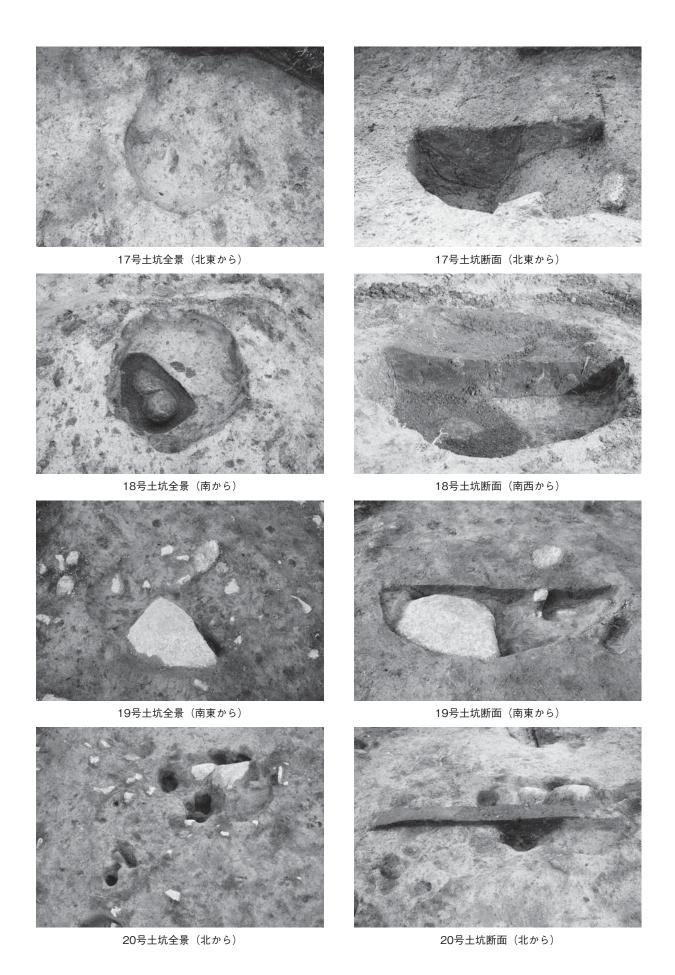
写真図版7 5~8号土坑



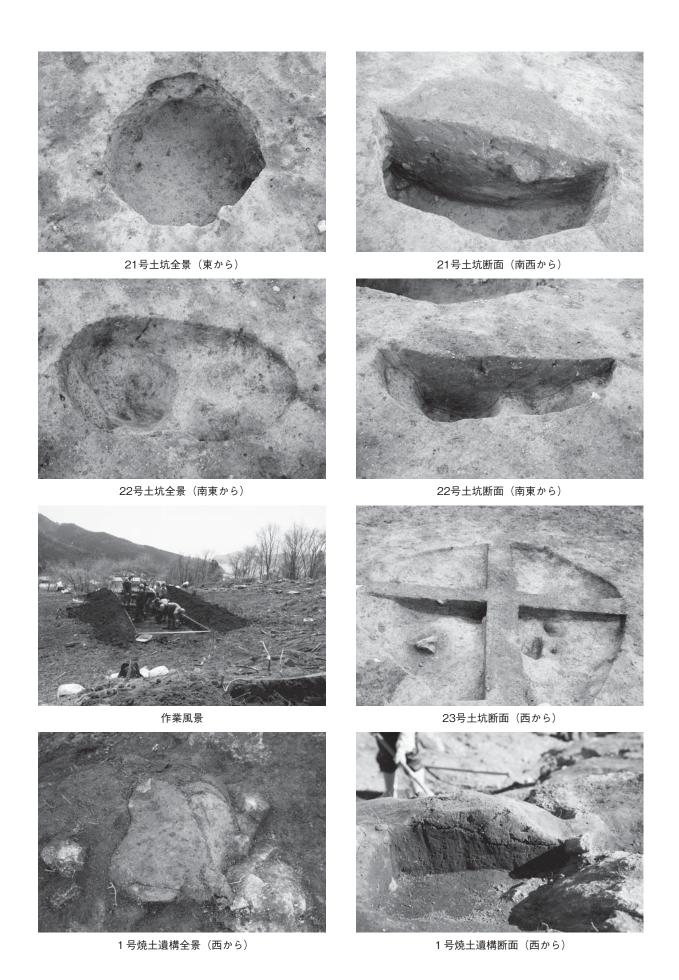
写真図版8 9~12号土坑



写真図版 9 13~16号土坑



写真図版10 17~20号土坑



写真図版11 21~23号土坑・1号焼土遺構



6号住居全景(南東から)



6号住居跡断面(東から)



7号住居跡全景(南から)

写真図版12 6~7号住居跡



7号住居跡炉全景(南東から)



8号住居跡全景(南東から)



8号住居跡断面(北から)

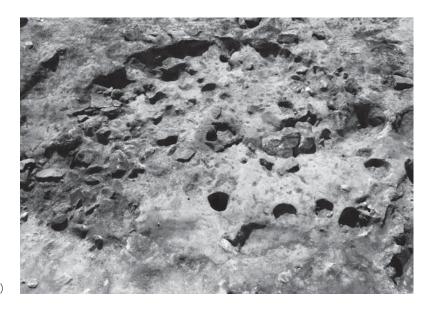
写真図版13 7~8号住居跡



9号住居跡全景(南東から)



9号住居断面(東から)



10号住居全景(北東から)

写真図版14 9~10号住居跡



10号住居跡炉全景(東から)



11号住居跡全景(北東から)



11号住居跡断面(北東から)

写真図版15 10~11号住居跡



12号住居跡全景(東から)

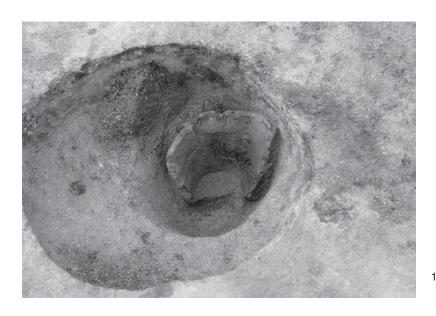


12号住居跡断面(北東から)



13号住居跡全景(北東から)

写真図版16 12~13号住居跡



13号住居跡柱穴内土器出土状況 (北東から)



14号住居跡全景(南から)



14号住居跡炉全景(南東から)

写真図版17 13~14号住居跡



15号住居跡全景(南から)



15号住居跡断面(西から)



16号住居跡全景(南東から)

写真図版18 15~16号住居跡



16号住居跡断面(南東から)



17号住居跡全景(南から)



18・19号住居跡全景(南から)

写真図版19 16~19号住居跡



19号住居炉全景(南から)



18号住居炉全景(西から)



20号住居跡全景(南から)

写真図版20 18~20号住居跡



21・22号住居跡全景(南から)



22号住居跡炉断面(南東から)



23号住居跡全景(南西から)

写真図版21 21~23号住居跡



24号住居跡全景(西から)



24号住居跡炉断面(南東から)



25号住居跡全景(南から)

写真図版22 24・25号住居跡



25号住居跡埋設土器(北西から)



26号住居跡全景(南から)



26号住居跡炉全景(南西から)

写真図版23 25・26号住居跡



27号住居跡全景(南東から)



27号住居跡断面(南から)



28号住居跡全景(北東から)

写真図版24 27・28号住居跡



28号住居炉埋設土器(南東から)



28号住居跡炉2全景(北東から)



29号住居跡全景(北東から)

写真図版25 28・29号住居跡



29・30号住居跡断面(西から)



30号住居跡全景(北東から)



31号住居跡炉全景(南東から)

写真図版26 29~31号住居跡



32号住居跡全景(東から)



32号住居跡炉全景(東から)



33号住居跡全景(北から)

写真図版27 32・33号住居跡



33号住居跡炉1全景(北から)



33号住居跡炉2断面(北東から)



34号住居跡全景(南東から)

写真図版28 33・34号住居跡



34号住居跡炉全景(北東から)



35号住居跡全景(東から)



35号住居跡断面(南から)

写真図版29 34・35号住居跡



36号住居跡全景(北東から)



36号住居跡断面(北西から)



37号住居跡全景(北から)

写真図版30 36・37号住居跡



37号住居跡断面(西から)



38号住居跡全景(東から)



38号住居跡土器出土状態(東から)

写真図版31 37・38号住居跡



39号住居跡全景(北西から)



39・40号住居跡断面(南東から)



40号住居跡炉断面(南西から)

写真図版32 39・40号住居跡



41号住居跡全景(北東から)



41号住居跡炉埋設土器(南東から)



42号住居跡全景(西から)

写真図版33 41・42号住居跡



42号住居炉全景(北西から)



43号住居跡全景(東から)



43号住居跡炉全景(北西から)

写真図版34 42・43号住居跡



44号住居跡断面(南から)



45号住居跡全景(北西から)



45号住居跡炉全景(北西から)

写真図版35 44・45号住居跡



46号住居跡全景(北西から)



46号住居跡炉全景(北西から)



47号住居跡全景(西から)

写真図版36 46・47号住居跡



139 47号住居跡炉全景(西から)



48号住居跡全景(東から)



48号住居跡炉全景(東から)

写真図版37 47・48号住居跡



49号住居跡全景(北から)



50号住居跡炉全景(東から)



51号住居跡炉全景(西から)

写真図版38 49~51号住居跡



52・53号住居跡全景(西から)



53号住居跡炉全景(西から)



52号住居跡炉全景

写真図版39 52・53号住居跡



54号住居跡全景(北西から)



54号住居跡断面(南から)



55号住居跡全景(西から)

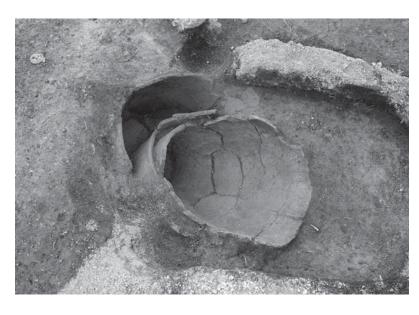
写真図版40 54・55号住居跡



55号住居跡炉全景(西から)



56号住居跡全景(南西から)



56号住居跡炉埋設土器(西から)

写真図版41 55・56号住居跡



57号住居跡炉全景(南から)



58号住居跡炉全景(南東から)



59号住居跡炉全景(東から)

写真図版42 57~59号住居跡



60・61号住居跡全景(南西から)



60号住居跡炉全景(東から)



61号住居跡炉断面(東から)

写真図版43 60・61号住居跡



62号住居跡全景(南から)



63号住居跡全景(南から)



63号住居跡炉全景(南から)

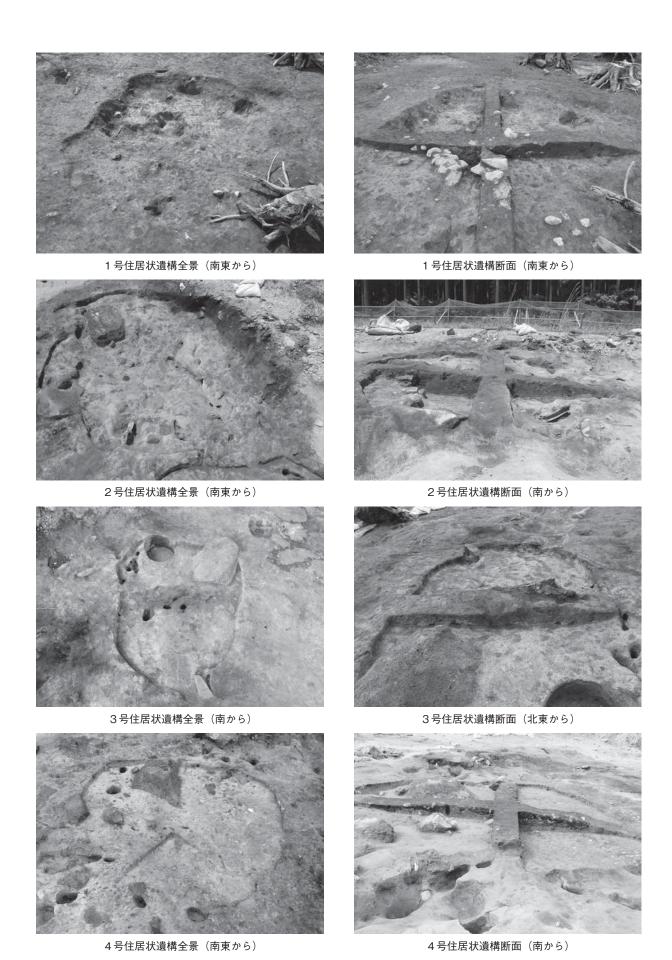
写真図版44 62・63号住居跡



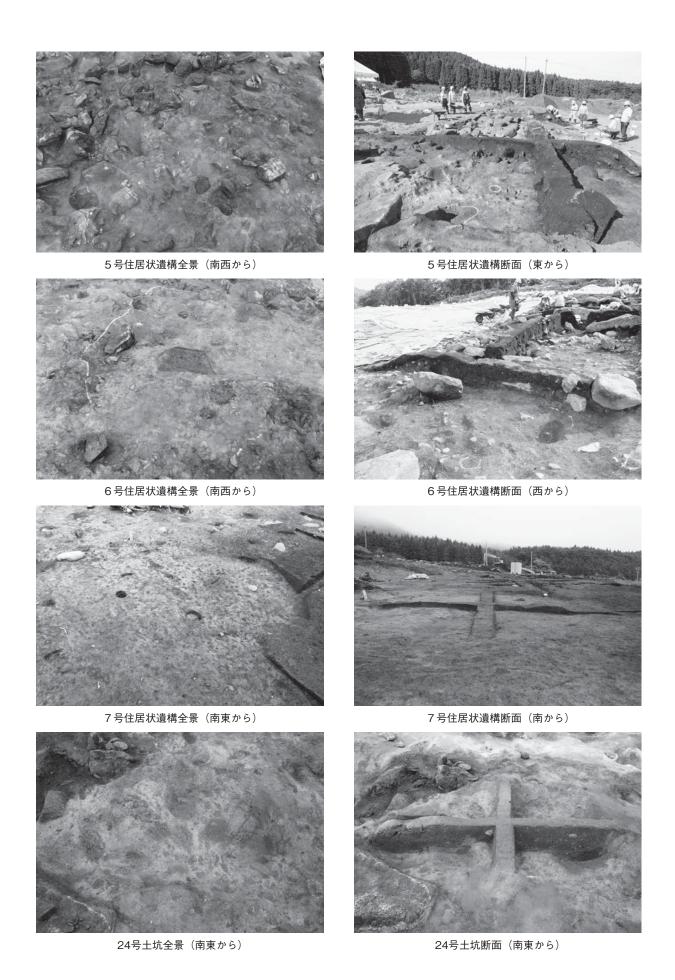
64号住居跡全景(南から)



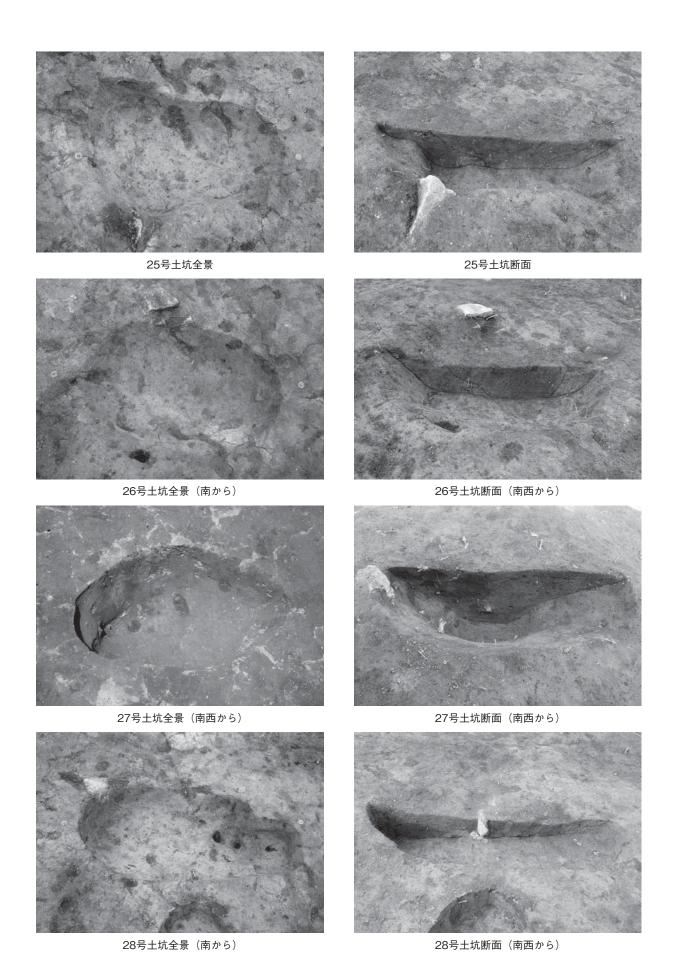
64号住居跡炉全景(南西から)



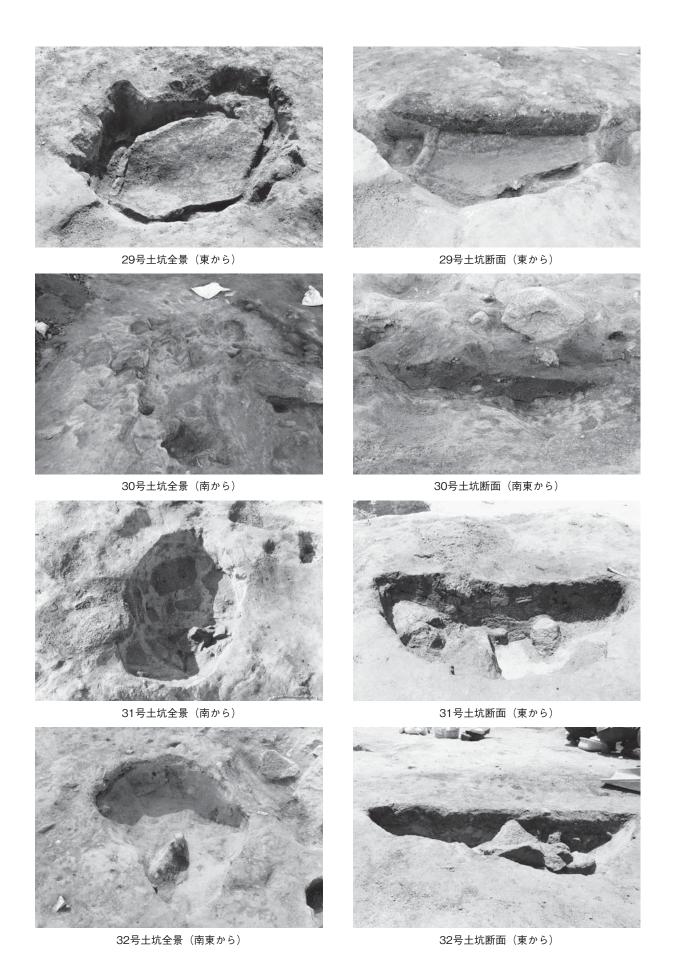
写真図版46 1~4号住居状遺構



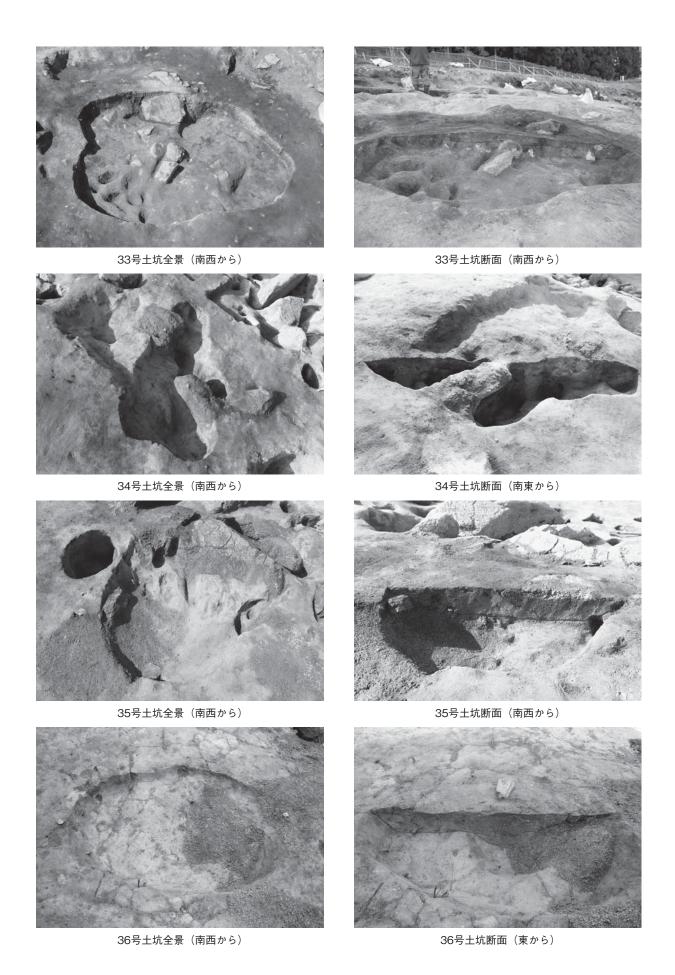
写真図版47 5~7号住居状遺構・24号土坑



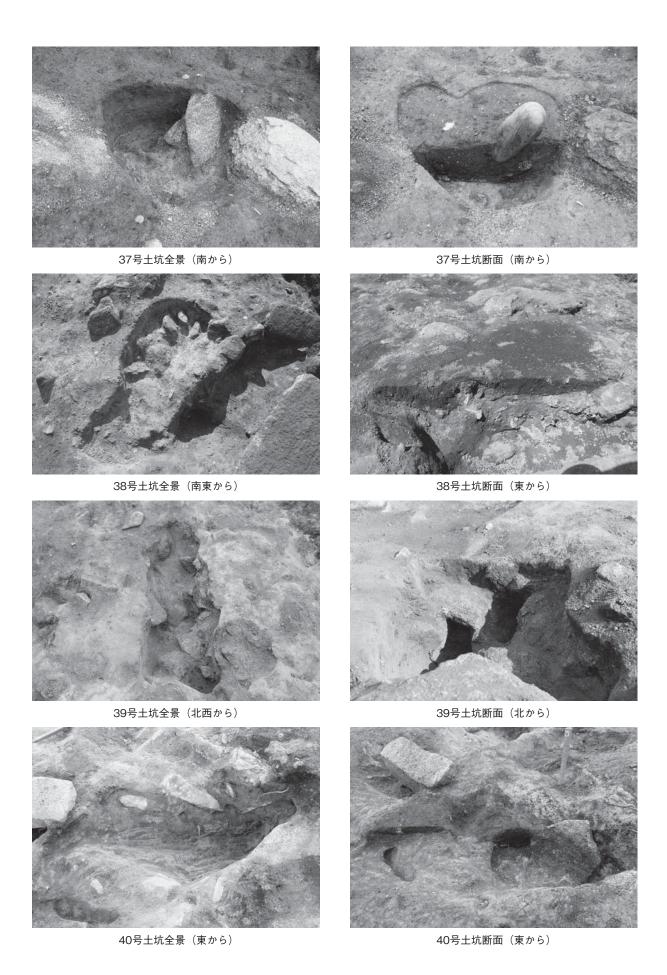
写真図版48 25~28号土坑



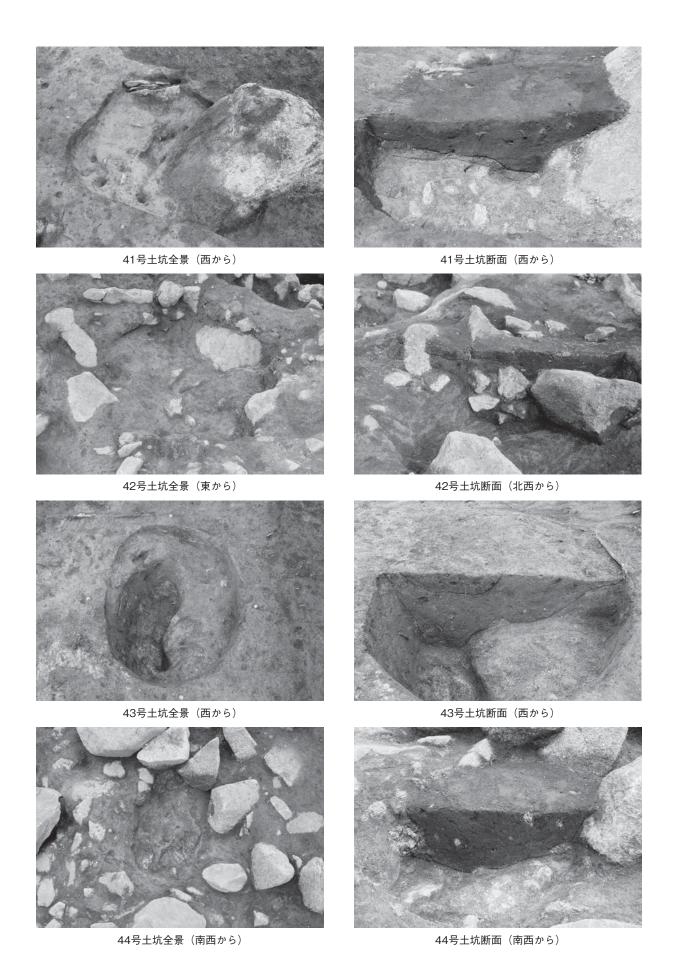
写真図版49 29~32号土坑



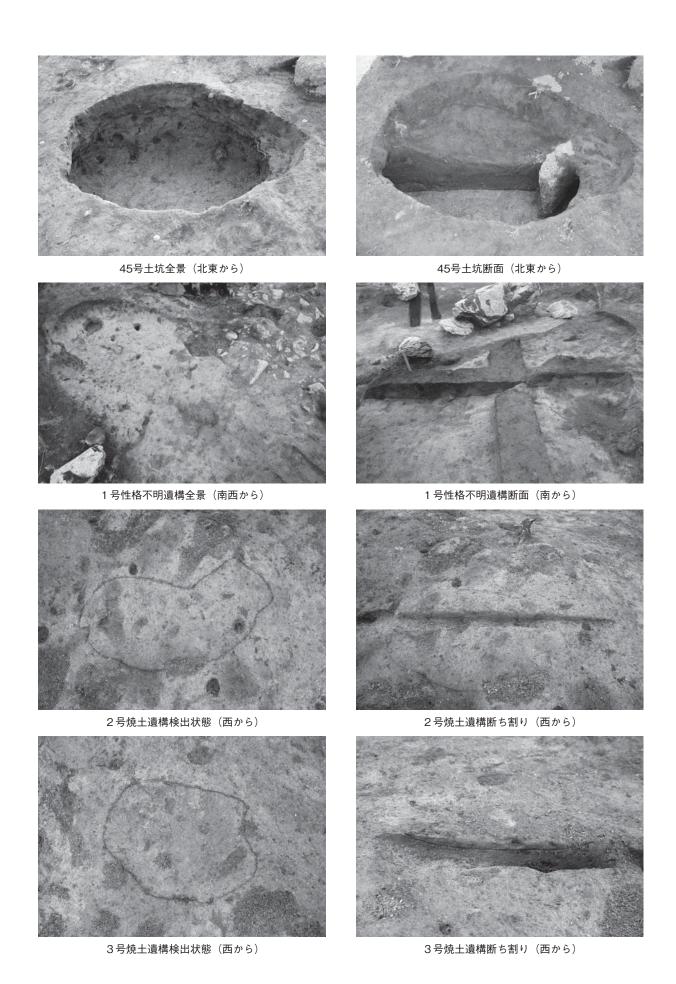
写真図版50 33~36号土坑



写真図版51 37~40号土坑



写真図版52 41~44号土坑



写真図版53 45号土坑・1号性格不明遺構・2・3号焼土遺構



写真図版54 縄文土器(1)



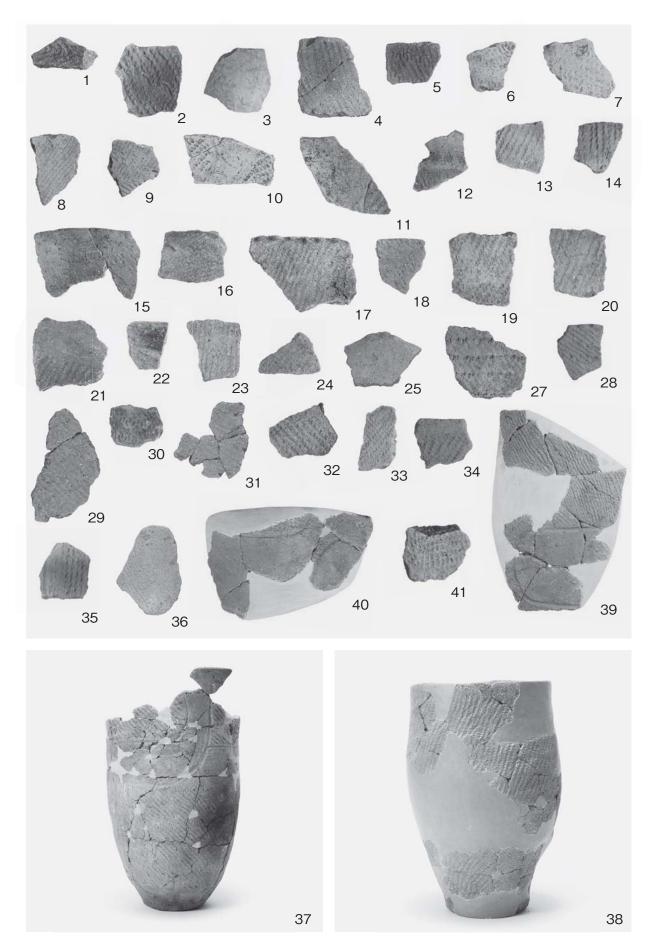




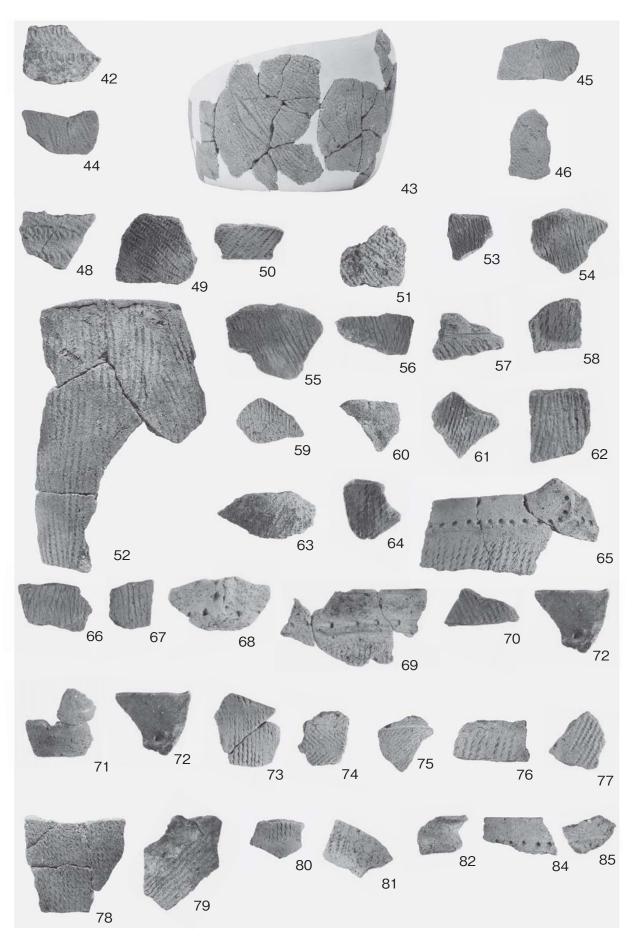
931



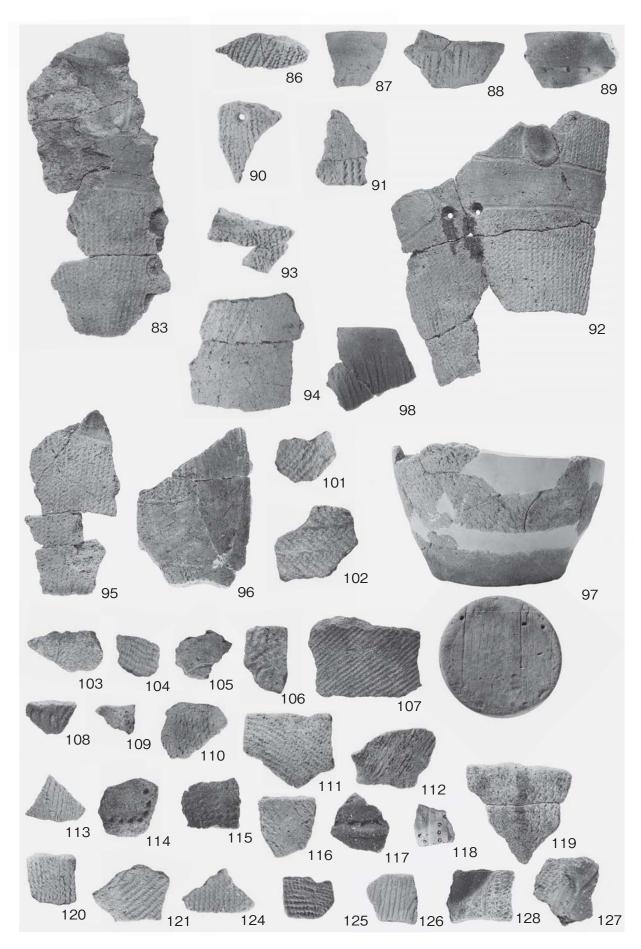
写真図版55 縄文土器(2)



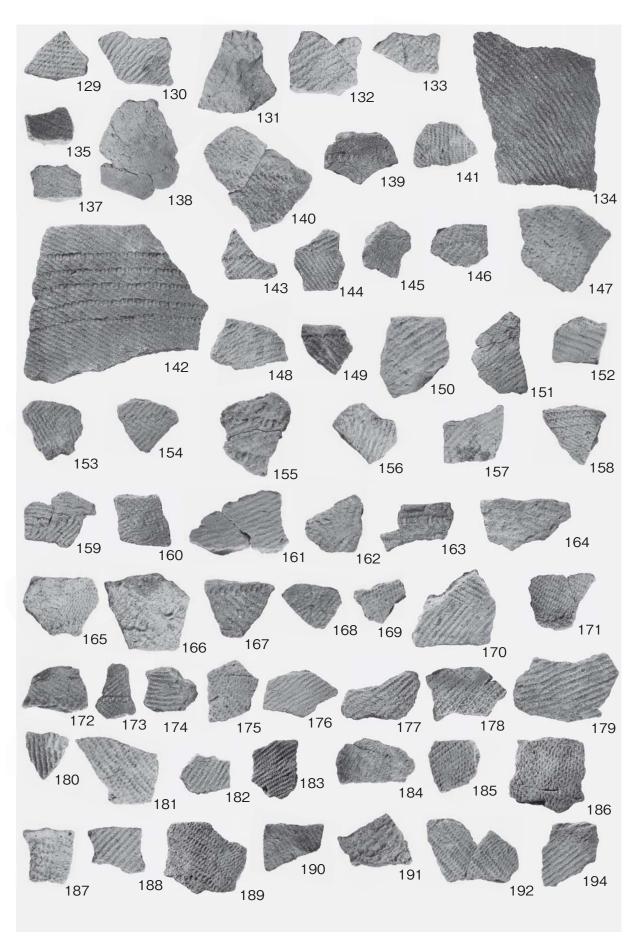
写真図版56 縄文土器(3)



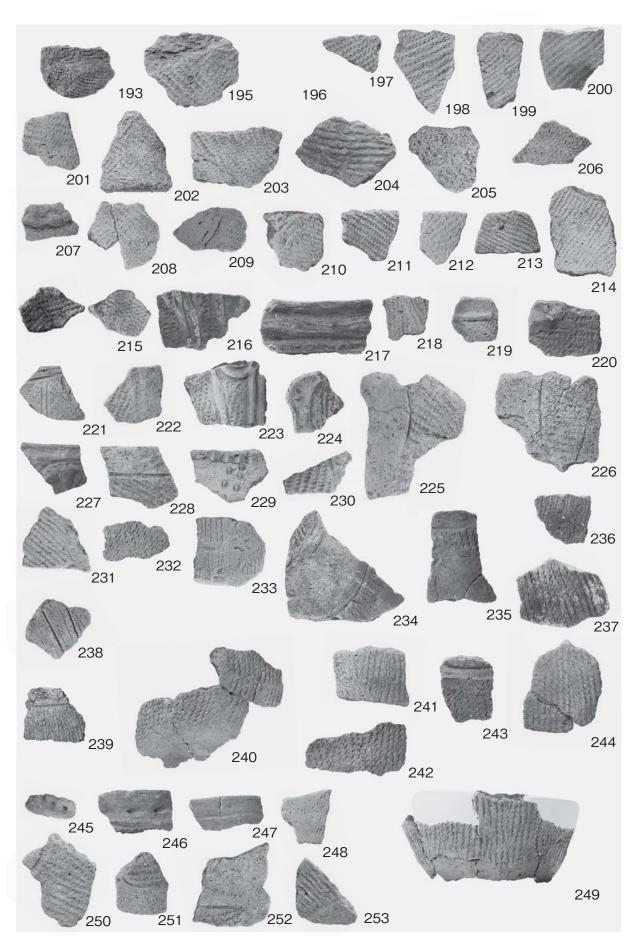
写真図版57 縄文土器(4)



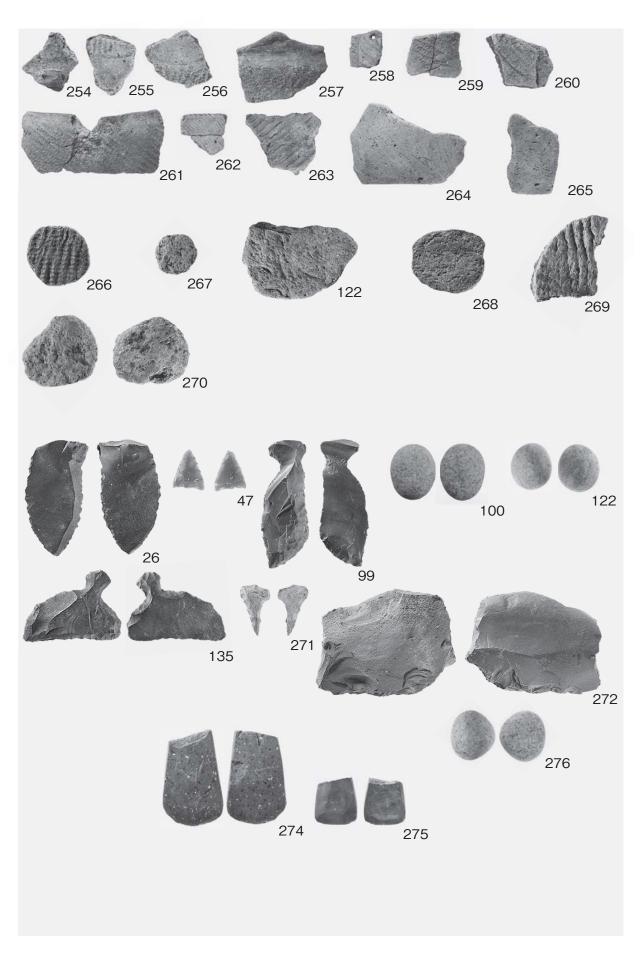
写真図版58 縄文土器(5)



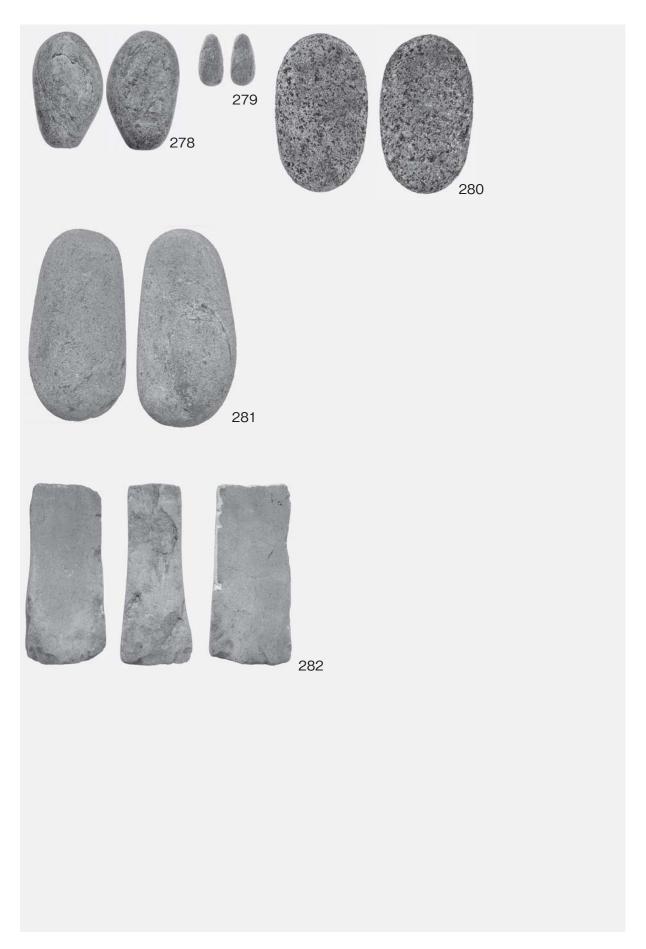
写真図版59 縄文土器(6)



写真図版60 縄文土器 (7)



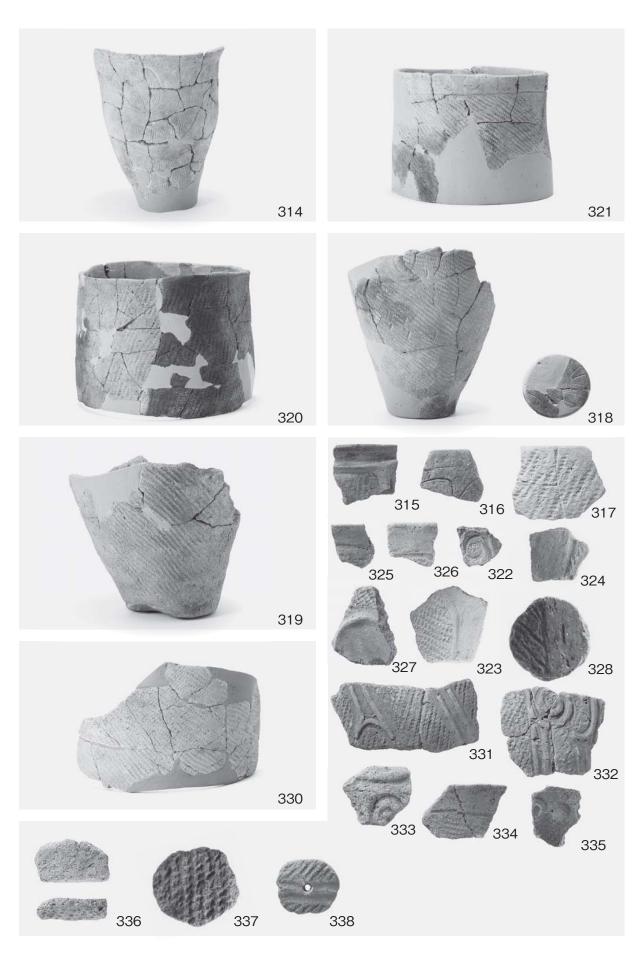
写真図版61 縄文土器(8)、石器(1)



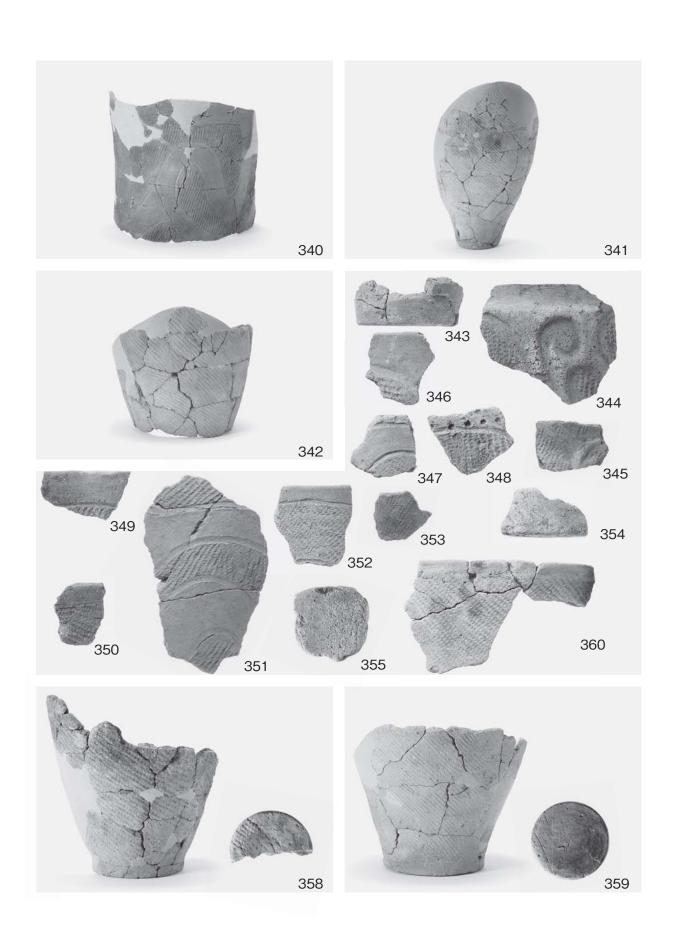
写真図版62 石器(2)



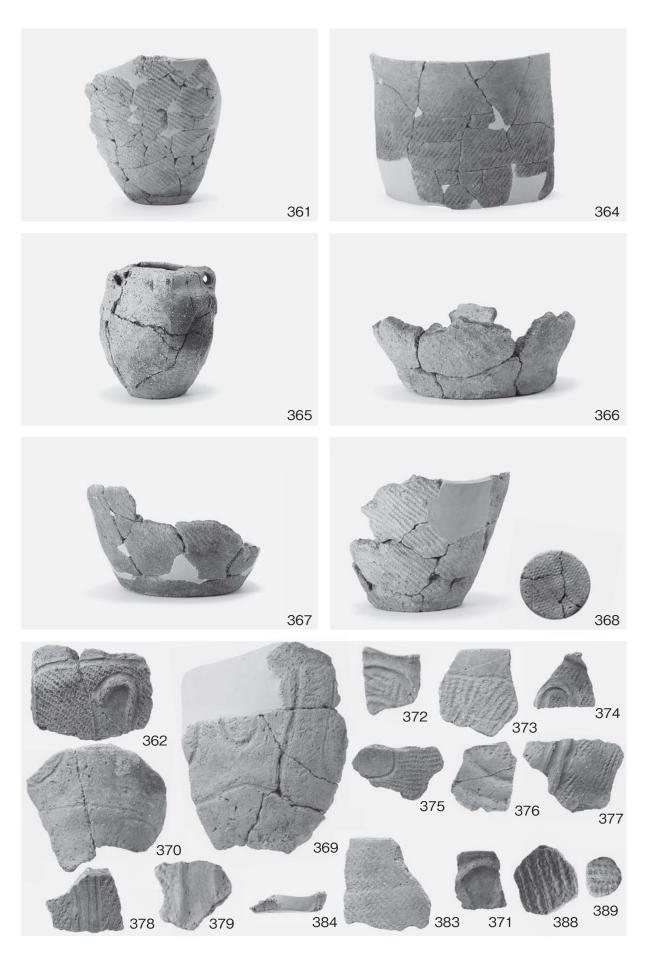
写真図版63 縄文土器(1)



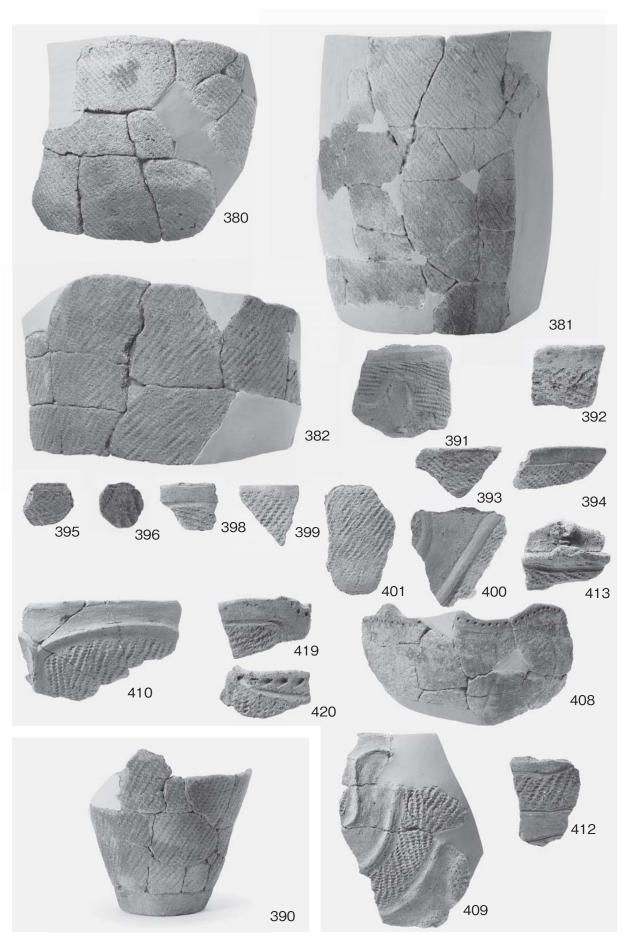
写真図版64 縄文土器(2)



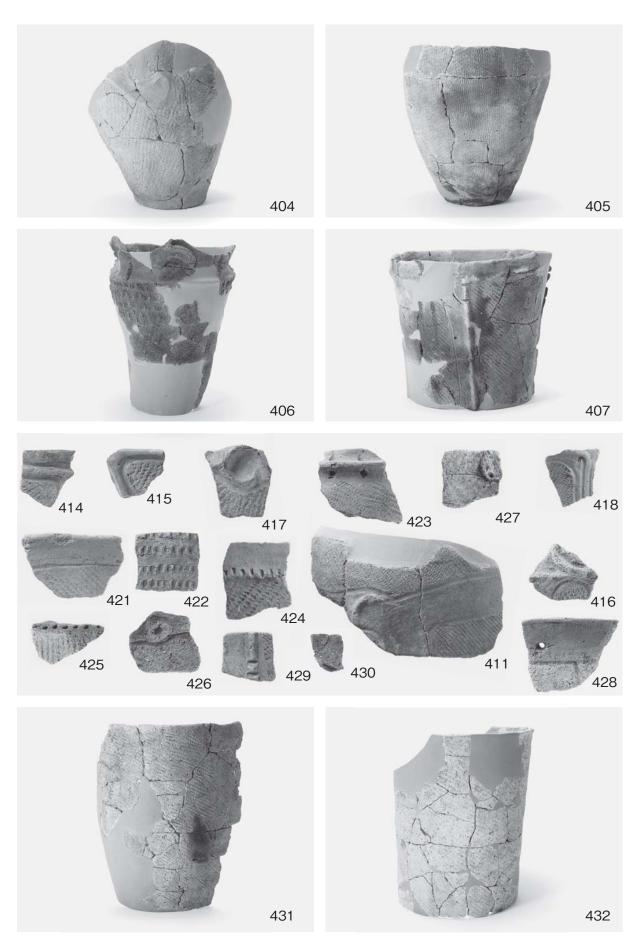
写真図版65 縄文土器(3)



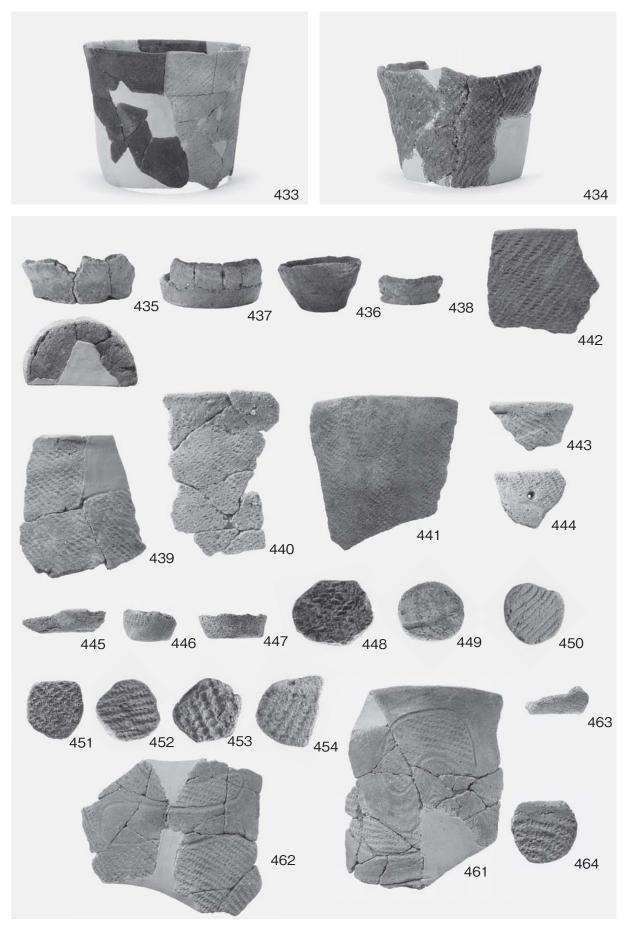
写真図版66 縄文土器(4)



写真図版67 縄文土器(5)



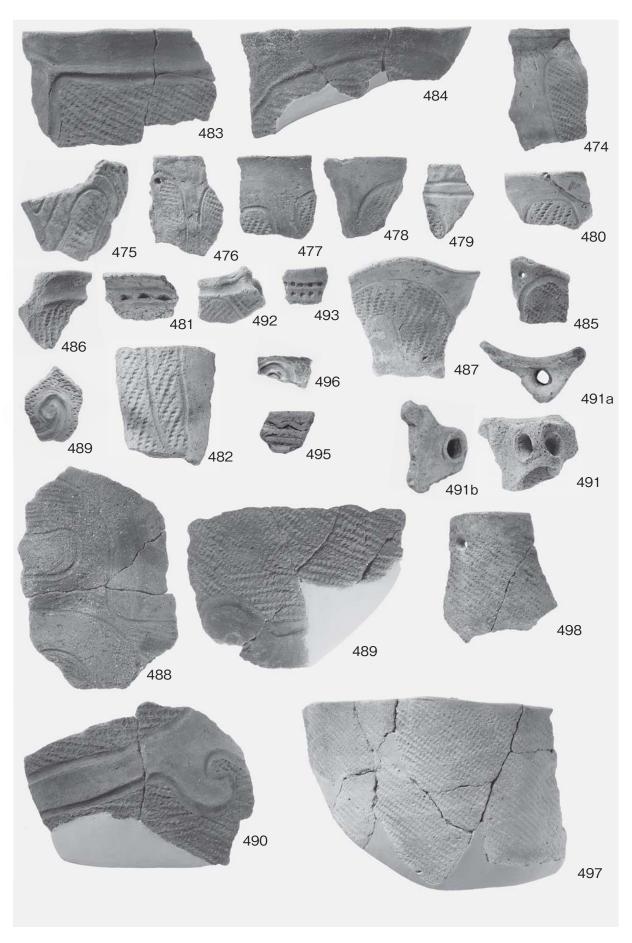
写真図版68 縄文土器(6)



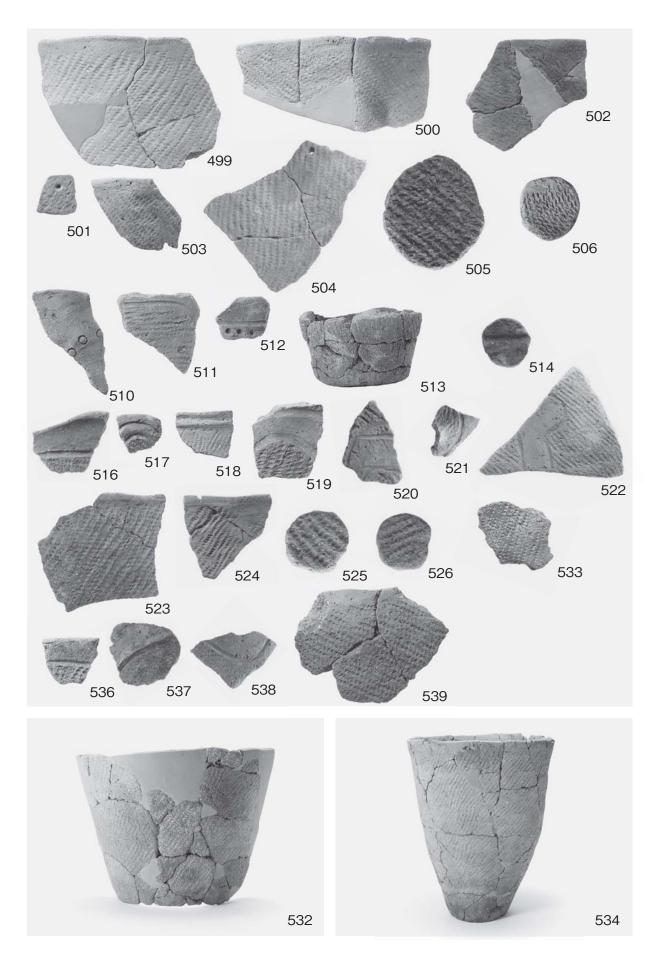
写真図版69 縄文土器(7)



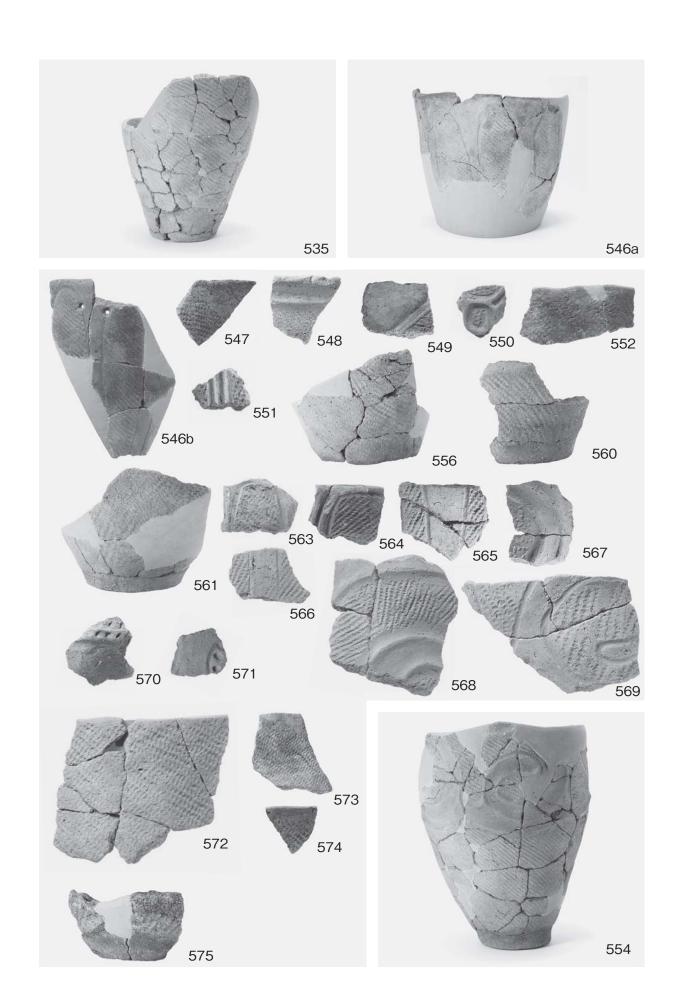
写真図版70 縄文土器(8)



写真図版71 縄文土器(9)



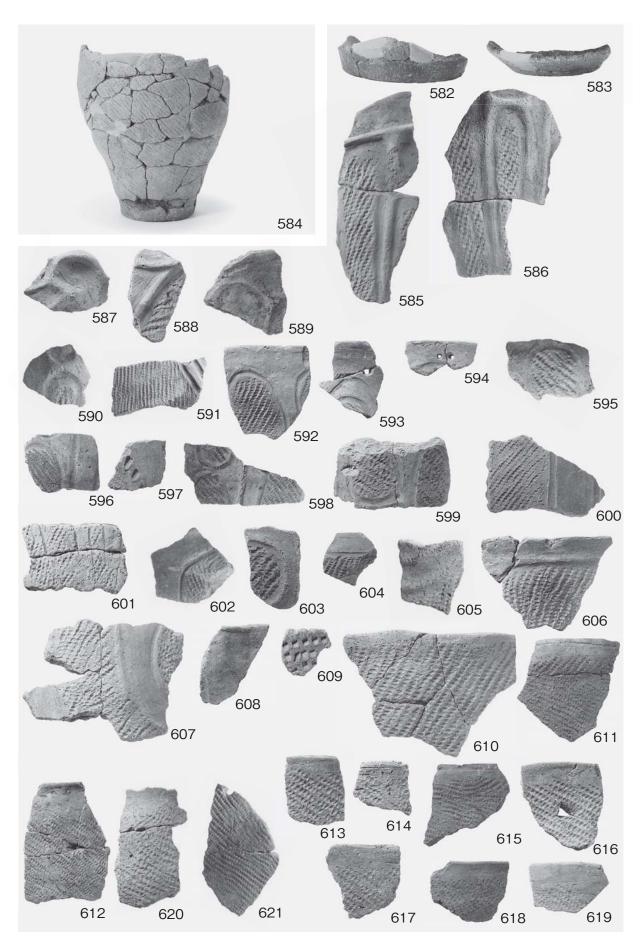
写真図版72 縄文土器(10)



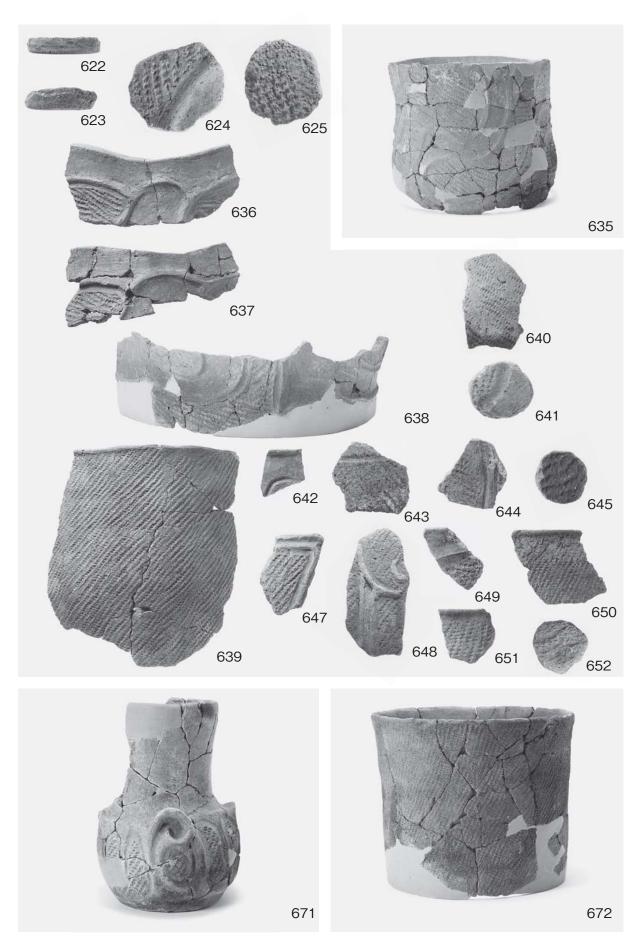
写真図版73 縄文土器(11)



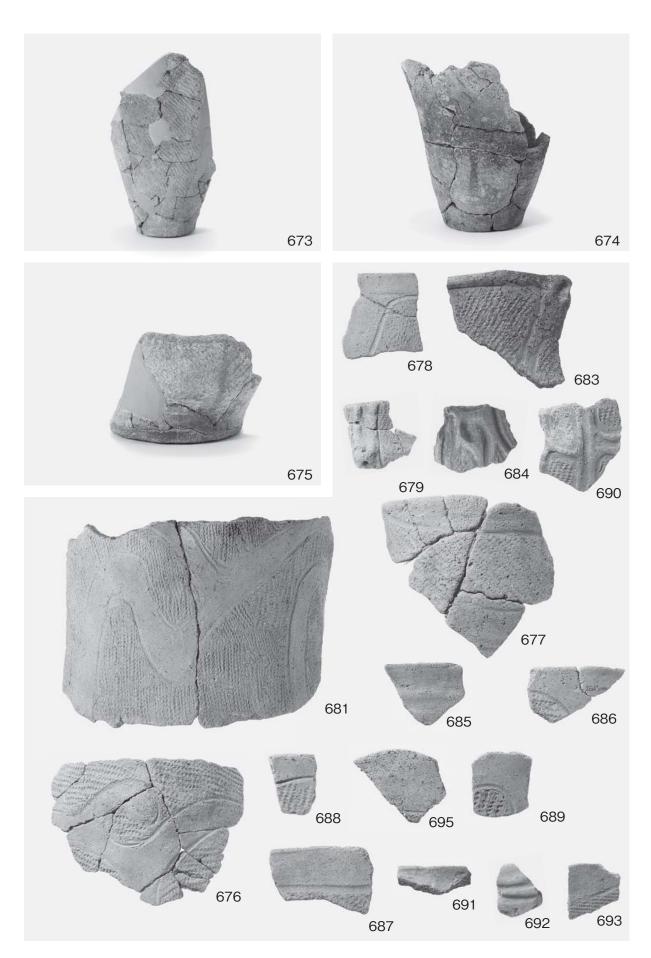
写真図版74 縄文土器(12)



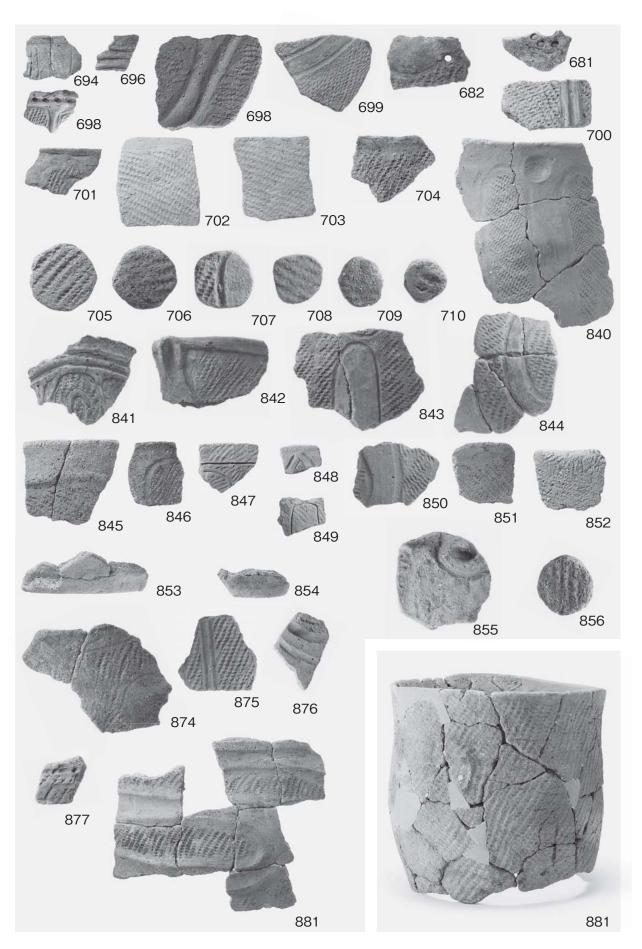
写真図版75 縄文土器(13)



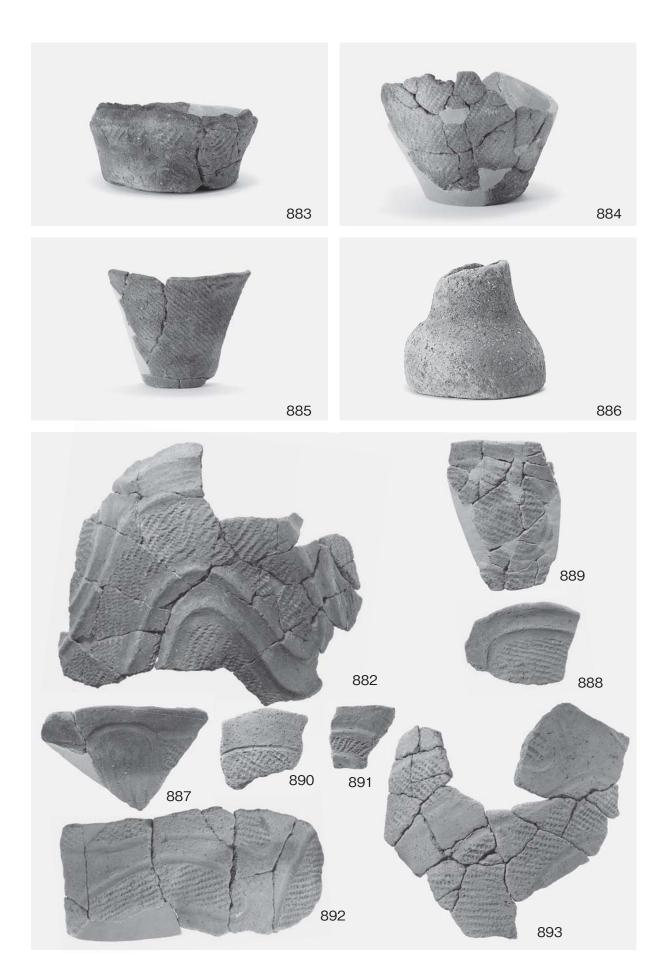
写真図版76 縄文土器(14)



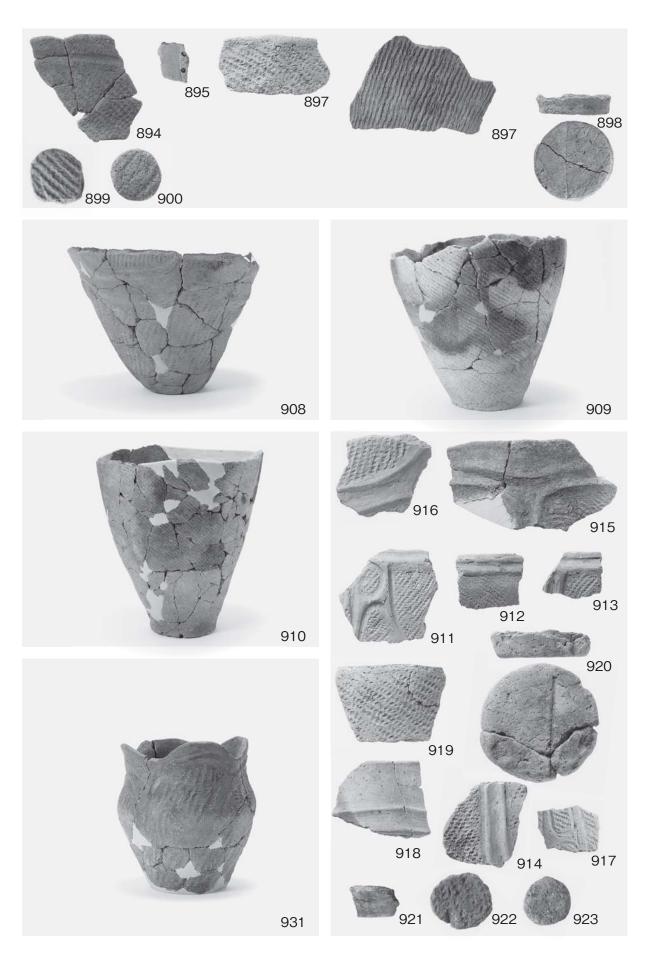
写真図版77 縄文土器(15)



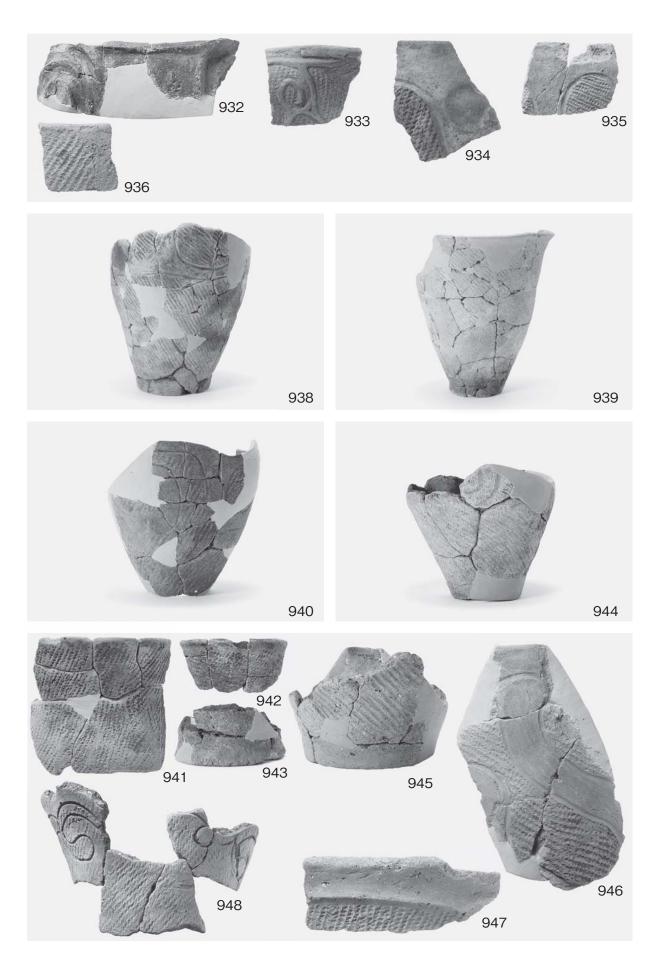
写真図版78 縄文土器(16)



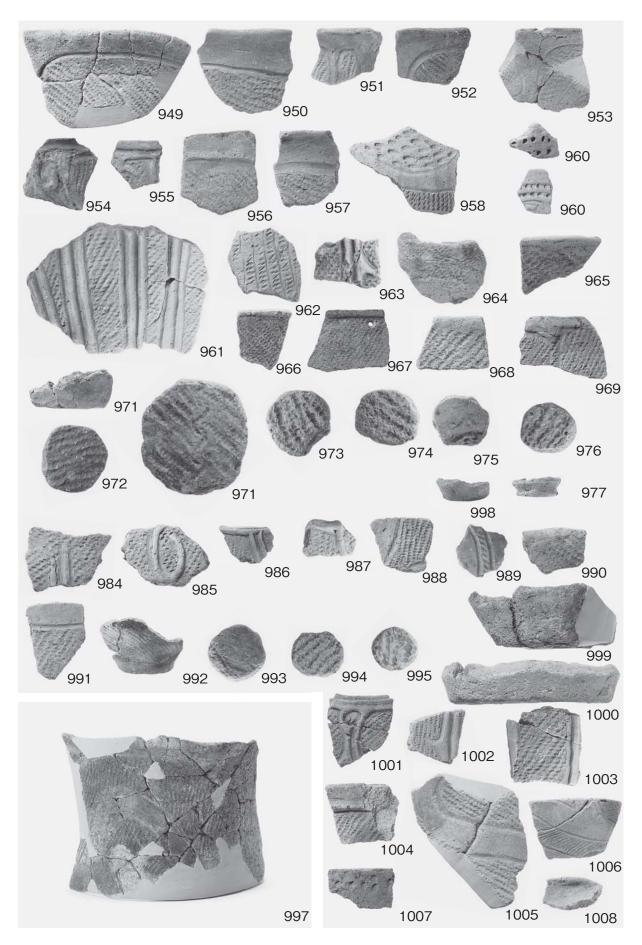
写真図版79 縄文土器(17)



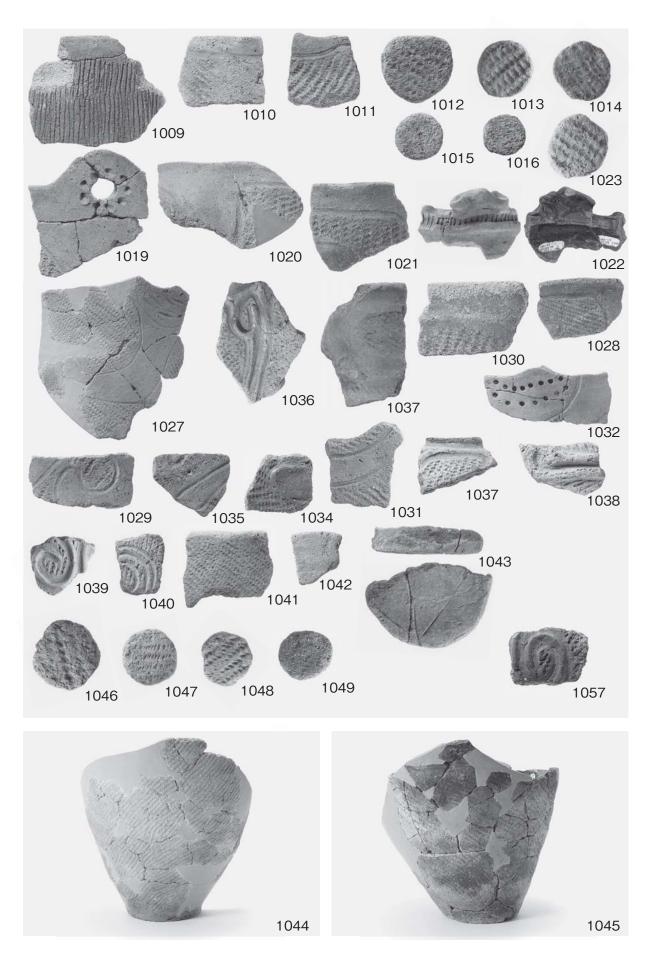
写真図版80 縄文土器(18)



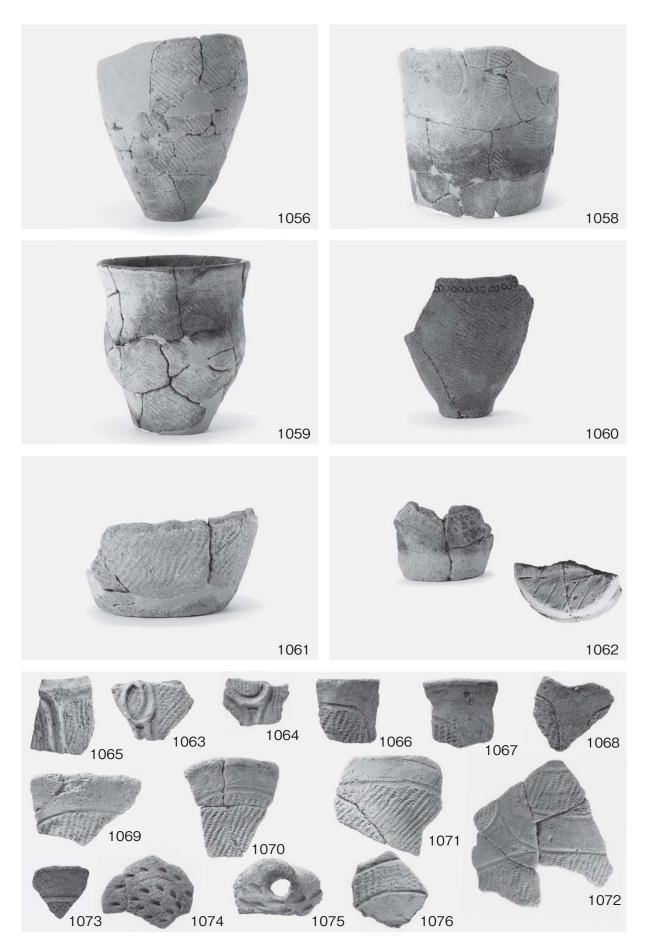
写真図版81 縄文土器(19)



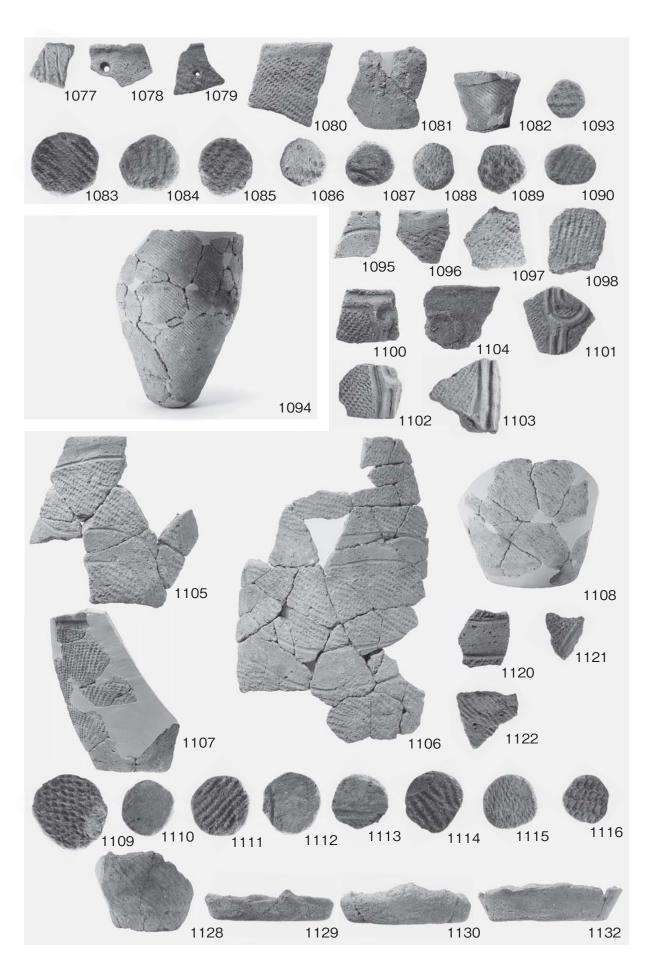
写真図版82 縄文土器(20)



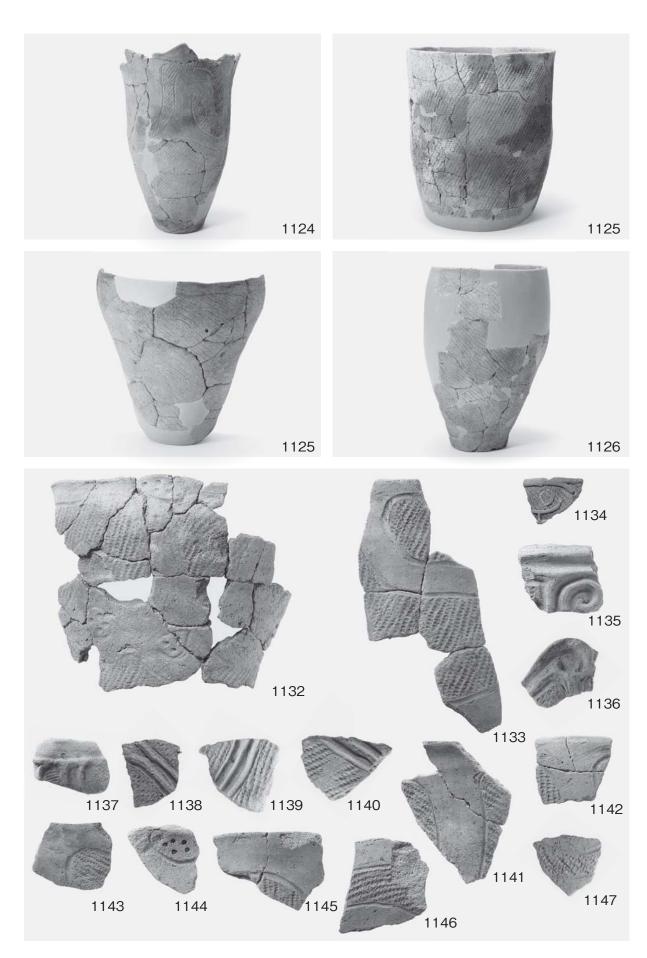
写真図版83 縄文土器(21)



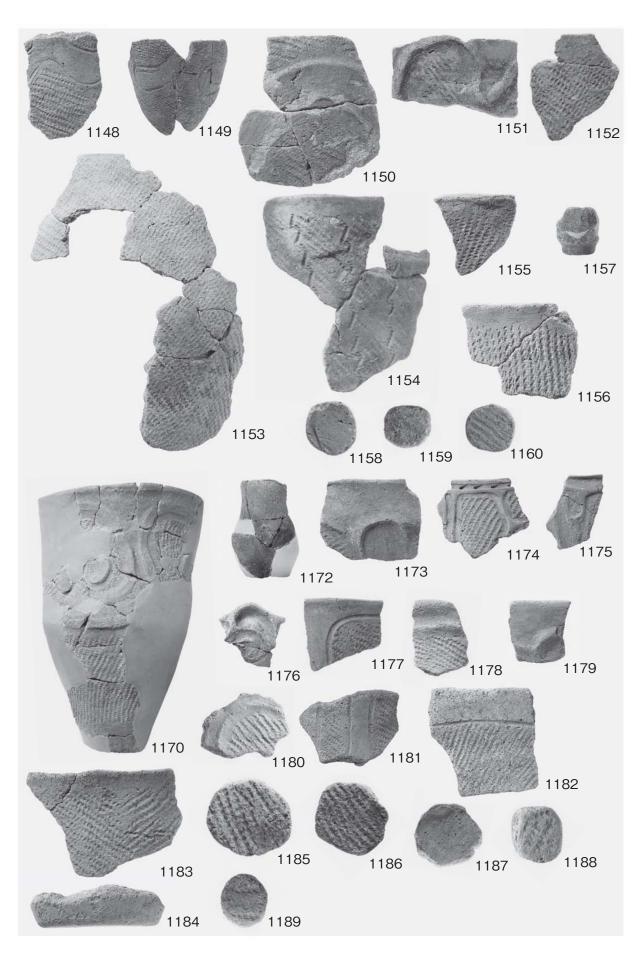
写真図版84 縄文土器 (22)



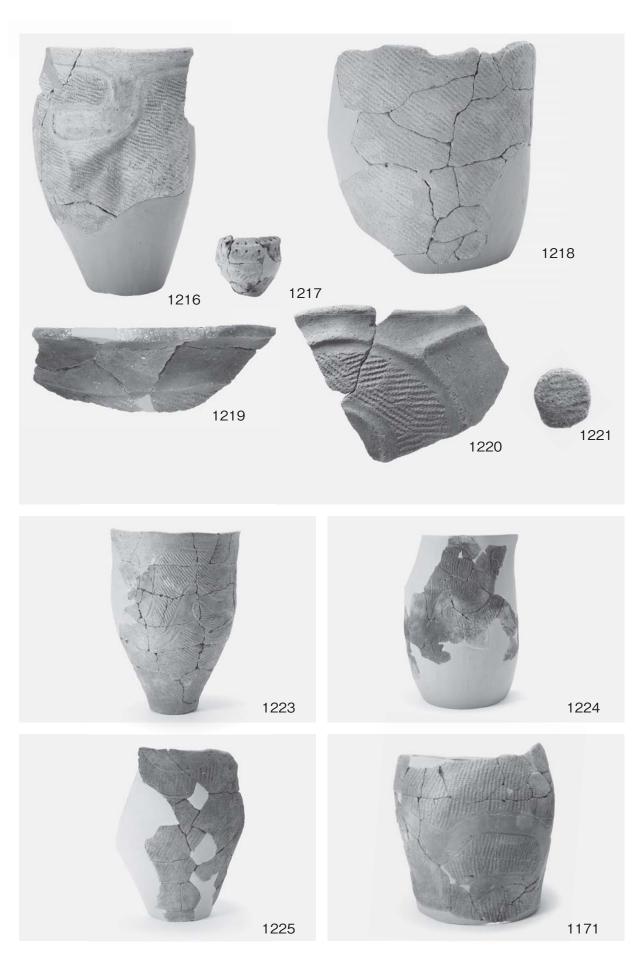
写真図版85 縄文土器(23)



写真図版86 縄文土器(24)



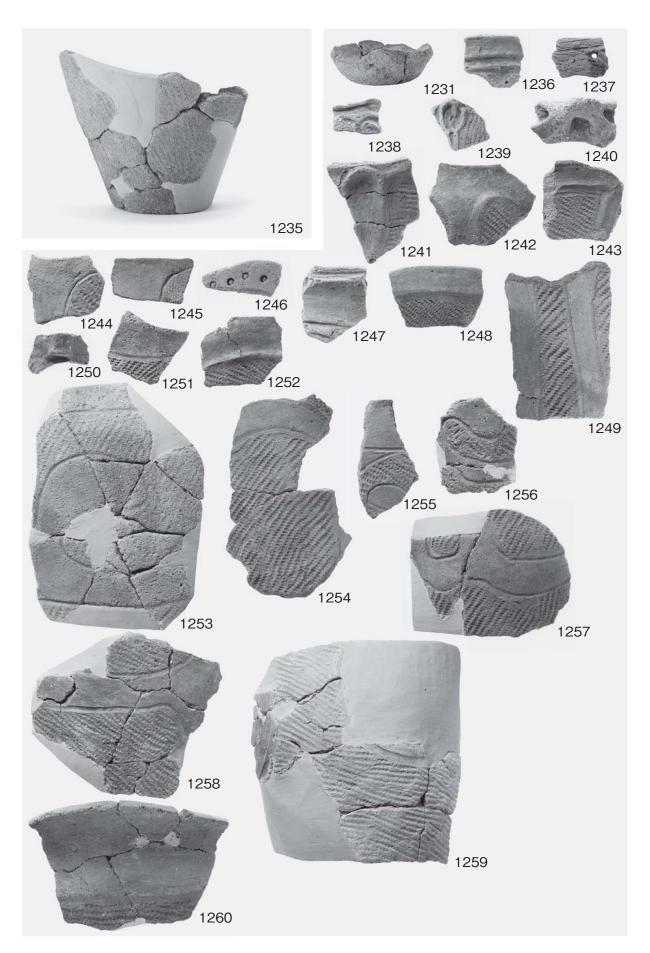
写真図版87 縄文土器(25)



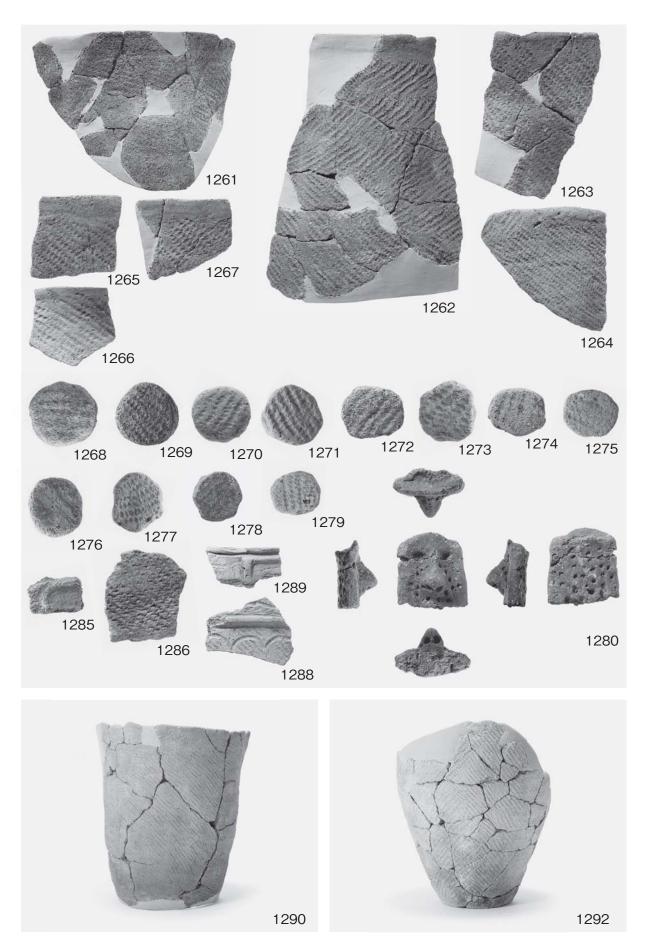
写真図版88 縄文土器(26)



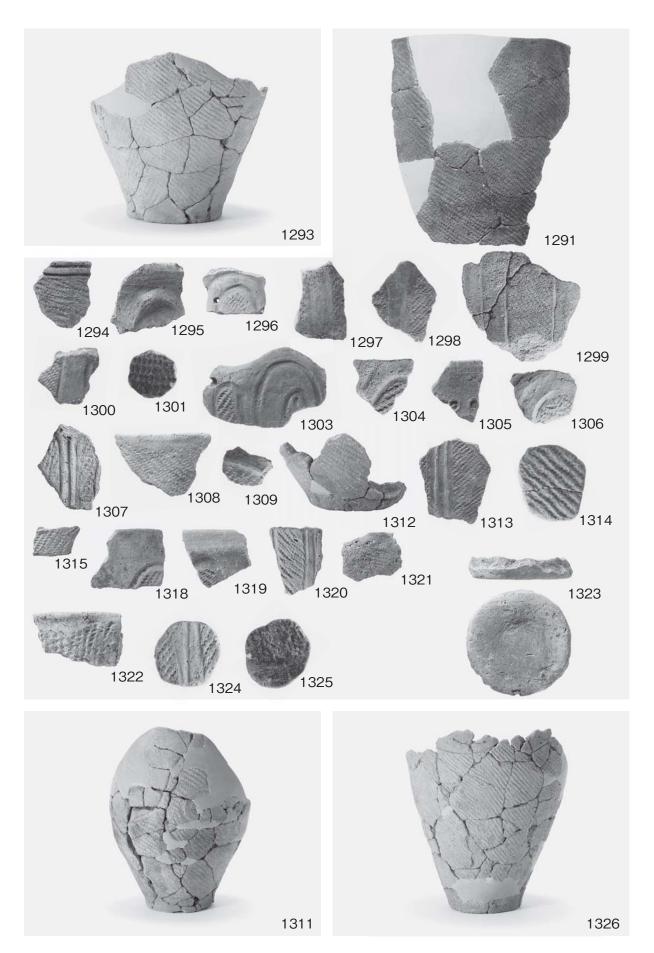
写真図版89 縄文土器(27)



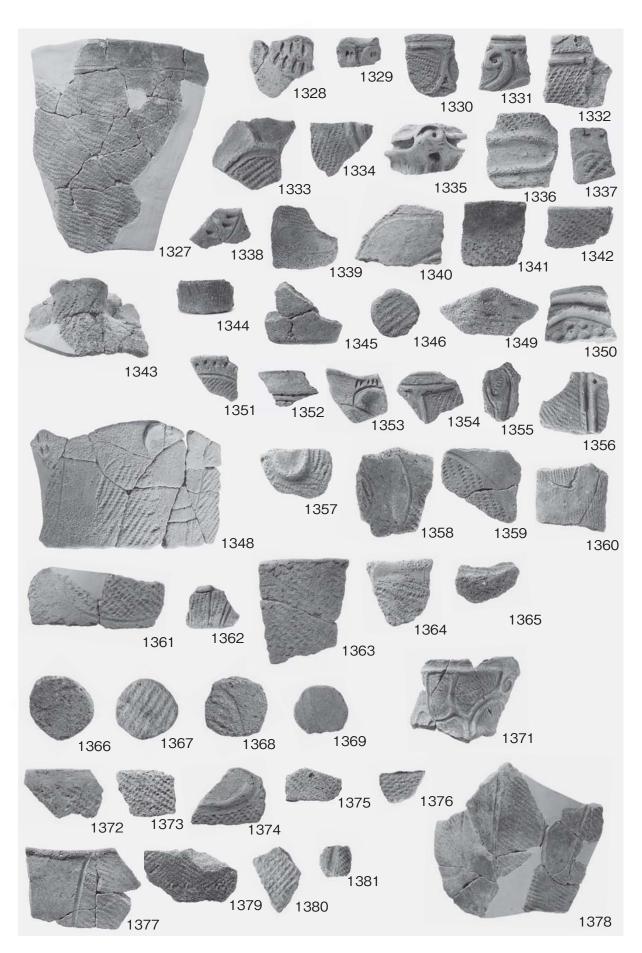
写真図版90 縄文土器(28)



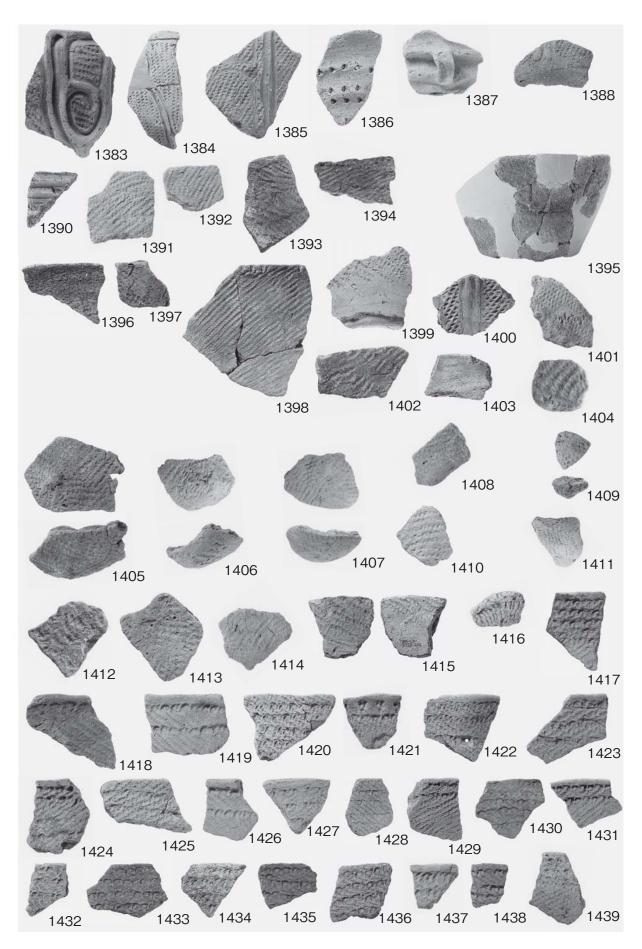
写真図版91 縄文土器 (29)



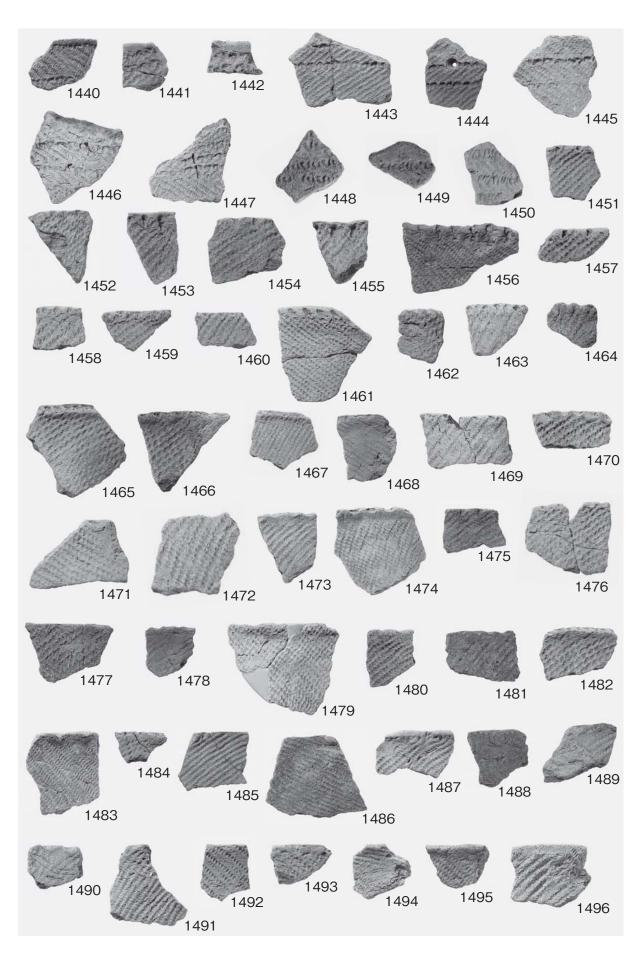
写真図版92 縄文土器(30)



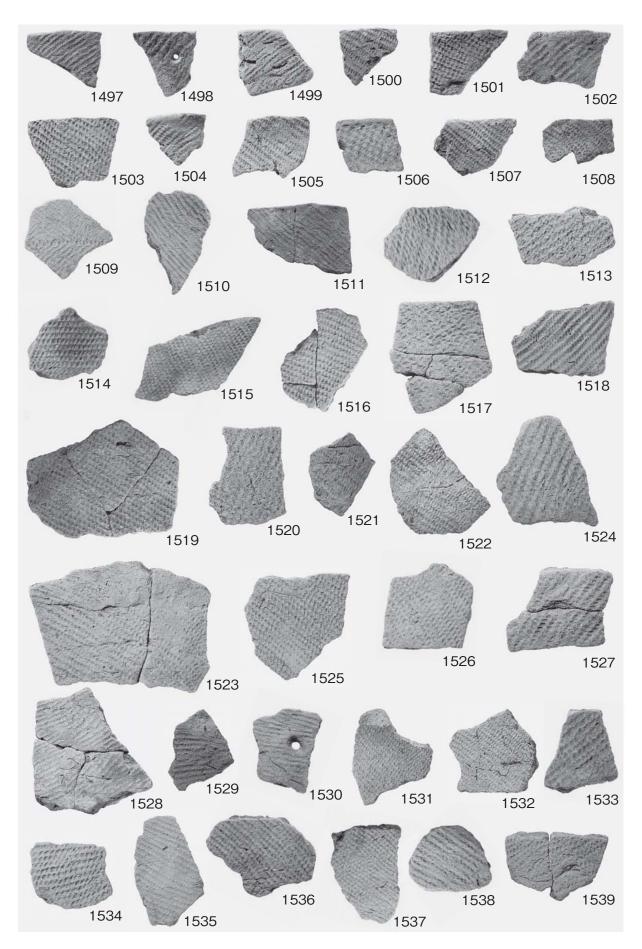
写真図版93 縄文土器(31)



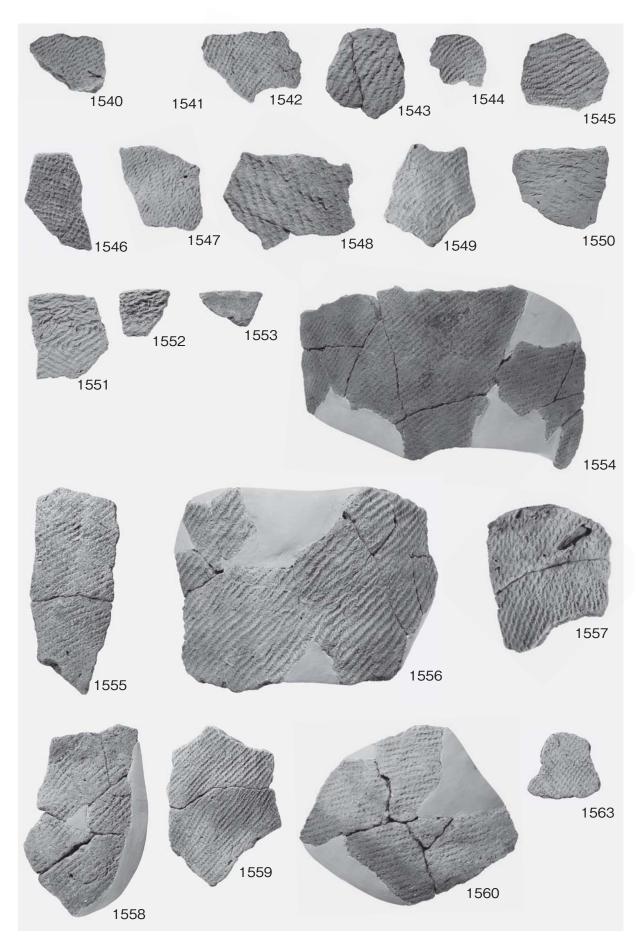
写真図版94 縄文土器 (32)



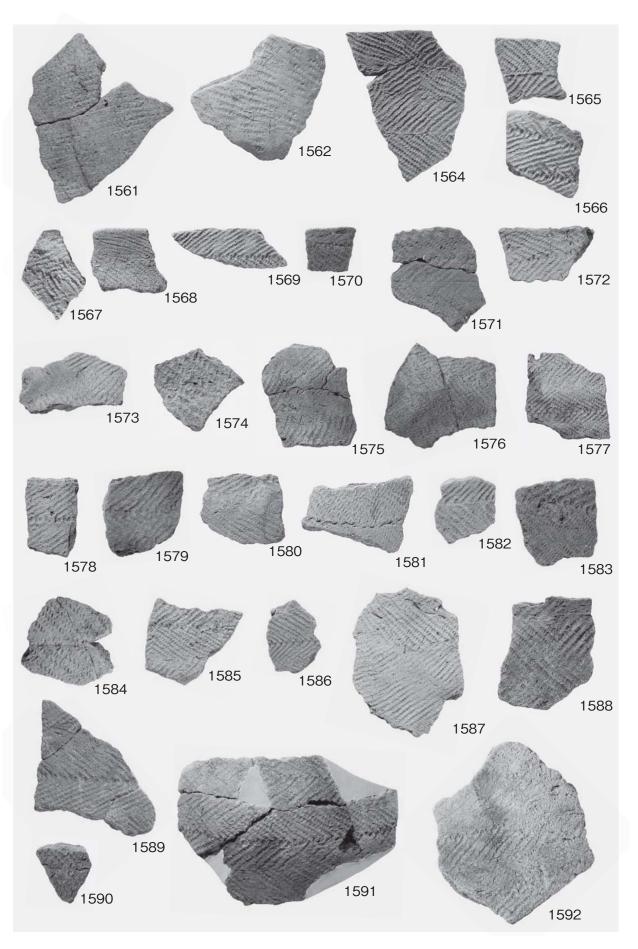
写真図版95 縄文土器 (33)



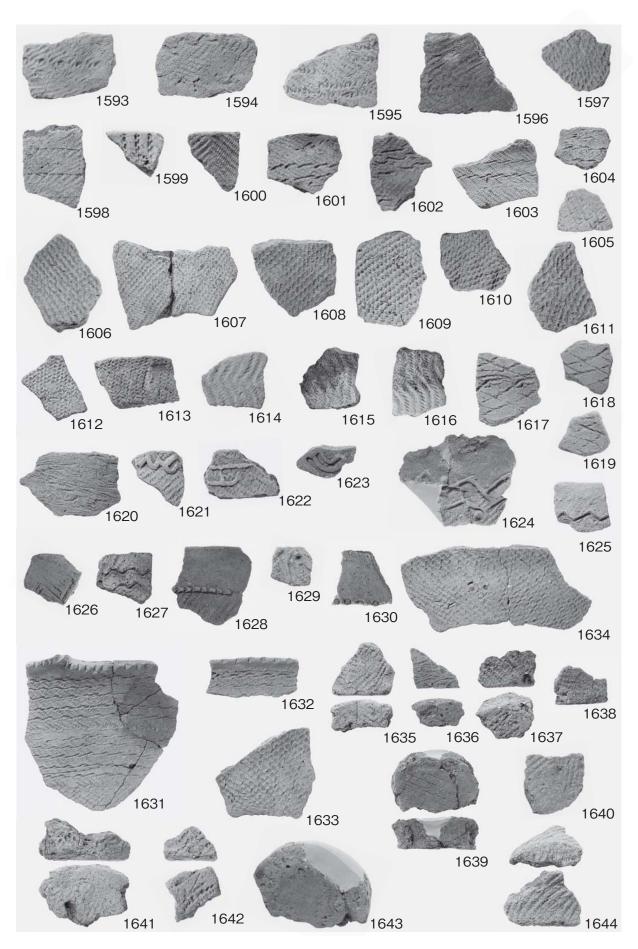
写真図版96 縄文土器(34)



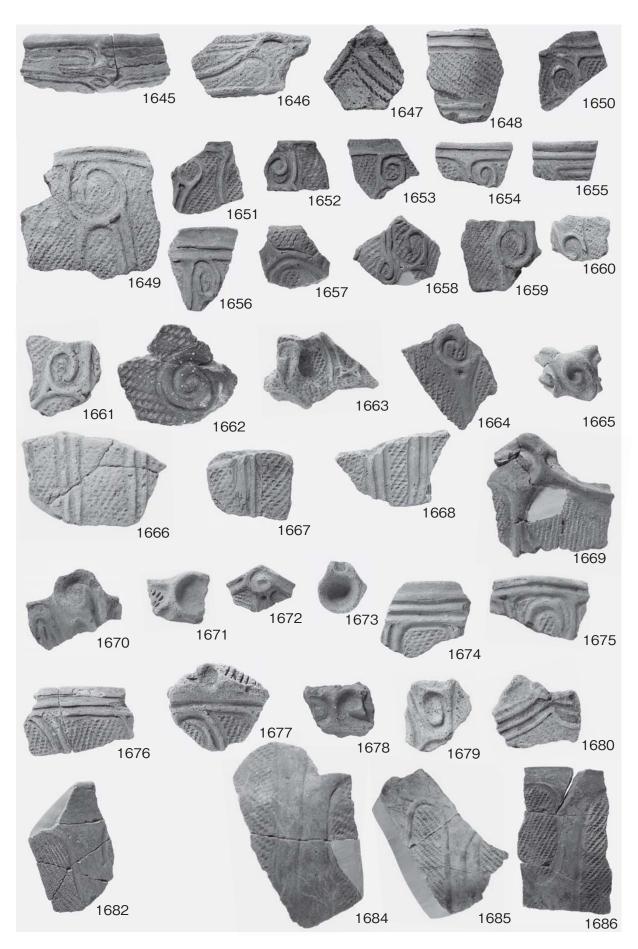
写真図版97 縄文土器 (35)



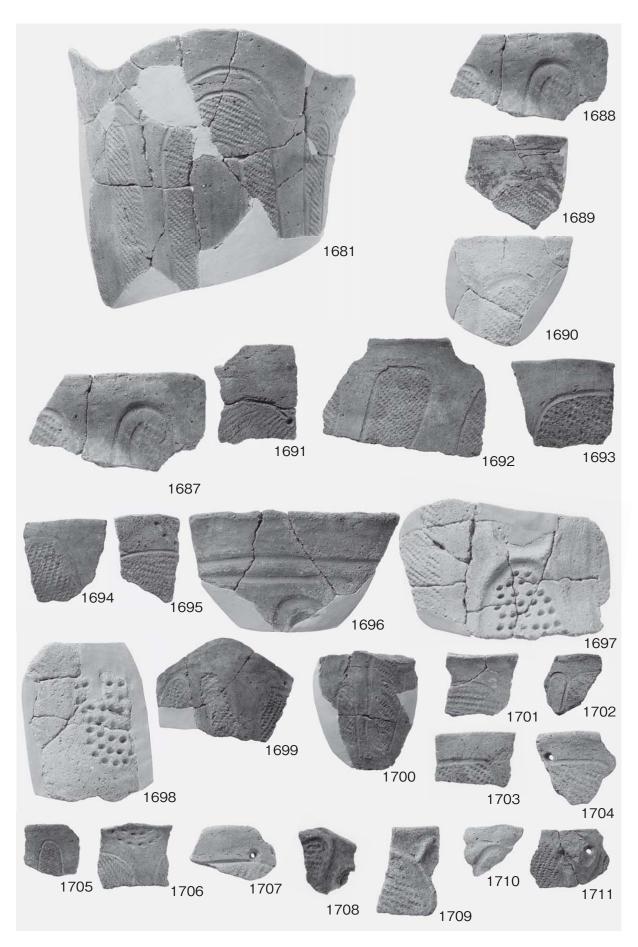
写真図版98 縄文土器 (36)



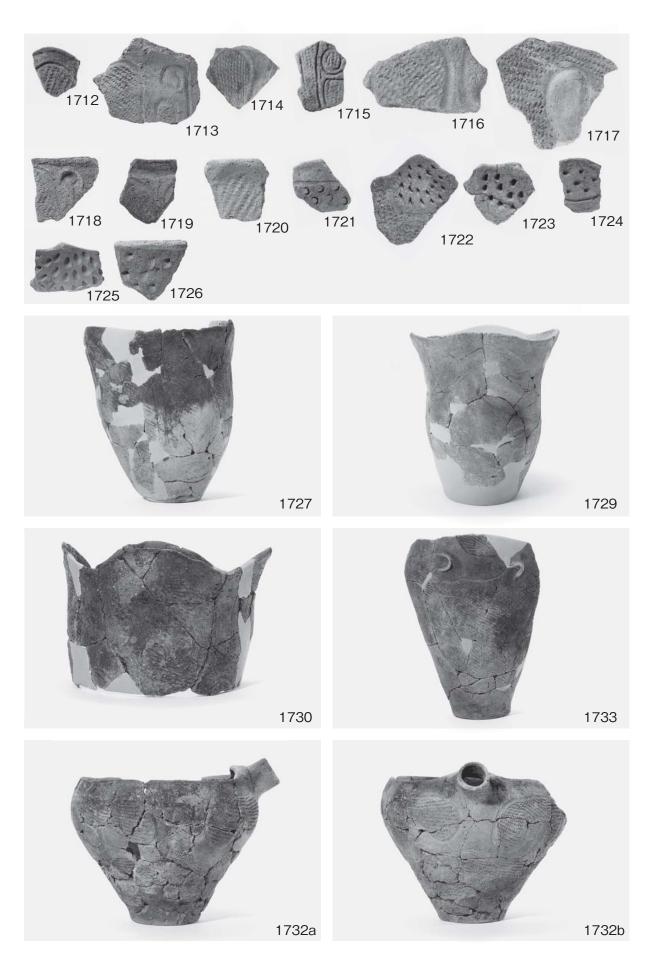
写真図版99 縄文土器 (37)



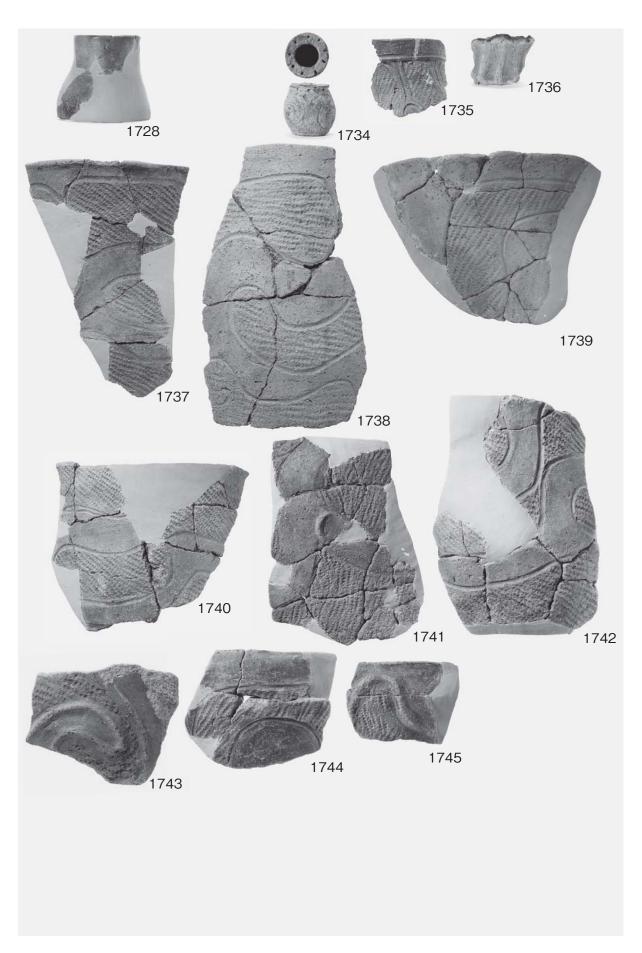
写真図版100 縄文土器(38)



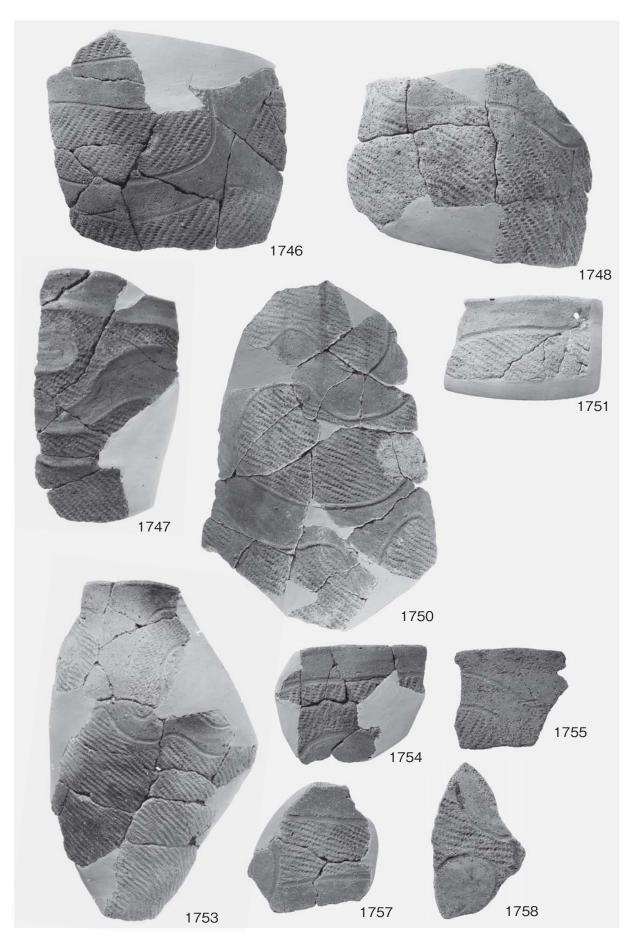
写真図版101 縄文土器(39)



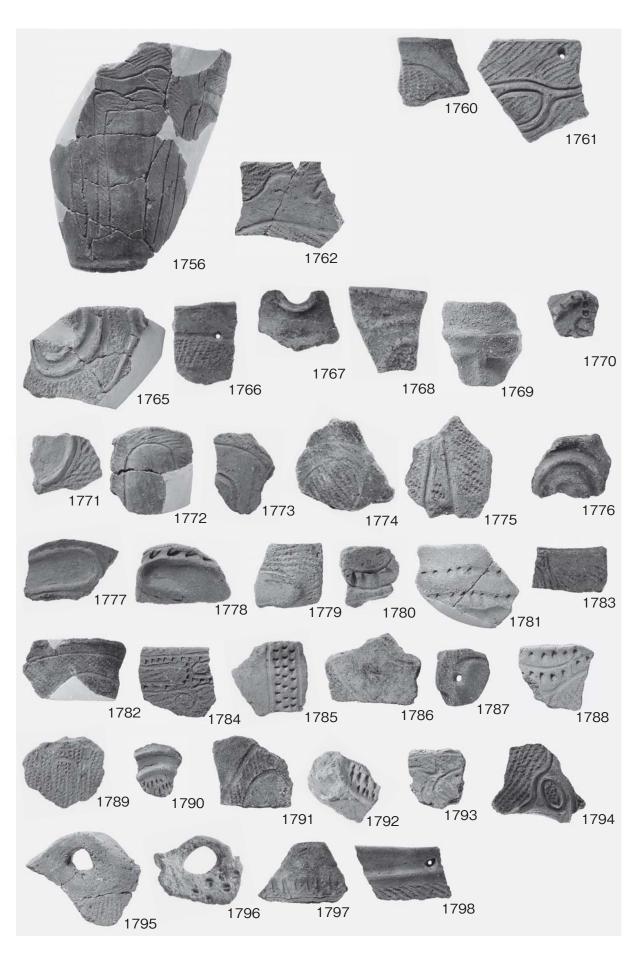
写真図版102 縄文土器(40)



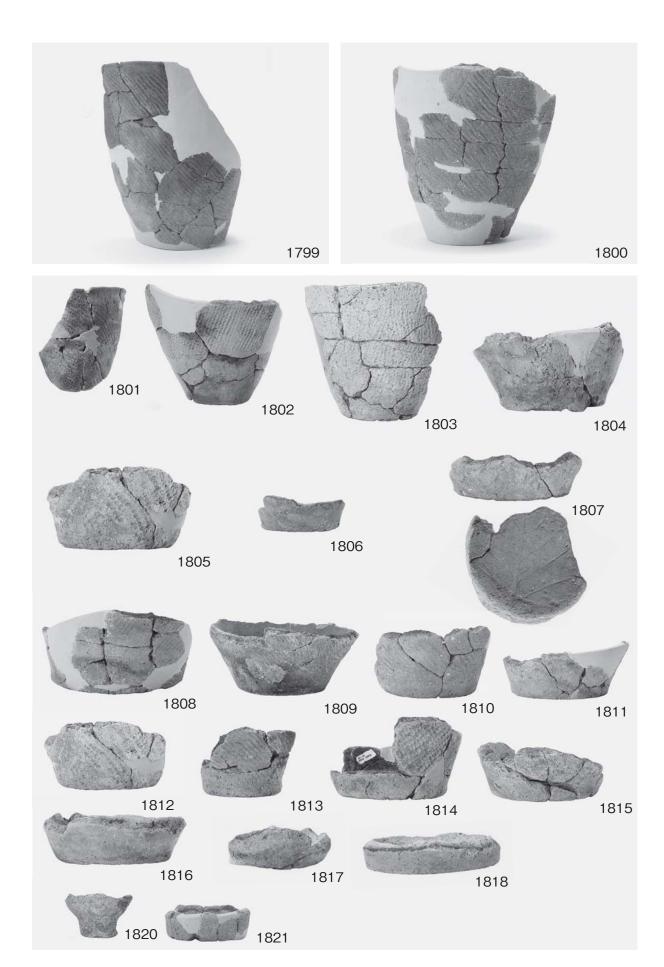
写真図版103 縄文土器(41)



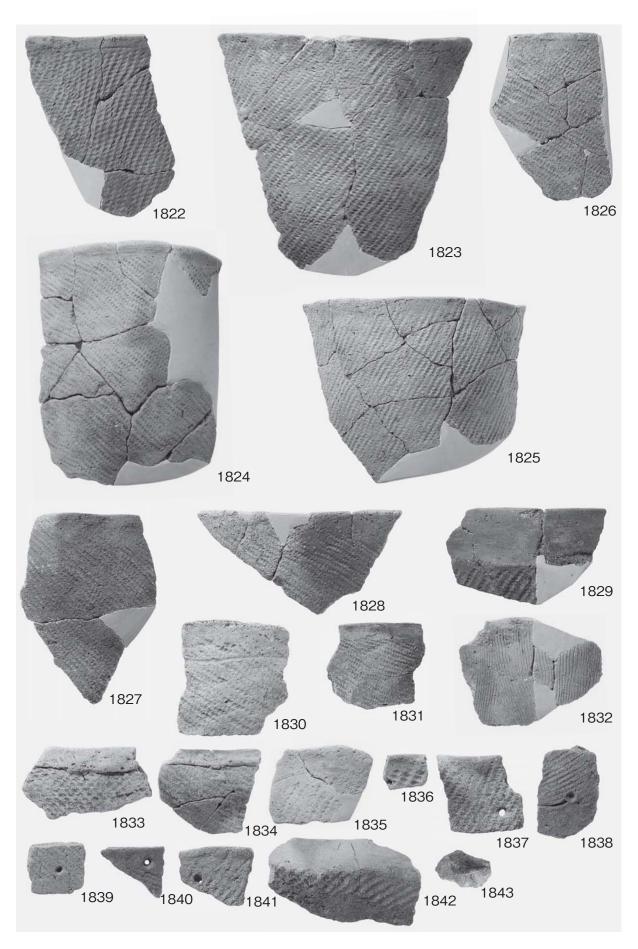
写真図版104 縄文土器(42)



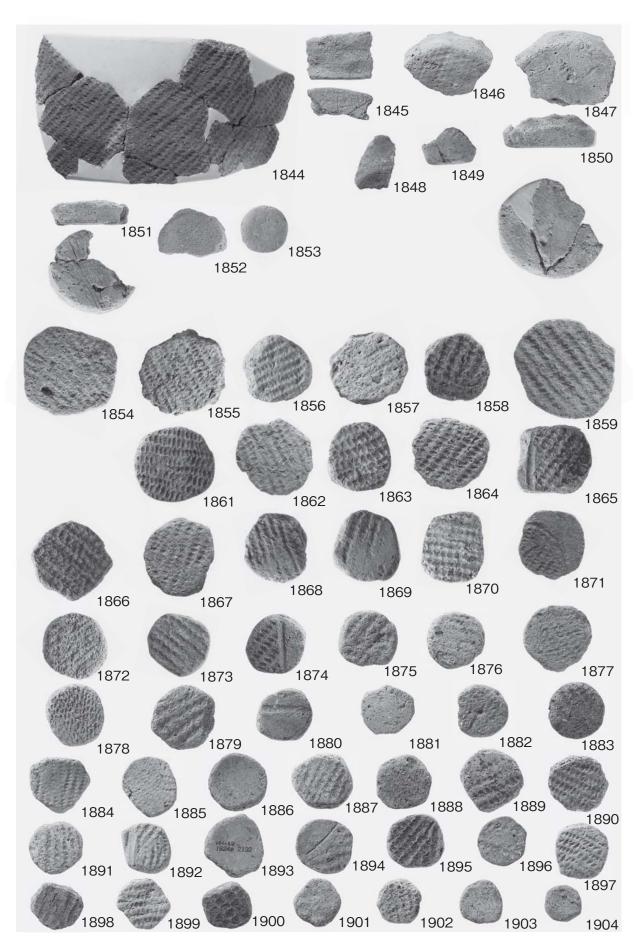
写真図版105 縄文土器(43)



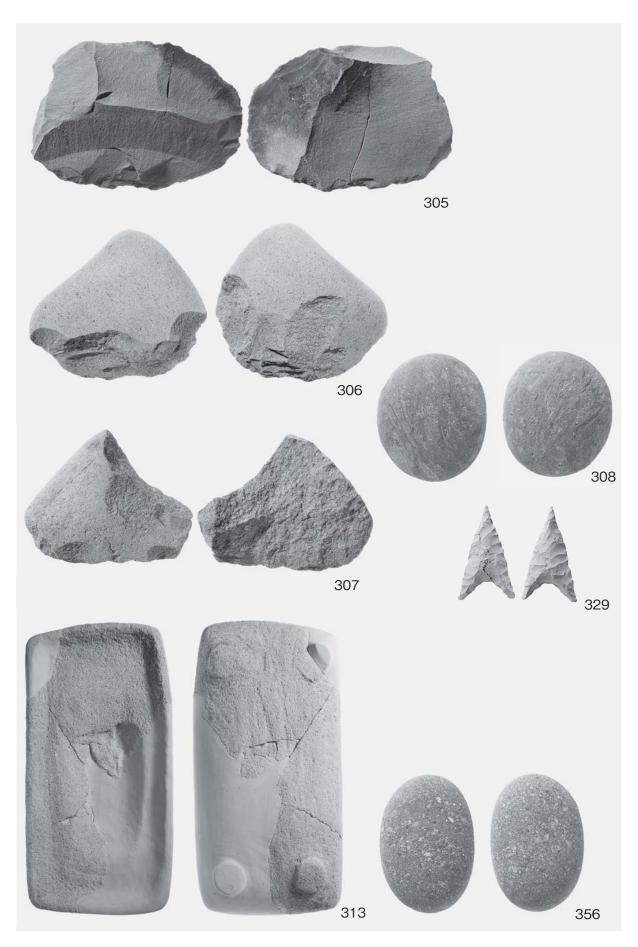
写真図版106 縄文土器(44)



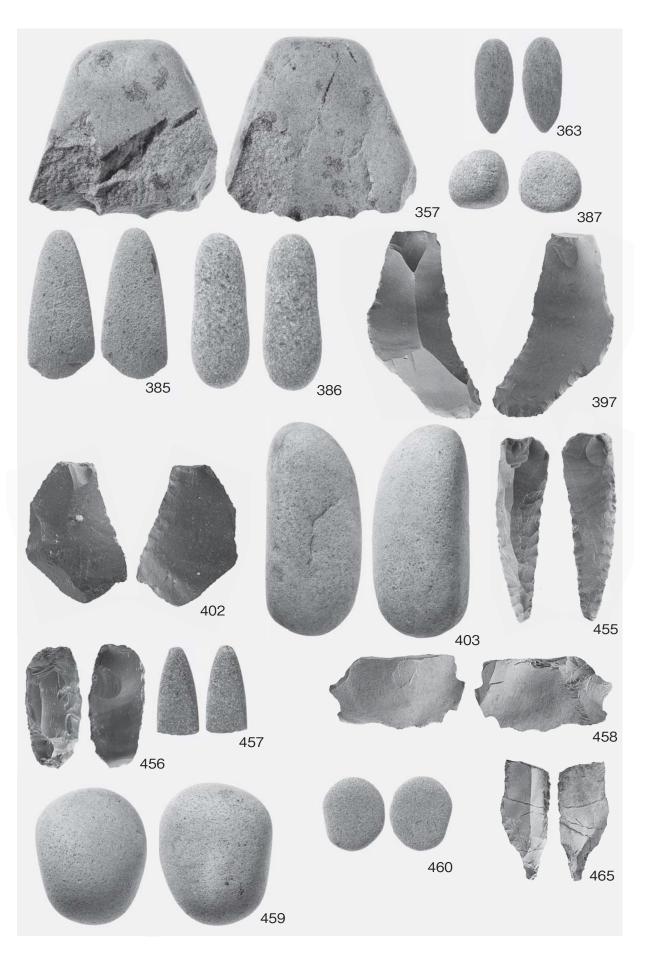
写真図版107 縄文土器(45)



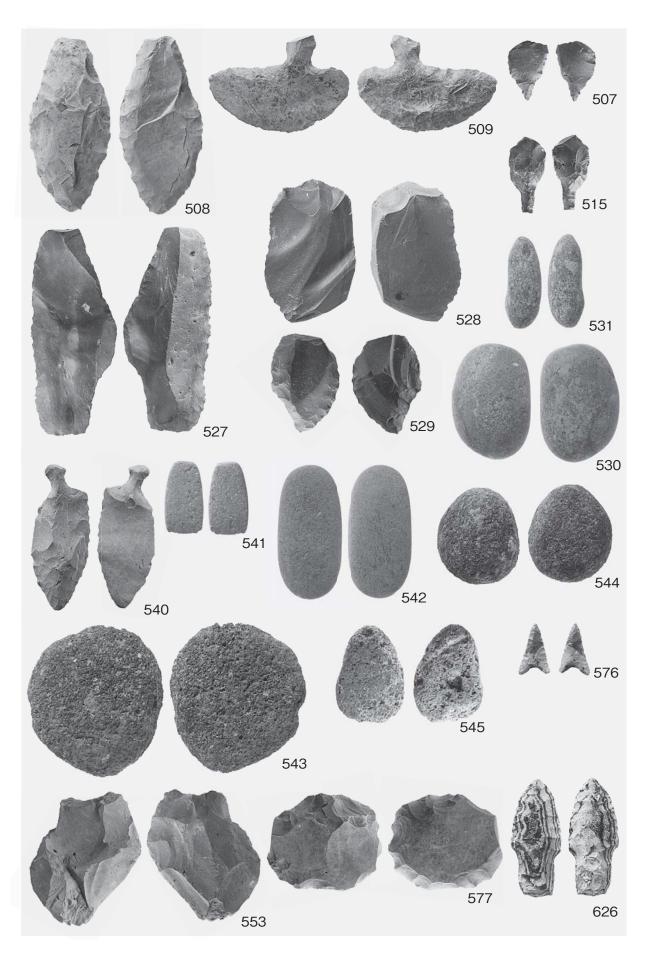
写真図版108 縄文土器(46)



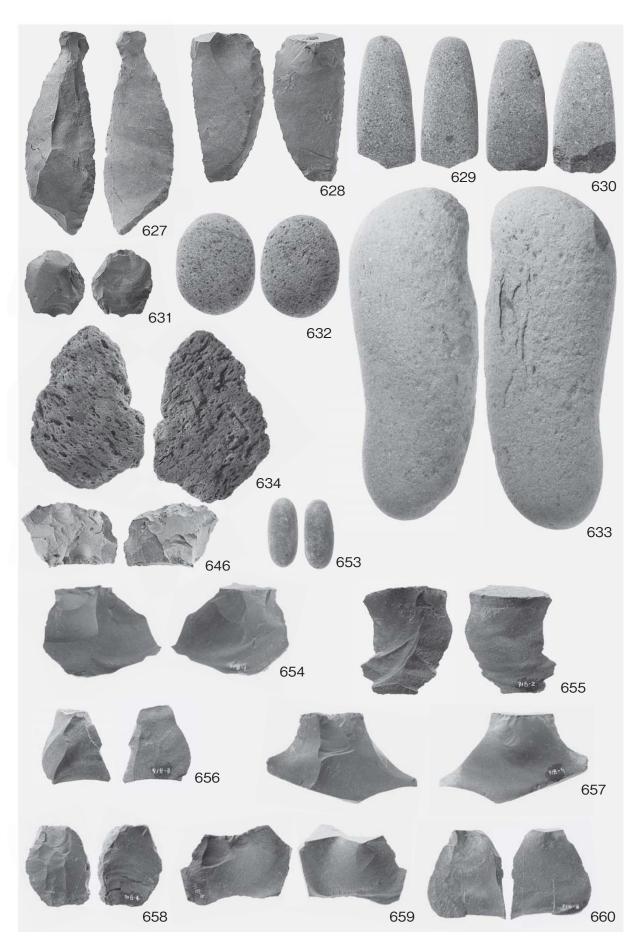
写真図版109 石器(1)



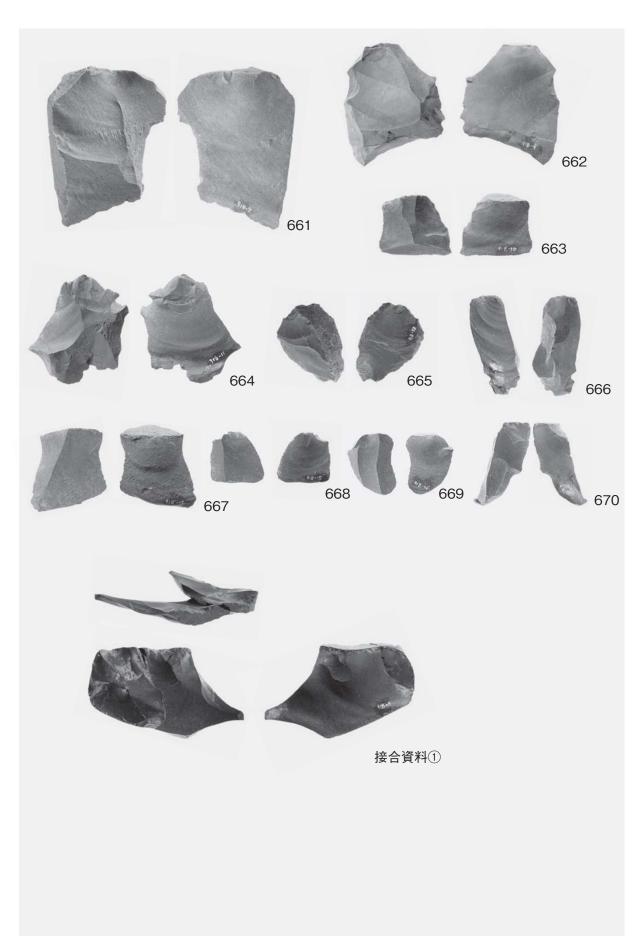
写真図版110 石器(2)



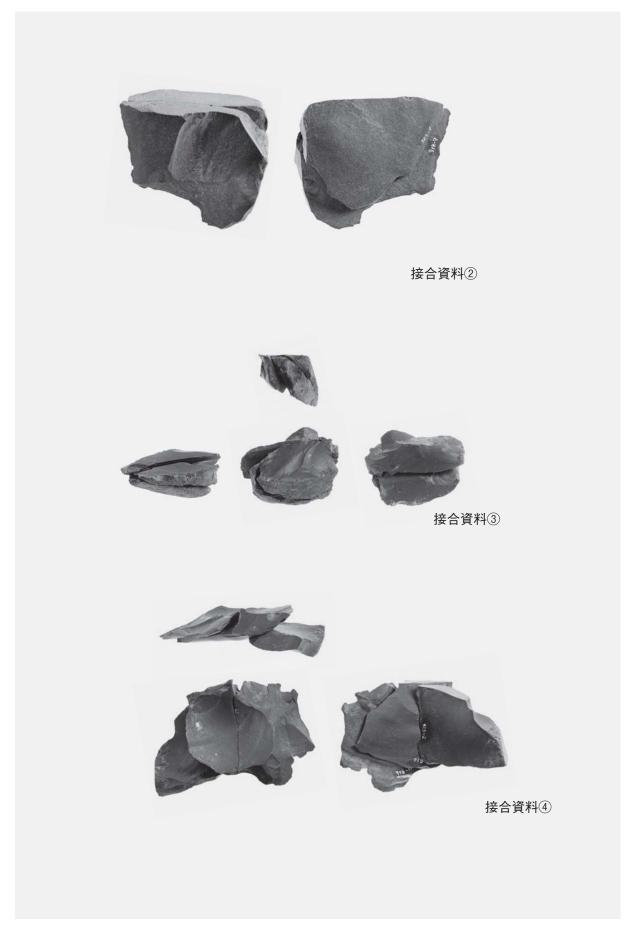
写真図版111 石器(3)



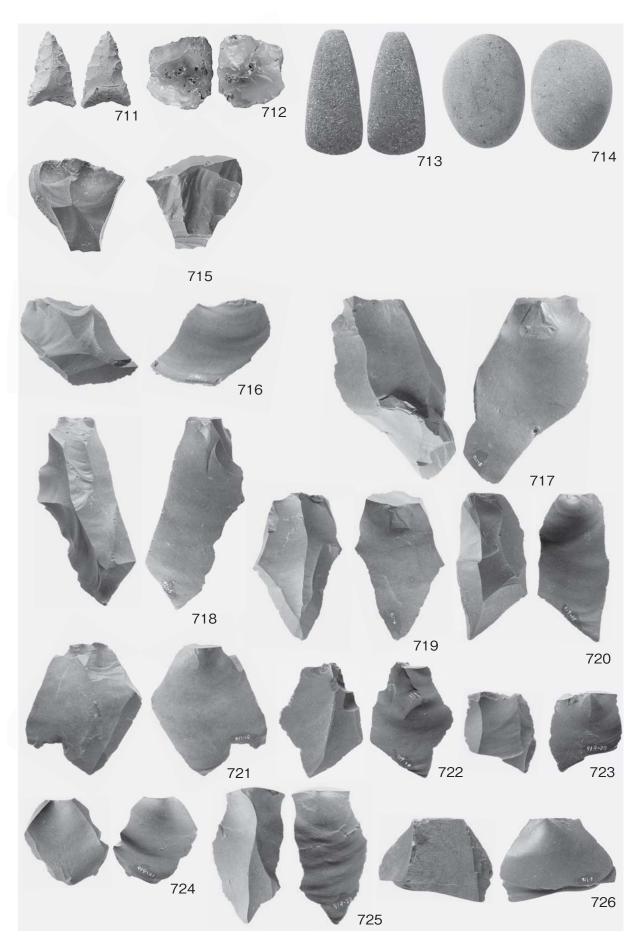
写真図版112 石器(4)



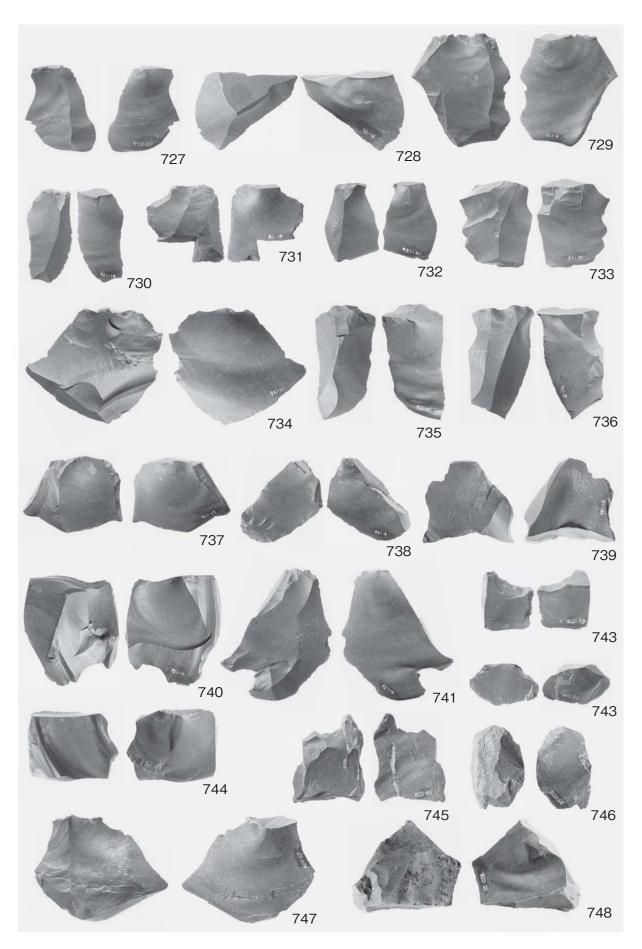
写真図版113 石器(5)



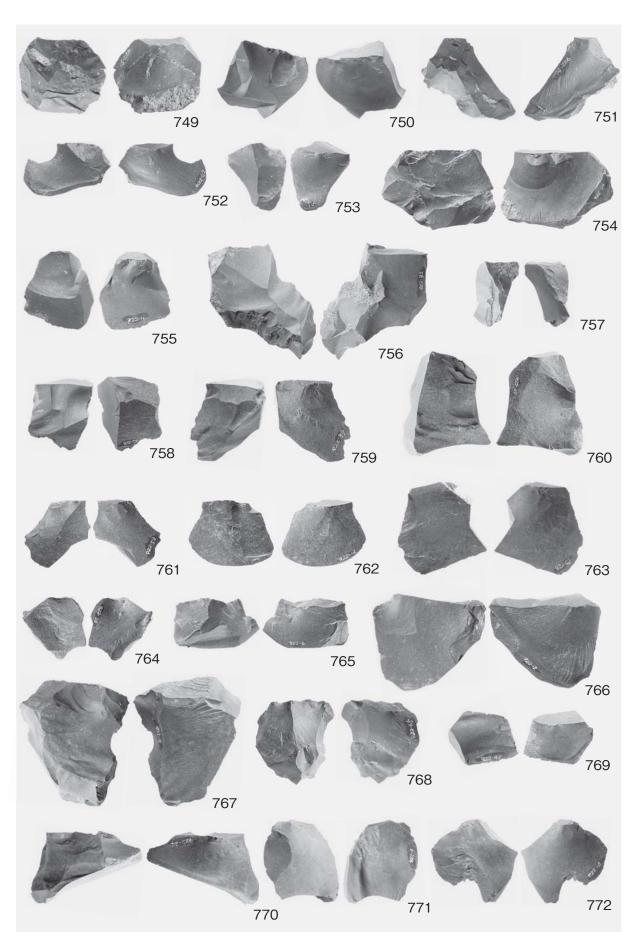
写真図版114 石器(6)



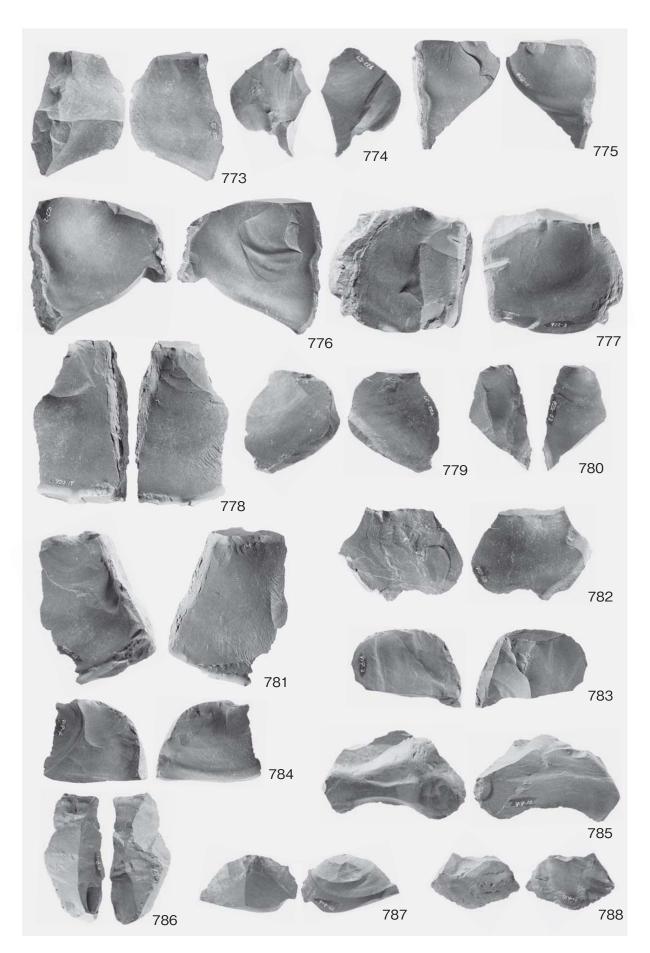
写真図版115 石器(7)



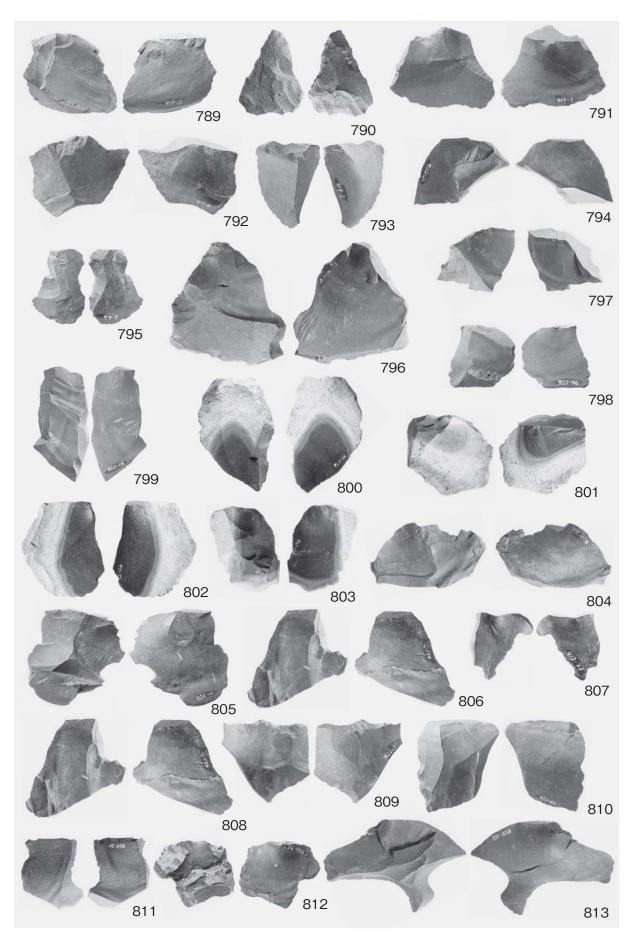
写真図版116 石器(8)



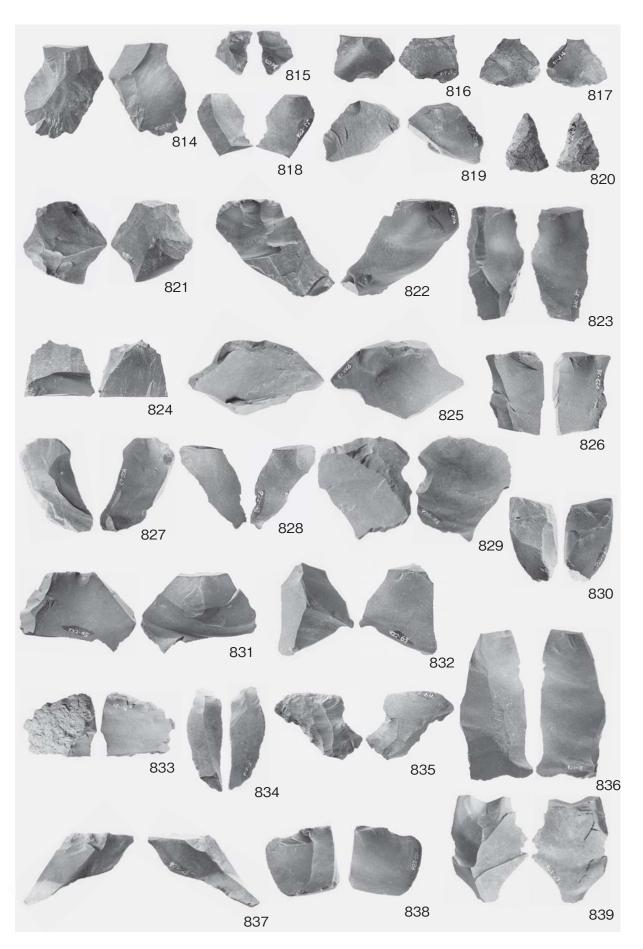
写真図版117 石器(9)



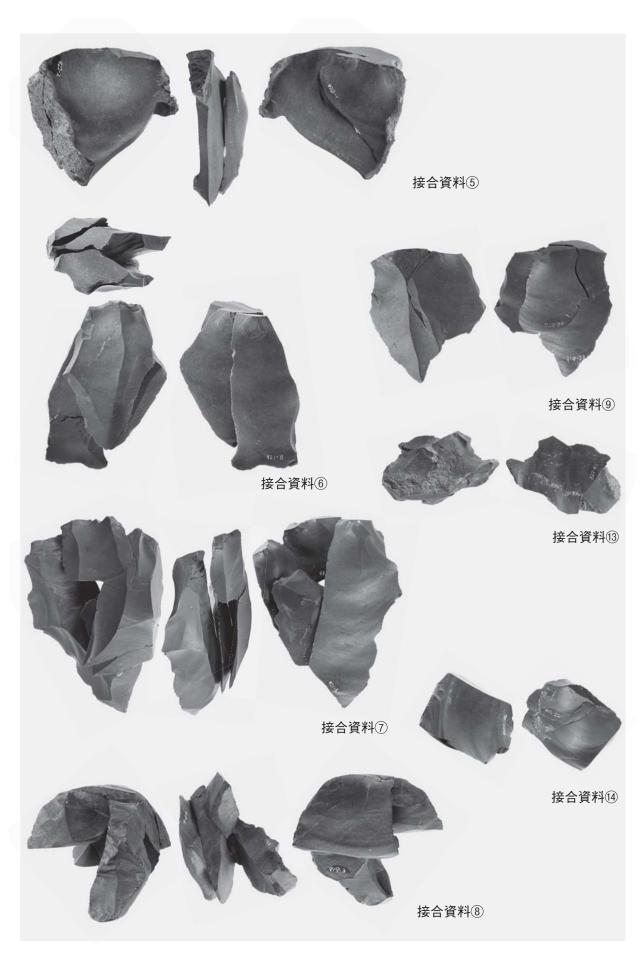
写真図版118 石器(10)



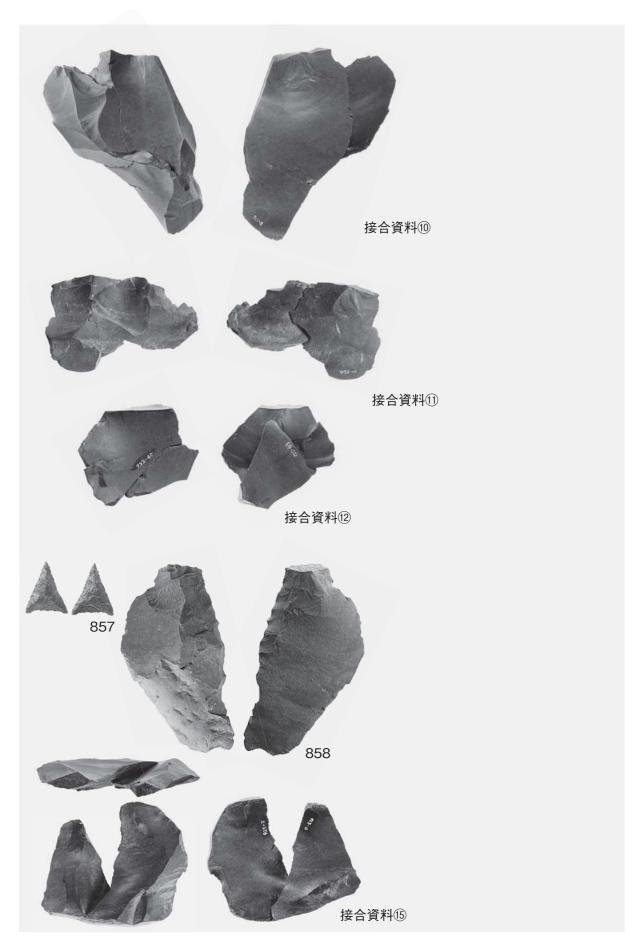
写真図版119 石器(11)



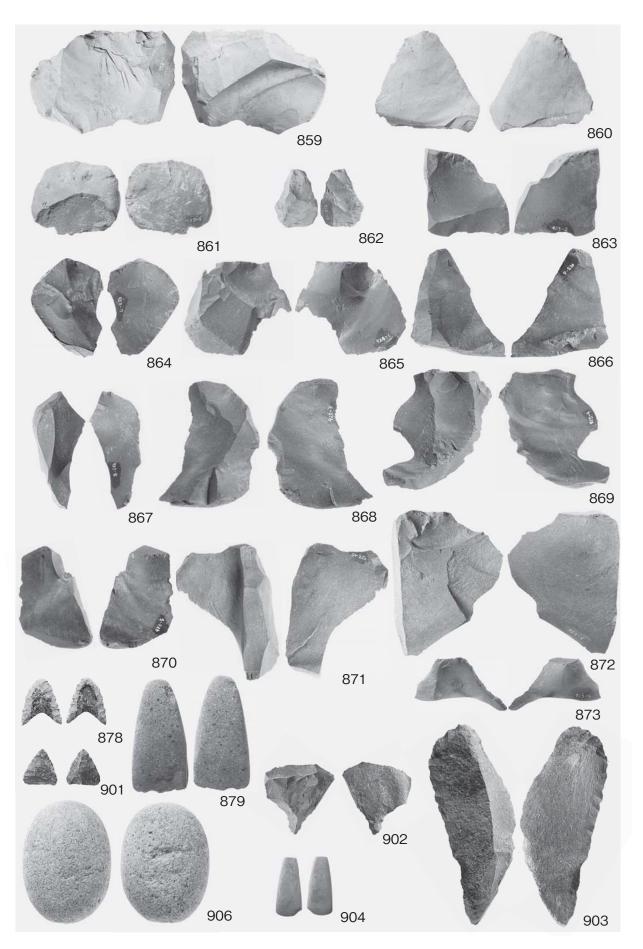
写真図版120 石器(12)



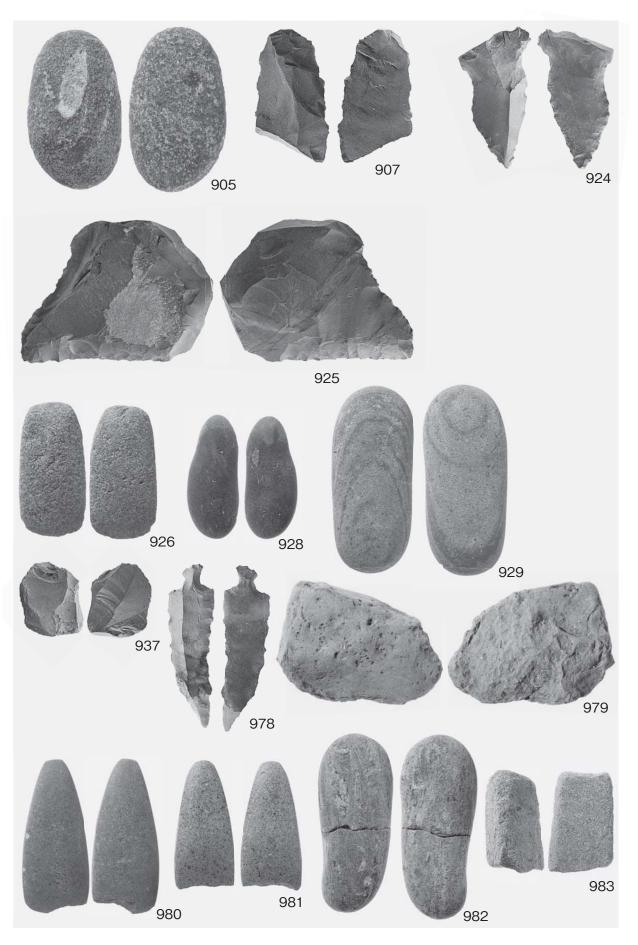
写真図版121 石器 (13)



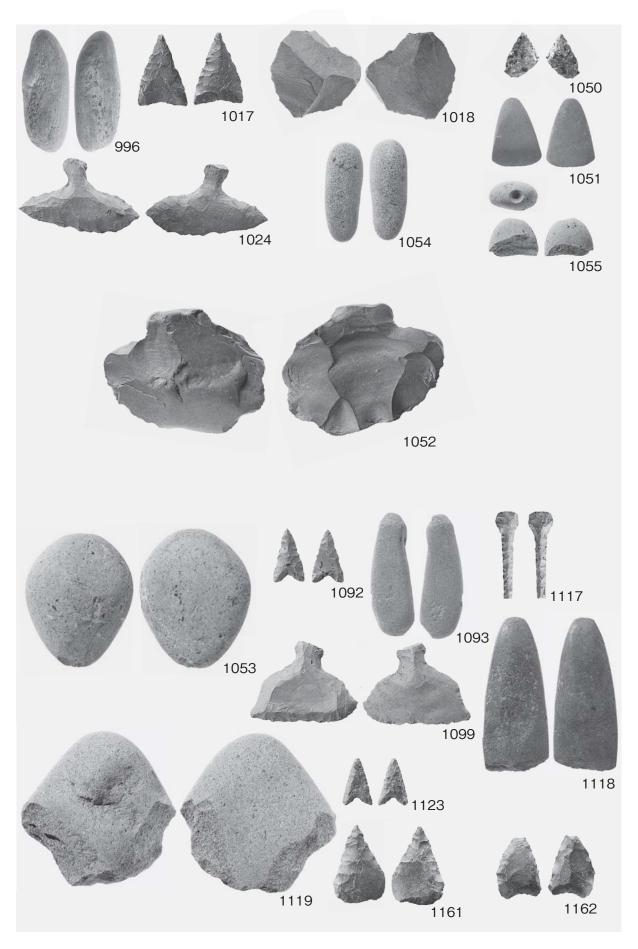
写真図版122 石器(14)



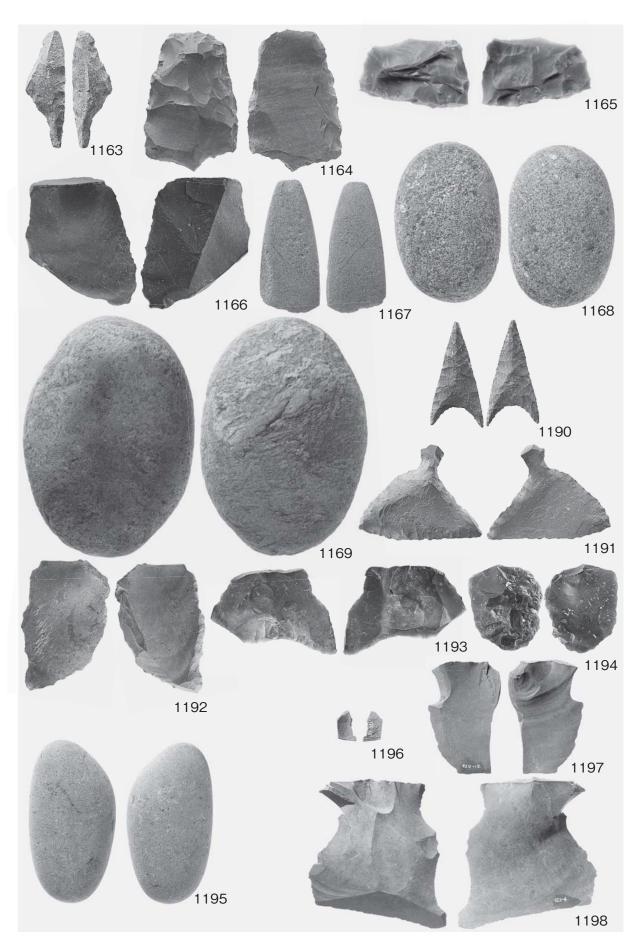
写真図版123 石器 (15)



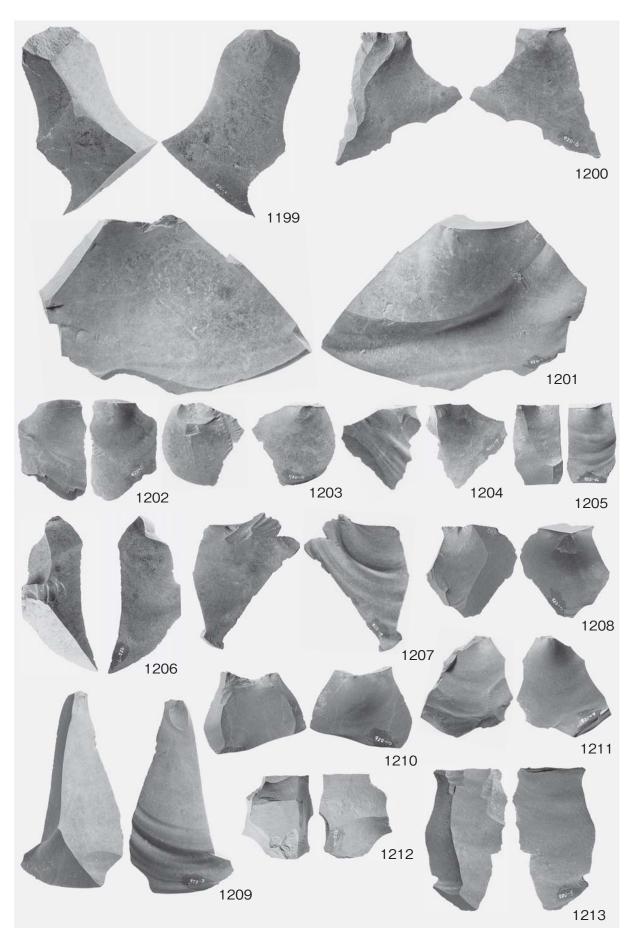
写真図版124 石器 (16)



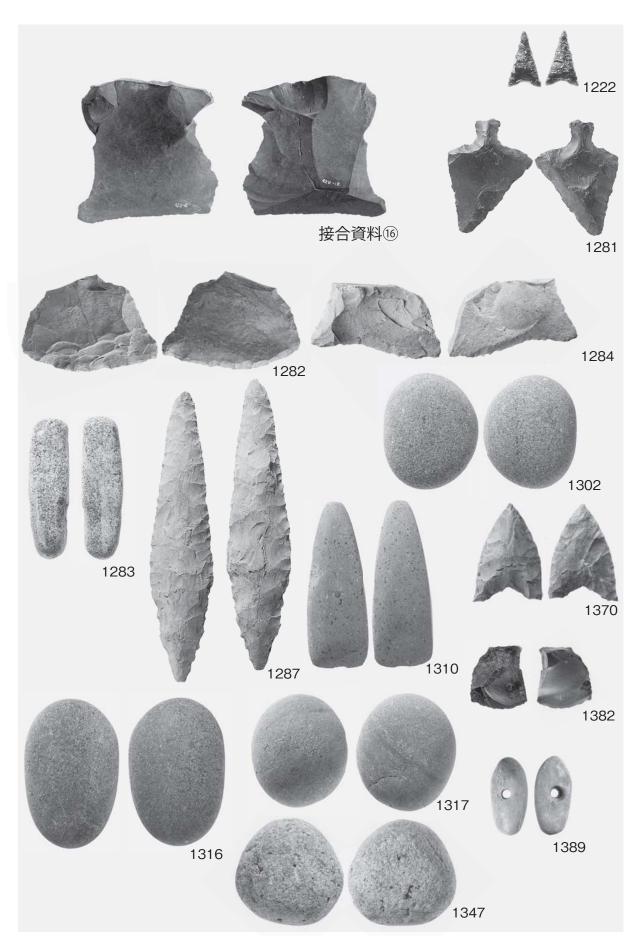
写真図版125 石器(17)



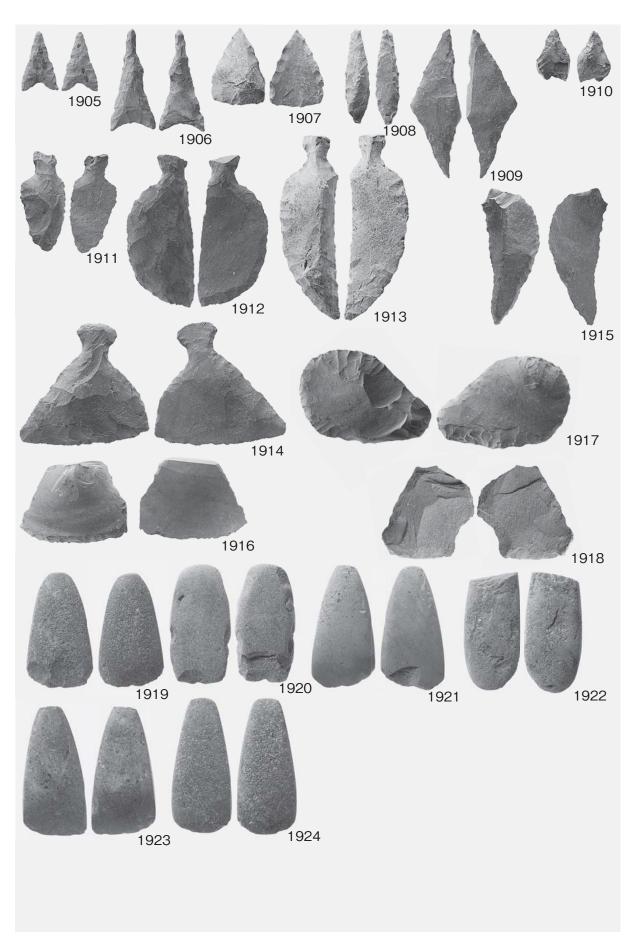
写真図版126 石器 (18)



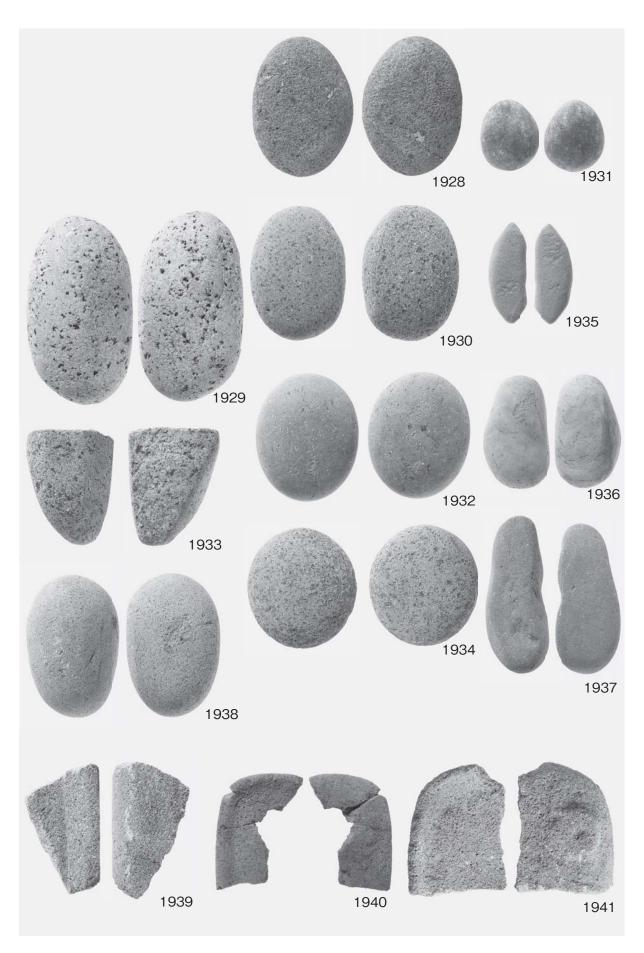
写真図版127 石器 (19)



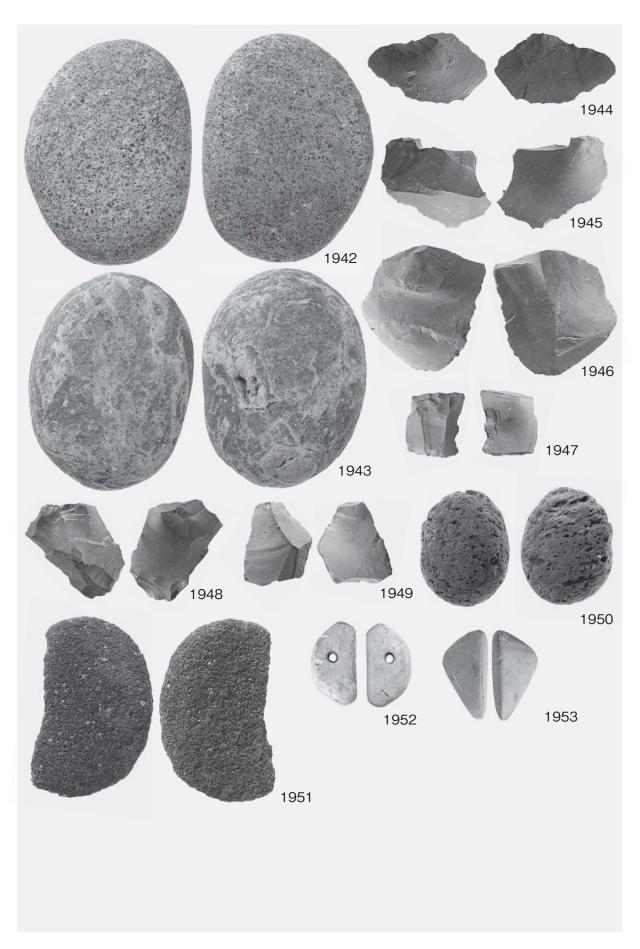
写真図版128 石器 (20)



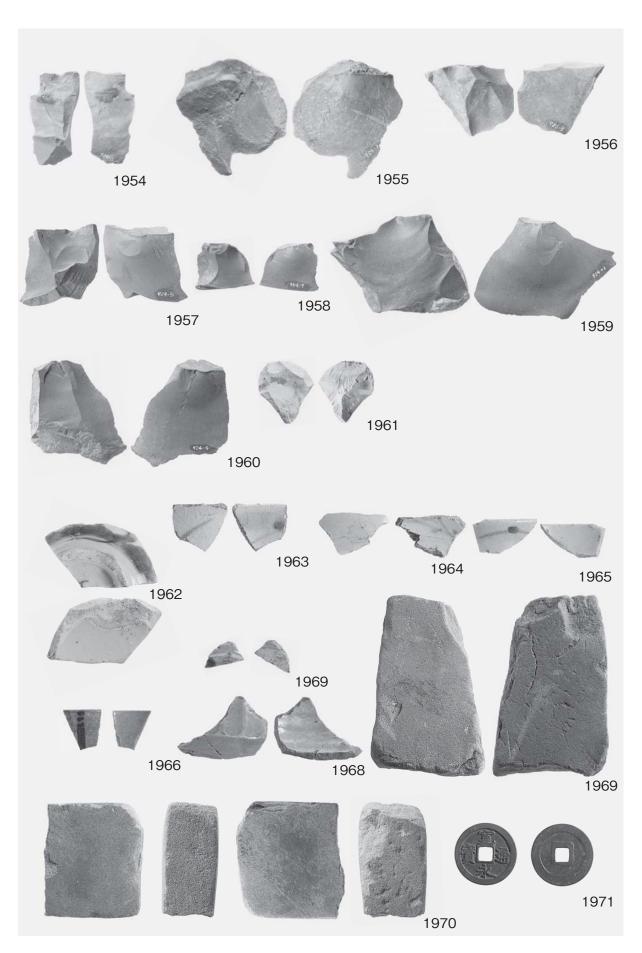
写真図版129 石器 (21)



写真図版130 石器 (22)



写真図版131 石器 (23)



写真図版132 石器(24)・陶磁器・砥石・銭貨

報告書抄録

ふりがな	なかのいせきはっくつちょうさほうこくしょ								
書 名	中野遺跡発掘調査報告書								
副 書 名	防災集団移転促進事業(崎浜地区)関連遺跡発掘調査								
卷次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第636集								
編著者名	須原 拓·小野寺 純也·久保 賢治·野中 裕貴								
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001								
発行年月日	2015年 3 月27日								
ふりがな	ふりがな所在地 一部では必要があた。」 さんりく 岩手県大船渡市三陸 またまりますがいめるなかできた。 町越喜・来字仲崎浜 121番地1ほか		コード		北緯	東経			
所収遺跡名			市町村	遺跡番号	0 / //	0 / "	調査期間	調査面積	調査原因
rhの いせき 中野遺跡			03203	NG22-2150	39度 37分 37秒	141度 54分 45秒	2012.10.01 ~ 2012.11.26 2013.04.04 ~ 2013.09.13	平成24年度 3,050㎡ 平成25年度 9,000㎡	防災集団移 転促進事業 (崎浜地区)
所収遺跡名	種別 主な時代		主な遺構		主な遺物			特記事項	
中野遺跡	集落跡	縄文時代前 期・中期	竪穴住居 住居状遺構 土坑 埋設土器 焼土遺構 柱穴	70棟 4棟 60基 2基 4基 110個	縄文土器(早・前・中・後期) 土偶(縄文中期) 土製円盤(前期・中期) 石器 石製垂飾品(中期)			縄文時代中期後~末葉を 主体とする大規模集落。 石囲炉・複式炉を伴う竪 穴住居跡を60棟以上検出。 前期・中期の縄文土器が 多量に出土し、また200 点を超える土製円盤や中 期後葉の土偶(頭部)、石 製垂飾品がみつかってい る。	
	集落跡	古代	焼土遺構		土師器				
要約	越喜来湾に面した東南向きの斜面に立地し、縄文時代前期前葉の小規模集落、また中期後葉~末葉にかけては60棟を超える竪穴住居で構成された大規模集落が展開する。傾斜地に立地するため、土砂崩れ等による削平は受けているものの、石囲炉や複式炉を伴う竪穴住居群を検出した。複式炉には埋設土器が付属するものが多い。該期の土器・石器の他、中期後葉の土偶(頭部)や土製円盤、また石製の垂飾品が出土しており、周辺地域も含め、拠点的な集落であった可能性が高い。								

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第636集

中野遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業(崎浜地区) 関連遺跡発掘調査

印 刷 平成27年3月17日 発 行 平成27年3月27日

- 編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 電 話 (019) 638-9001
- 発 行 大船渡市災害復興局集団移転課 〒022-8501 岩手県大船渡市盛町字宇津野沢15 電 話 (0192) 27-3111

(公財) 岩手県文化振興事業団 〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号 電 話(019) 654-2235

印 刷 川嶋印刷株式会社 〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21 電 話 (0191) 46-4161